

大津市歴史博物館調査報告書 6

大津百艘船万留帳 4

令和六年（二〇二四）三月

大津市歴史博物館

はしがき

大津市は、明治時代末年の『大津市志』の発行以来、数十年に一度、時代の要請に応じて市史を編纂してきました。その度に多くの古文書・歴史資料が調査され、その歴史情報が蓄積されてきました。

現在、市史編纂事業を引き継ぐ大津市歴史博物館では、館蔵・個人蔵を問わず、貴重な文化財の調査を通じて歴史文化の情報を発信しています。その中で、以前より有志の市民の方々のご協力のもと、古文書・歴史資料の調査・解読を進めてきましたが、令和三年（二〇二一）度よりその成果報告書を順次発行してきました。

この報告書では、これまでに引き続き、江戸時代に琵琶湖水運の中心的役割を担った船持仲間「大津百艘船」によって記録されてきた「万留帳」のうち、文化二年（一八〇五）から同五年（一八〇八）までの分をまとめました。これら留帳には、大津百艘船が対応した事案や物流の様子、大津代官や京都町奉行の要人との折衝、また寺社との贈答関係など、大津百艘船の活動が詳細に綴られています。

なお、最後になりましたが、本書の発行にあたり、解読・校正において大津古文書輪読会の皆様に多大なる御協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

令和六年三月

大津市歴史博物館

## 〔目次〕

|             |     |
|-------------|-----|
| はしがき        | 1   |
| 目次・凡例       | 2   |
| 一、「万留帳」文化二年 | 4   |
| 二、「万留帳」文化三年 | 34  |
| 三、「万留帳」文化四年 | 72  |
| 四、「万留帳」文化五年 | 104 |

## 〔凡例〕

一、本史料集は、天津市歴史博物館が所蔵する重要文化財「天津百艘船関係資料」のうち「万留帳」の文化二年から同五年の四冊分を翻刻したものである。

一、史料解説にあたっては、天津古文書輪読会の各氏の協力を得て、天津市歴史博物館の五十嵐正也、高橋大樹、文化財保護課の吹上竜司、天津市都市計画課の杉江進が原本照合を含めた校正をおこなった。また本書の編集は同館高橋大樹が担当した。

一、翻刻にあたっては、原本の体裁を尊重しながら、組版上の事情により、追込み形式とした。また、平出や台頭、欠字については省略した。一、翻刻した文字について、変体仮名は現行の仮名に改めたが、江、而、与、者、茂などはそのままとした。また、ㇿ（より）以外の合字は仮名に改めた。さらに、旧字体・異体字については、固有名詞を除き、常用漢字に改めた。

一、虫損・汚損・欠損等による判読不能の文字については、その字数分を□で示し、字数不明の場合は「―」として表記した。

一、翻刻にあたり、適宜、読点を施した。また、傍注について右側に（―）で括弧して示した。その際、誤字と思われるものは正字を付し、原本どおりの場合は（ママ）、（衍）とした。さらに、墨消し（ミセケチ）の場合は、その文字に網掛けをほどこしてある。

一、原本上で図示されている図面については、トレース図を掲載した。トレース図は、天津市歴史博物館職員の大村紀子が作成した。

一、史料には、賤称・蔑称などの差別用語とされる言葉が使用されている場合があるが、当時の社会情勢を正しく認識するためそのまま表示したものであり、差別を容認するものではない。読者においてはその点をよく理解され利用されたい。

〔謝辞〕本史料集の編集・発行にあたり次の関係者より協力を得た。

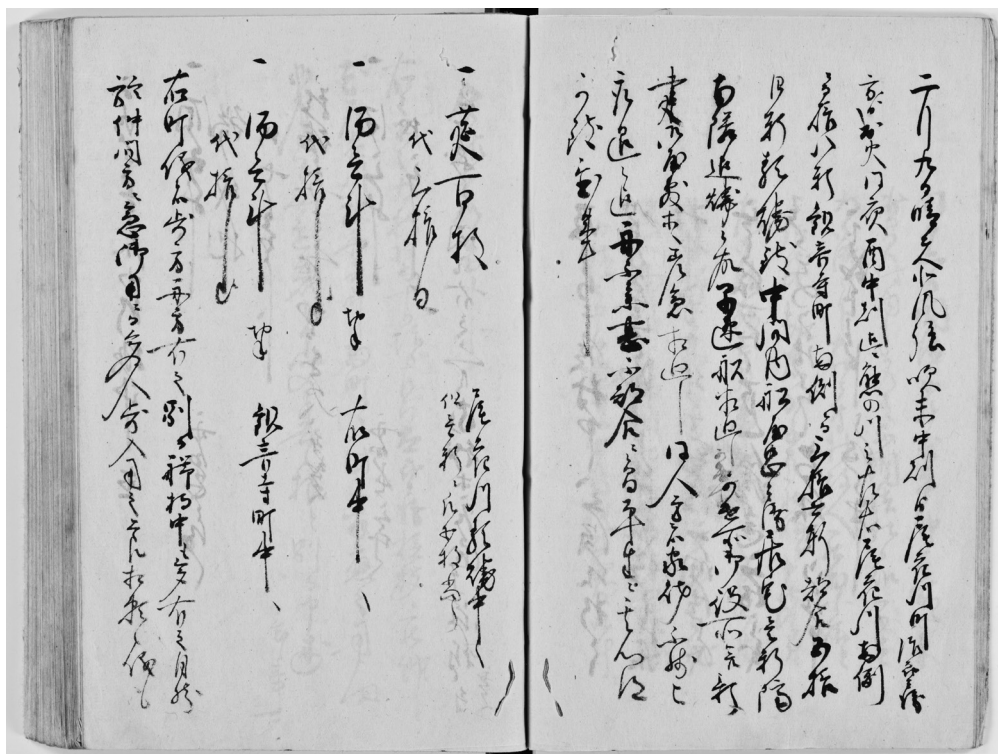
東幸代（滋賀県立大学人間文化学部教授）



「万留帳」文化3年（表紙）



「万留帳」文化2年（表紙）



「万留帳」文化4年

# 一、「万留帳」文化二年（二八〇五）

（表紙）

乙丑 文化貳年

万留帳

〔<sup>（異筆）</sup>八十〕

正月吉日

（表紙見返し）

目録書奥二記、

（本文）

正月二日、当所御礼

石原庄三郎様

金子貳百足  
目録台下札付

元々

芝山泰蔵様

〃

七里佐六郎様

町懸り

石丸三伍右衛門様

勝手方

山田仲助様

舟方

内堀繁太様

舟方助役

篠田牧太郎様

右六軒へ金百足つゝ、

小頭

赤井平六様

〃

佐久間正蔵様

目付

高橋角左衛門様

〃

多胡甚助様

〃

多賀喜曾太様

右拾軒へ白銀壹両つゝ、

吉本弥四郎殿

山本兵五郎殿

右貳軒へ鳥目貳拾足つゝ、

御足輕 半七殿

小遣 梅八殿

藤七殿

〆三人へ鳥目貳百文つゝ、

〆金貳両 五百文壹

銀壹兩拾□ 貳百文六

白崎久太夫様、御蔵番三人、組屋敷不残、御門内御手代衆、平

蔵町年寄

右八手札計二而相勤申候、

治郎左衛門、忠助、供新八

舟方下

北出雲平殿

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

〃

小野惣九郎殿

町代

堀猪三郎殿

〃

遠藤重五郎殿

御門吟助殿五百文

御袋へ貳百文

三日、京都御礼

西御奉行

曲渚和泉守様

金子三百足

目録台

下ヶ札付

御用人

増田郷八様

椎名一右衛門様

星野半右衛門様

佐藤多仲様

原田仙助様

矢沢龍右衛門様

鈴木順平様

芝忠五郎様

右八軒へ銀壹両つゝ

東御奉行

森川越前守様

金子三百足

目録台

下ヶ札付

御用人

小柴宗右衛門様

村田直右衛門様

鈴木又兵衛様

柴田栄蔵様

石川与左衛門様

松野小右衛門様

御勝手

村田忠兵衛様

伊藤右内様

右八軒へ銀壹両つゝ

西御公事方

深谷平左衛門様

千賀与三右衛門様

不破伊左衛門様

浅賀卯兵衛様

入江吉兵衛様

上田八蔵様

本多新左衛門様

菊地次左衛門様

熊倉恵助様

柏原治部右衛門様

右五軒へ金百足つゝ

廣瀬左野右衛門様

東御公事方

上田弥右衛門様

木村清右衛門様

本多金右衛門様

山田劔治郎様

右五軒へ金百足つゝ

酒井宗助様

右七軒へ銀壹両つゝ

//公事下

中川定右衛門様

喜多尾八郎右衛門様

森儀左衛門様

中川奎左衛門様

櫛橋平蔵様

平尾安左衛門様

森善右衛門様

末吉新左衛門様

右八軒へ銀壹両つゝ

上町代

田内与助殿銀貳両

下町代

藤沢傳六殿貳百文

藤村佐一殿貳百文

上町代中へ五百文

下町代中へ五百文

宿鍵屋佐助へ三百文

追分丸屋四郎兵衛へ百文

✂金三両<sup>三</sup>歩

銀貳両壹包

錢三百文六

//百文二

右之通孫右衛門、勘三郎相勤ル、供大吉

銀壹両三十<sup>二</sup>包

錢五百文貳つ

//貳百文三つ



一、篠田牧太郎様

南鐐毫片  
金百疋

右者舟方助役二被仰蒙候二付、右百疋肴料として治郎左衛門持参、御挨拶申上候事、

正月十一日

正月十一日、例之通帳かため祝儀、役人不残出勤、朝飯有之、尤六兵衛、勘三郎兩人者、無扨用事二付不参之事、

まんちう百

上組小船中

諸白

酒貳升

下組小船中

〃

貳升

関船治兵衛

諸白貳升

坂本新兵衛

諸白三升

尾花川舟方式人

するめ廿把

右之通持参有之、上下小舟、尾花川共、勝手ニをひて酒出し申候事、

関舟治兵衛、坂本新兵衛兩人ハ勝手方手伝致申候、

正月十五日、芦浦御礼

一、観音寺様

扇子三本人壹箱、昆布のし包添

但し扇子箱くりあし台

右当年も御幼年二付御逢無之、御酒、御節子等者例年之通被下置候事、

御家中

西川五郎兵衛様

久松清右衛門様

扇子三本人壹箱つゝ、

片岡喜右衛門様

右之通三郎兵衛、忠助相勤申候、供与八

正月廿一日、例年之通貴布祢御神酒、役人不残相祝イ候事、

大津

橋本町

差紙 御役所

船大工源助

右小使藤七殿持参二付、平兵衛へ為持遣し、受取置候、

二月六日四時半時

二月五日、七里佐六郎様御内室御死去有<sup>被成</sup>之候二付、為香典南鐐毫片翌日与治兵衛致持参候、

覚

一、炭貳俵

右者朽木兵庫之助様を被下置、慥受取申候、已上、

文化二乙丑年二月十二日

百艘船年寄

升屋市左衛門殿

一、從御役所堅田行之御差紙壹通御状箱入、二月十四日七時半時勘三郎受取参ル、堅田藤七舟明朝出船二付相渡、

一、野田問屋源藏船中絶致有之候処、丸船壹艘持立申度段、先達而三ヶ浦江頼出候付、相談之上差赦遣、其後当御役所江願出可申候、同村庄屋善三郎義市左衛門方内縁も有之趣二付、願書奥印不承知之旨二而、段々延引相成候段、源藏を宿渋谷屋六兵衛を以中間江被相頼候間、当二月十日比以書状ヲ源藏、市左衛門同道二而当月廿日迄二被罷登

候様申遣候処、二月廿三日右兩人同道ニ而被罷登候故、忝人つゝ別々ニ相招承候処、於爰許二者差而変義も無之、勿論市左衛門も格別故障被申立候様子も不相見候二付、兩人忝所ニ相招、源藏る市左衛門へ相頼、庄屋善三郎方へ挨拶為致、無難ニ奥印被致候ハ、可然、無左候而ハ、此上三ヶ浦る庄屋へ懸合候様ニ相成候而ハ、品る庄屋殿役前も難相立義出来候而ハ氣之毒ニ存候間、何分承知在之様取計可被申、左候へハ兼而市左衛門るも被相頼候、当所る下り荷物も其節相談取ル事済致遣候様、与次兵衛、太郎兵衛立会市左衛門へ申聞候所、随分御尤之義候間、歸村いたし、市左衛門る挨拶ニ而事済いたし候様、尚又源藏るも相頼ニ市左衛門も承知ニ而歸村被致候、尚否哉之義被申越候様申遣候事、

三月三日、御札

石原庄三郎様

鳥目百足  
木札付

元々

芝山泰蔵様

〃

七里左六郎様

〃町掛り

石丸三伍右衛門様

勝手方

山田仲助様

船方

内堀繁太様

船方助役

篠田牧太郎様

右六軒へ鳥目五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、組屋敷不残、北出氏へ手札ニ而相勤候事、

太郎兵衛、源右衛門、供五兵衛

四月朔日、御役所る呼ニ参り候処、孫右衛門罷出候処、同十九日例年之通日吉御神事之船御配符四箱、外ニ御配符壹通、御役所ニ而内堀様御渡シ被成受取、夫々相達し候趣、左ニ記、

一、御配符壹通

大津百艘

船持中

但御文言例年之通ニ候間略ス、

一、船割賦壹通

山田浦  
矢橋浦 へ

御文言例年之通り故略ス、

一、同 壹箱 大浦始り

今津

海津

塩津迄

御文言例年之通、

外ニ舟方御手代内堀様、牧野九郎兵衛様御添状壹通

御文言例年之通、同箱入

一、御廻状壹箱

坂本始

北小松迄、

■朔日七つ時石川清七江相渡、

御文言例年之通、

一、御廻状壹箱

矢橋始、

朔日廻り新八上番船江持参、

此御文言左之通り、

山王御神事之節、神輿船ニ寄近年雇水主致乗船、還御先着励合之砌



水主共不法之儀有之、相互二怪我人等致出来候由に茂相聞候付、右御神事之節寄進乗、或者助水主等二罷出度もの有之候共、往古々定来候神輿船壹組二、加子貳拾人之内へかり候儀者各別、右之外壹人茂神輿船へ乱乗候儀致間敷旨、前以申触候趣弥堅可相守候、若相背候もの於有之者、急度可及沙汰条可得其意候、

右之趣船持并水主働いたし候もの共へ不洩様可申聞候、此廻状浦名下令請印、早々順達、留り所可相返候、以上、

印」丑四月朔日

御役所印

大津

矢橋方八幡船木迄

右浦々

庄屋

船年寄

一、是迄船方内堀繁太様、元々加判、船方兼帯、牧野九郎兵衛様船方助役、右之趣被蒙仰候旨、北出氏方被申聞候二付、四月三日内堀氏江金百疋、牧埜氏江南鐙壹片、与治兵衛持参、恐悦申置候事、

一、四月八日、沖之嶋方鱒三本、例年之通持参二付、貝半江預ケ候事、

一、四月十日、從勢田船年寄ウグヒ、例年之通持参被致候付、役人中家別三つ宛配り候事、

一、四月十一日、町代部屋方彦根へ海上里数書付二致印形差出シ候様申参り候二付、左之通差<sup>(出カ)</sup>□候事、

覚

一、彦根江 海上凡十五里  
右之通御座候、以上、

丑四月十一日

百艘印

惣年寄

町代

御衆中

四月拾日、山王御神事三ノ宮神輿舟海津嘉助、治左衛門、若宮へ着岸之上拝仰之内壹人相見得不申、段々吟味有之所死骸相知し、右船ハ勿論、塩津舟楫かゝせ候故疑掛り、彼是隙取六ヶ敷可相成処、致病氣二連レ歸り候様相成、無別条相済申候事、当御役所二も御存無之相済申候、乍併内分二而内堀様へ病氣之趣計相届ケ、委細ハ不被申上、北出氏へハ内分二而、委細御咄し申上候様承り候事、  
右二付為見舞と、孫右衛門今津、塩津当所宿へ被参候事、海つ宿万屋四郎右衛門、  
但し法師ハ九人之内と聞、

一、四月廿三日、当津善左衛門船八幡行荷物積入金蔵堀二廻り置、翌朝廿四日敷方少々水入塩荷ぬれ候、わ藤分嶋廿俵ぬれ、大六分嶋三<sup>①</sup>五俵ぬれ、即刻庄兵衛船之八幡積受小口故、右之ぬれ塩定メ銀目之外二積入、八幡江出船いたさせ候、則問屋大坂屋六郎兵衛、和邇屋藤左衛門、船主善右衛門、八幡揚ヶ先江断二被参候所、約束無之塩などハ彼是申し候へ共、達而断を申船賃被相渡候筈二相済申候、五月二日善左衛門会所江右之趣相済候訳届被参候、

端午

上巳御例

石原庄三郎様

青銅百疋

元々

芝山泰蔵殿

勝手方

山田仲助殿

船方

内堀繁太殿

元々

石丸三伍右衛門殿

〃

七里左六郎殿

船方助役

牧埜九郎兵衛殿

此分鳥目五拾疋宛持参

右之外御門内御手代衆、組屋鋪不残、新建御住居之分不残、船方下北出氏、名札二而相勤申候事、

与治兵衛、孫右衛門、供五兵衛

一、五月七日、大坂御目附様石山筋供御之瀬御順見御越被成候二付、例之通小舟三艘差出候事、

坂本小太夫様

榊原隼之助様

右二付例之通孫右衛門、六兵衛出向相勤ル、供与八

当四月下旬、たわらを夥敷積入候艀舟、風呂屋関崎を西る東へ押通り候二付、呼かけ相糺し候処、御蔵番衆内田喜平次殿方る膳所新堀

晒屋迄積越候旨申之二付、然らハ御達しも可有之義二候へ共無其儀候間、右艀相違無之事二候ハ、書付二而も申請来り候様と申聞候二付、加子之もの即刻内田氏江其由申参候処、前々方る為積来り候へ共百艘方へ斷申遣候例無之間、子細有<sup>ら</sup>ハ百艘役人何れ成共罷越可被申聞と内田氏被申居候趣、加子申之二付、詰合之了簡切二も難計存、まつ其儘二而歸舟為致置候処、又候五月十一日二も有之候二付、中間相談之上即日内田氏へ次郎左衛門罷越候処、折節上京被致留主故、御内義へ有増噂致候処、此方へ限為積候二而ハ無之、中間内三軒方る為積候、則今日之分ハ氣山長十郎方る之積入二有之、御蔵番三軒共同意之事二候間、氣山氏へ参引合呉候様と被申候二付、直様氣山氏へ得其意申談し候趣ハ、各々様方三軒より御積せ被成候上皮くずたわら或ハ畢竟纔の事二も有之、勿論折二振拙者共舟難風等之節ハ御世話二も相成候義二候へ者、乗前錢等聊申請候所存ハ無御座候間、何時成共御勝手二ハ為積被成可然候へ共、其分り無之候而者紛敷相成候間、已来ハ俵幾弘と歟何十枚と歟、何村誰艀二積遣し候と申義御書付二被成、其加子へ御渡し被置、此書付を百艘舟会所へ持参致候上二而歸舟仕候様と被仰付被下度段申入候処、氣山氏被申候ハ、右俵くず上皮ハ自分共扶持切米同様之品二而、前々方る毎年水揚仲衆へ申付積候義も有之、又ハ先艀二積遣候義も有之候へ共、是迄何之差障りも不被申出義二、当年二限彼是被申聞候段、如何々敷様存居候処、只今被申聞候趣二而ハ随分相聞へ、尤之事二候間、已来ハ被申聞候通二取計候様、此方共三軒共申為合置可申旨御申被成候事、右ハ後年為心得如此留書仕置候、尤俵之義ハ扶持切米同様之品故如此二候間、若又後年積入之品二寄如何様共及相對可然候事、

乍恐口上書

一、私共仲間年寄役之内三郎兵衛儀、去々亥八月病死仕候処、折節仲間方無人数二付、跡役之義御断奉申上置候処、今般右跡役年寄孫右衛門へ為相勤申度候間、此段御届奉<sup>奉申上候</sup>上候、乍恐御聞濟被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

文化二年

丑五月廿日

百艘舟年寄

与次兵衛印

次郎左衛門印

太郎兵衛印

大津

御役所

右書付即日年寄与次兵衛持参、御役所へ罷出舟方御手代内堀繁太様へ差上候処、此旨申上置候様被仰渡候事、

一、五月廿一日、如旧格之貴布祢神酒、役人不残打揃朝飯有之候事、

同日、孫右衛門年寄役二付、与次兵衛、治郎左衛門、太郎兵衛盃相濟、同日、忠治郎家督相濟、已来忠兵衛名前相譲り、新忠兵衛右平と改名被致候段、則坂本町組<sup>〆</sup>披露有之、一統承知致、右祝儀酒式升被差出候事、

同日、北野町組市兵衛義、去五月<sup>〆</sup>出勤有之、内九月<sup>〆</sup>見習有之候処、当神酒<sup>〆</sup>本役二相成候事、

尤去正月<sup>〆</sup>手伝二被罷出候へとも、盃ハ去五月二相濟候故披露計二而盃ハ無之候、

一、堅田町組庄兵衛義、去子五月晦日<sup>〆</sup>手伝二被罷出候処、当五月神酒より見習二相成候、役人不残盃相濟、

但是迄組々<sup>〆</sup>惣代として壱人宛盃致候義も有之候へ共、堅田町組ハ別段組之盃無之由承候二付、此度ハ役人共組一統盃いたし候、

右二付酒式升、鯉組被差出候、

尤孫右衛門年寄成二付、酒式升被差出候、

右肴ハ孫右衛門、庄兵衛組合二而被差出候、

右肴兩種とも料理いたさせ、当座二統祝ひ申事、鯉ハさしミ、あら吸物、うなぎかばやき二成、

一、石山寺月見亭普請二付、当所<sup>〆</sup>石数五百六拾計、石山村艀舟を以四月中旬引取被申候付、其後中間相談之上石山庄屋、年寄、年番役所湖月坊江段々及引合、已来浦法相立候様熟談相調申候、委細右留書ハ別二拵候間、爰二不記、

一、五月廿六日、從御役所御茶壺之御配符式箱参ル、則左之通、

一、艀舟八艘、巾三尺八寸<sup>〆</sup>四尺

但壺ヶ村<sup>〆</sup>式艘宛

右者御茶壺下向、来月五日宇治御出立、同日守山宿御止宿、翌六日野洲川渡舟之御用候付、丈夫成舟致吟味、洗之柄杓壺本宛舟毎二入置五日昼時迄二野洲川渡場江舟差出可相勤、此配符令請印、昼夜二不限早々順達、留り所<sup>〆</sup>可相返候、以上、

大津

〔御印影字〕  
丑五月廿六日

〔御印影字〕  
御役所

小濱

吉川

須原

比留田

右村々庄屋

船年寄

一、艀舟五艘、但三尺八寸の四尺

但壹ヶ村の壹艘宛

右御文言前同事略之、但横関川渡舟、

野村

江頭村

大房村

南津田

舟木

右村々

庄屋

舟年寄

小濱江三百五拾文 先取

野村江四百文 々

右二箱飛脚和助遣入、五月廿七日朝出立、

五月廿八日

一、筭拾本

右者例年之通三井寺ヨリ到来、

一、船方内堀繁太様是迄御屋鋪御門内御住宅御座候処、当六月九日中保町新建御屋鋪江御替宅被成候二付、右御祝儀為樽代金百足十一日二与次兵衛持参、

例年之通湖上船増減入念相改帳面二記、来月朔日の十日迄二持参可致候、遅滞有之間敷候、此配符令請印早々順達、留り所可相返候以上、

丑六月十五日

大津

御役所

大津浦始

川道終

庄屋

舟年寄

即日右之趣貸舟屋中へ通達し置候事、

已上刻坂本四郎兵衛舟へ遣入、

同 壹通 御文言略入、

右同断

已下刻松本村へ五兵衛為持遣入、

松本浦始

伊庭終

一、六月十九日、從町方御役所明廿日四つ時罷出候様申来り、則翌日三郎兵衛罷出候処、近日吾妻川浚申付候、依之明廿一日見分致候間、上ミに準し浚候様被仰渡候、

一、廿一日、嶋関へ与次兵衛罷出待受候処、石丸様、川嶋文左衛門様、町代堀猪三郎殿御越被成、川筋御見分相済、嶋関会所二而暫御休足被成候、尤俄大白雨雷鳴いたし、川下迄ハ御出無御座候、尤立会场所迄ハ間数御改被成候へとも、夫々下ハ<sup>湖水際高低ニより</sup>とても間数不相定候二付、御改無御座候旨申上候付、此度も御改ハ無御座候事、

六月廿八日

一、素麵貳拾把

右者例年之通り三井寺の暑中為見舞到来二付留置申候、

六月廿九日、京都暑氣御窺

西御奉行

一、曲渕和泉守様

金子貳百疋

目錄台

下ヶ札附

御用人

増田郷八様

御取次

椎名市<sup>一</sup>右衛門様

星野半右衛門様

佐藤多仲様

鈴木順平様

矢沢龍右衛門様

芝忠五郎様

大森範兵衛様

右八軒手札計

東御奉行

一、森川越前守様

金子貳百疋

右同断

御用人

小柴宗右衛門様

御取次

村田直右衛門様

鈴木又兵衛様

松野小右衛門様

御勝手御用人

柴田栄蔵様

村田忠兵衛様

伊藤右内様

榊原重兵衛様

右八軒へ手札にて

西御公事方

同下

深谷平左衛門様

千賀与三右衛門様

不破伊左衛門様

浅賀卯兵衛様

本多新左衛門様

上田八蔵様

熊倉恵助様

菊地次左衛門様

入江吉兵衛様

柏原治部右衛門様

右白銀壹両宛

廣瀬左野右衛門様

酒井宗助様

右手札計

東御公事方

山田劔次郎様

同下

中川李左衛門様

上田弥右衛門様

末吉新五郎<sup>左衛門</sup>様

木村清右衛門様

喜多尾八郎右衛門様

本多金右衛門様

森儀左衛門様

右白銀壹両つゝ

櫛橋平蔵様

平尾安左衛門様

中川定右衛門様

中尾勇右衛門様

右八軒手札計

上町代田内与助殿、白銀三片

若狭屋八兵衛殿、刺鯖貳さし

右之通治郎左衛門、六兵衛相勤申候、供五兵衛

七月二日、当所暑氣御窺

石 庄三郎様

素麴三拾把

白台 包のし

御町役

芝山泰蔵様

小頭

佐久間正蔵様

//

目附

七里左六郎様

高橋角左衛門様

御勝手方

多胡甚助様

山田仲助様

多賀喜曾太様

舟方

×四軒十五わつゝ

内堀繁太様

元々

石丸三五右衛門様

舟方助役

牧野九郎兵衛様

〆六軒廿把つゝ

右之外御門内御手代衆、北出雲平殿へハ手札計ニて相勤ル、

与次兵衛、忠助、供五兵衛

覚

一、金五百足

但し当町河むら屋喜助殿持参被致候二付、此通相

一、白銀壹枚

認メ差遣し申候事、

右者從御本山被下置、慥ニ請取申候、以上、

文化貳年丑七月六日

百艘年寄印

当津十日講

御肝煎中

七夕御礼

石原庄三郎様

青銅百足木札付

元々

芝山泰蔵様

〃

七里左六郎様

〃

石丸三伍右衛門様

御勝手方

山田仲助様

船方

内堀繁太様

船方助役

牧野九郎兵衛様

右六軒江島目五拾足つゝ

右之外御門内御手代衆、組屋鋪不残、北出氏へハ名前札計ニ而相勤申候、

太郎兵衛、六兵衛、供平兵衛

一、六月廿八日、肥前町并筒屋宗七と申者、唐崎みたらし二付、給もの商内いたし候積りニて、但しところてんねりかけ也、妻召連甚七町貸船屋仁右衛門方ニて艀壹艘かり請、朝四つ時新地浜へ出船いたし、小舟入<sup>沖</sup>ニて入水致候一件、

宗七廿二才

妻よそ十八才

乍恐口上書

一、肥前町畑屋太吉借屋居申候并筒屋宗と七申もの、唐崎みたらし二付、ところてん商内仕候積りニて貸船屋仁右衛門艀借り請、妻よそと申者召連、今廿八日朝四つ時新地浜へ出船仕候処、小船入浜五町計東ノ方沖湖中ニて、右宗七入水仕候様子見請候二付、則小船入加子共江申付早速船漕付引揚ケ候処、息絶不申候二付、右宗七宿元江引取医師相招介抱仕候得共、養生不相叶落命仕候二付、乍恐此段御届ケ奉申上候、以上、

百艘年寄

文化貳年丑六月廿八日

与次兵衛

大津



御役所

右之段船方御役所内堀繁太様へ御届ケ申上候処、未不死切候二付早速肥前町居宅江連歸り療用<sup>（醫）</sup>致居候事二候ハ、是者町方懸り二候間、弥死切候ハ、町方役所へ可相届旨被仰渡候、依之直様御目付三軒へ内届ケいたし置、弥落命致候ハ、町内より御届ケ可申上段、申置候、

無程町内る弥落命致候段被申来候二付、此方年寄与次兵衛付添町方御役所江御届ケ申上候、右届ケ書者船方へ上候同意にて、肥前町年寄八右衛門、五人組仁右衛門、八兵衛、半次郎、百艘年寄、右連印即刻御目附多賀喜曾太様付添、宮川栄太郎様、町代遠藤重五郎殿肥前町二而御檢使相濟、明廿九日五つ時、御役所へ罷出候様被仰渡候、但し貸船屋者御召出二者不及段被仰聞候得共、翌日者矢張舟主仁右衛門も御呼出し、口書御取被成候、

一、廿九日、百艘、町内、貸船主、妻よそ、右不殘罷出候、口書印形御取被成候、船方之口書、左之通、

百艘年寄与次兵衛

甚七町<sup>（船主）</sup>「舟屋」仁右衛門

一、肥前町畑屋太吉借家并筒屋宗七と申、当廿式才二相成候者、今朝四つ時ころ、字小舟入より少し東浜辺<sup>（船主）</sup>三町計沖二て船<sup>（船主）</sup>はまり候を、引揚療養差加候得共、不叶相果候付、右町分并百艘<sup>（船主）</sup>其段御訴奉申上候処、御檢使御出之上、私共被召呼始末御吟味二御座候、此段百艘年寄申上候、私儀者今日小舟入船会所当番二付詰合罷在候処、今朝四つ時ころ沖二て船<sup>（船主）</sup>湖中へはまり候もの有之候様子二而、壹人之もの舟中二て声立罷在候を見請候付、早速小舟入二居合候水主共召連舟を為漕寄引揚候処、右夫婦之者共二付驚人候処、追々右町分<sup>（船主）</sup>も駈着私共俱々介抱仕、医師二相懸ケ療養為致候得共、最早不

行届落命仕候儀二御座候、尤宗七妻よそ申口承り候而者、全櫓綱切怪我二はまり候儀にて、於私共二も外二存当り怪敷儀者毛頭無御座候、且又舟屋仁右衛門申上候、右宗七義今朝艀船老艘貸呉候様頼参候二付、貸賃相對之上、右船老艘貸遣候儀二御座候、尤櫓綱之儀者貸遣し不申仕来二御座候処、強而相頼候得者、貸遣候儀も有之候得共、右宗七江者櫓綱貸遣シ不申候、然ル処右沖二而風与櫓綱切レ、宗七湖中へはまり候二付引揚候得共、養生不相叶落命仕候旨承知仕、驚入候儀二御座候、

右御吟味二付、少も相違不申上候、以上、

文化式年丑六月廿八日

与次兵衛

仁右衛門

右一件落着之上、謝礼之儀者肥前町<sup>（船主）</sup>被相勤候故、此方<sup>（船主）</sup>者一切不相勤、併御目付三軒、加役壹軒、町代、右之方へ手札計二て挨拶二参ル、筆工太七者下書も為致候事故、中ケ間<sup>（船主）</sup>銀三匁遣入、

一、酒五升 一、酒五升  
鳥目式百文 百艘へ 鳥目式百文 小舟入加子共へ

一、酒式升 大船加子共へ、但し是者小人数二付、

右之通肥前町<sup>（船主）</sup>到来いたし候事、

右之内貸船屋二抱り候儀在之、及引合二候訳者、貸船屋一件帳二記置候事、

大津

書付 御役所

比叡辻村

雄琴村行

右七月廿三日巳ノ刻為持被遣候二付、即刻坂本柳町艀治郎七へ頼遣

ス、使廻り与八

八朔御礼

石原庄三郎様

金子貳百足

二重重台  
下ケ札

元

石丸三五右衛門様

柴山泰蔵様

七里左六郎様

船方町方兼帯

内堀繁太様

勝手方

山田仲助様

船方介

牧埜九郎兵衛様

右金百足宛

小かしら

佐久間正蔵様

目付

高橋角左衛門様

多胡甚助様

多賀喜曾太様

船方下

北出雲平様

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

//

小野宗九郎殿

御門吟助五百文

町代

堀猪三郎殿

後家江貳百文  
小遣イ三人

//

遠藤重五郎殿

右銀一両つゝ

問屋肝煎

吉本弥四郎殿

山本俵五郎殿

鳥目廿足つゝ

右之外御門内新建、組屋敷不残手札計

御蔵番三人、白崎、平蔵町年寄

右之通次治兵衛、太郎兵衛、とも平兵衛

貳百足一 銀一両九つ 五百文一

百足六 貳百文六

八朔、京都御礼

西御奉行

一、曲渕和泉守様

金子三百足 目録台  
下ケ札付

御用人

増田郷八様

御取次  
椎名一右衛門様

星野半右衛門様

佐藤多仲様

鈴木順平様

矢沢龍右衛門様

右八軒へ銀壹両つゝ

柴忠五郎様

大森範兵衛様

東御奉行

一、森川越前守様

金子三百足 右同断

御用人

小柴宗右衛門様

鈴木又兵衛様

御勝手御用人

村田忠兵衛様

右八軒へ銀壹兩つゝ

西御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

本多新左衛門様

熊倉恵助様

入江吉兵衛様

右五軒へ金百足つゝ

東御公事方

山田劔次郎様

上田弥右衛門様

△木村清右衛門様

本多金右衛門様

右四軒へ金百足つゝ

御取次

村田直右衛門様

松野小右衛門様

柴田栄蔵様

伊藤右内様

榊原重兵衛様

同下

千賀与三右衛門様

浅賀卯兵衛様

上田八蔵様

菊地次左衛門様

柏原次部右衛門様

廣瀬左野右衛門様

酒井宗助様

右七軒へ銀壹兩つゝ

同下

中川李左衛門様

末吉新左衛門様

喜多尾八郎右衛門様

櫛橋平蔵様

平尾安左衛門様

中川定右衛門様

中尾勇右衛門様

森善右衛門様

右七軒へ銀壹兩つゝ

上町代

田内与助殿 銀貳兩

下町代

藤沢傳六殿 貳百文

藤村左一殿 貳百文

上町代中へ 五百文

下町代中へ 五百文

宿鍵屋佐助へ三百文

追分丸屋四郎兵衛へ百文

金三兩三步 銀壹兩三十文

×銀貳兩貳包 錢五百文貳つ

錢三百文六 // 貳百文三つ

// 百文二

右之通孫右衛門、新次郎相勤ル、供五兵衛、荷持和介、但しやとひ

一、八月九日、從御役所御差紙壹通、鳥井川迄遣之候様未半刻ニ参ル、明十日御呼出し付、仕立飛脚和助遣、賃錢貳百文渡し候様手紙添遣ス、

一、御目附多胡甚助様御死去ニ付、悔計、香典なし、八月廿一日野送り、

書付 御役所

大津

江州浅井郡

東尾上浦

右八月廿九日午ノ刻ニ参候ニ付、則同日未ノ刻ニ西尾上喜助へ相渡ス、

一、 閏八月十六日、從御役所矢橋浦江御先触參ル、則左写之置、

覺

一、 御用長持 壹棹 此人足四人

一、 乗物 壹挺 此人足四人

一、 分持 四荷 此人足四人

一、 合羽籠 壹荷 此人足壹人

一、 竹馬 壹荷 此人足壹人

×人足十四人

右ハ石原庄三郎当作毛為檢見、明十七日曉七つ時大津出立、船二て其地江向被罷越候条、書面之人足御定之賃錢受取之、草津宿迄無遲滯可被繼立候、尤草津宿より先々江ハ先触差出置候間、別段通達二ハ不及候、此書付參着之上可被相返候、以上、

丑閏八月十六日

矢橋浦問屋

年寄中

石原庄三郎手代

七里左六郎印

右御先触之書狀二付、矢橋江遣ス、

一、 当閏八月 高橋角左衛門様

御目付役之處、小頭兼帶

川嶋文左衛門様、御目付役助ケ、書記方心得

右之通町中御触有之候付、高橋様無当、川嶋氏江白銀一兩、与次兵衛持參致ス、

閏八月十七日

当三月、町々江御触書之写

此度測量為御用、天文方高橋作左衛門手附伊能勘解由、作左衛門弟善介并下役式人、同弟子四人、当三月下旬江戸出立、東海道其外国々相廻、天満川通淀川を伏見江出、加茂川二随ひ京都三条橋を改曆御用処跡迄測量いたし、夫を大津江出、瀬田橋を手分致兩手相分り、近江国湖水周り測量致、夫を一手相成、北国筋を国々相廻り、又伏見江出、宇治川二随ひせた橋を草津へ出、手分いたし、一手ハ木曾路中山道通り、一手ハ草津を東海道筋其処々測量いたし、江戸着之積二候、尤国々相廻り其処々様子二而少々宛前後可相成候、右箇所く二而諸事差支無之様可致候、

右之趣洛中洛外江可相触者也、

丑三月

右之趣大津町中并松本村、馬場村江不洩様可相触者也、

丑三月八日

右之通相触候様被仰渡候、已上、

惣年寄 印

町代

右者当津町方触書二而、船方江出候義二而ハ無之候へ共、為心得記置候事、

一、 前書当三月八日、津内町中御触在之候、測量為御用御役人中伊能勘解由様、高橋善助様、坂部貞兵衛様、平山郡藏様、閏八月十四日当所八町御本陣大塚嘉右衛門宅御着在之、但大坂を淀、京、江御廻り、夫を大津江御出有之候、当宿方を為相知被呉候付、則年寄与次兵衛太郎兵衛罷出候處、右御役方中江御目二懸り、明日湖水端見分可致間船用意いたし候様被仰付、依之町代堀猪三郎江相談し候處、艀式艘二而可然旨被申聞二付、則薄縁四五枚計差入、タハコ盆沓脚宛差入、

翌十五日未明、金藏堀御蔵の段江為相廻、与次兵衛、太郎兵衛八町御本陣江罷越御案内申上候処、無程御出立在之、当宿の遠藤重五郎肝煎山本清五郎、年番年寄若狭屋佐太郎、やとい年寄老人大門町茂兵衛、右之銘々付添、伊能勘解由様ハ則本陣表の間数御改メ、京町通江御通、石場播磨屋長兵衛方ニ而御待受之筈、外御三人者本会所町江御下り、湊町の濱通り東へ、右之内高橋善助様、坂部貞兵衛様、又平山郡蔵様ハ宿場茂兵衛付添、金藏堀の御乗船ニ而、則与次兵衛、太郎兵衛付添、当御役所湖辺水際御差渡し、夫の風呂屋関浜先江着船、外御役人茂風呂屋関浜先へ御下り御待合被成候内、俄二艘三艘差出し候様被仰渡、早速当会所前二用意致候処、又候御相談之上不残濱町筋ニ而問地御改、湖水端裏かわハ御改不及、依之船者五艘共御入用無之様被仰渡候得共、湖辺之儀差懸り御用之程も難計、艘式艘浜かわ裏通り、嶋関迄ぶらく、為漕置候処、

但シ扇屋関、彦根他屋へハ御下り無之、并八幡屋之段茂右同断、ふる屋ノ関、永原屋ノ関者間数御改、紺屋ノ関ハ御改無之、馬場殿ノ関、利玄ノ関ハ間数御改、嶋関ハ平山様計御下り、則百艘支配地之旨申上、四方山々御書記被成、小船入船番所前迄間地御改、肥前町出離れ迄間数御改被成、往還通り者今朝伊能様御改被置候二付、石場播磨屋ニて暫御小休ミ在之候、伊能様者最早新堀迄御出有之候、<sup>（通記）</sup>風呂屋ノ関浜先ニて、見へ渡り候湖辺山々并浦方御書留在之候事、

右之振合二付、前談艘船不用之儀ニ候得共、用意として亦候石場迄相廻させ置、与次兵衛、太郎兵衛者膳所新堀迄付添御見送り致候所、膳所西惣門際二城主が被差出候日おひ在之候、艘船壹艘、外二艘船四、五艘かんばん着致候加子取乗待請被居、同惣門際馳走役人と思敷もの、商人待請被居挨拶被致、新堀鮒屋ニ伊能様御待被為御待居、不残

御一所二御中飯有之、此方共者御暇乞致、九つ時首尾能引取申候、右之通り二付、惣四十日計過候ハ、湖辺西江州へ御廻り、亦候金藏堀へ御越被成候趣、此段兼而相心得可申事、

一、前十三日、与次兵衛御役所江罷出候処、内堀様御上京被成、牧野九郎兵衛様へ申上候者、兼而御触在之候測量御役人中、明十四日当所へ御出、湖辺御改之節船入用之旨当宿方内々被申聞候、御用之儀二御座候ハ、定而当御役所へ可被仰渡存候得共、明日之儀二候間如何可仕哉と相窺候処、暫相待候様被仰渡、外御役方へ御尋合之上、随分尤之儀、此方より沙汰可致儀ニ候得共、彼是致其儀ニ不及候、何事も宿方と申合、差支無之取計致候様被仰渡候事、

一、此度膳所領之分案内方として、片岡村庄屋老人、矢橋庄屋茂平次江被仰付候趣二付、十三日右兩人当会所二被来、当所船之儀ハ如何致候哉与相談ニ被及候付、此方船之儀ハ当浦廻り計二候得者、艘船式、三艘出シ候、若又勢田迄も差送り候儀ニ候ハ、小丸船可致旨申聞候所、茂平次被申候者、御尤之儀ニ存候、併膳所何れ御向イ船差出候儀二付、西惣門際ニ而御乗替在之候而者中途ニて混雜致候<sup>間</sup>而者、当所新堀迄御送り被下候様致度、勿論新堀迄二候得者艘船二御極メ可被下、何事も私共引請可然取計候様、膳所役方へ被申付候間、右之段承知致呉候様被相頼、依之前談之通艘船用意致置候事、一、十三日、利玄ノ関浜先の嶋ノ関并小船入迄掃除申付る、但シ艘船壹艘借ちん、やとひ四人共銭壹貫文差遣ス、

一、十四日、当会所前へ艘船三艘、但シ坂本新兵衛、川口町市左衛門、中保町甚兵衛、右銘々持、大風二付小船入江加子六人申遣シ、相廻させ置候事、但シ甚兵衛艘者当会所前二つなぎ置、外式艘加子式人つ、乗せ、金藏堀へ相廻ス、

一、十五日、風呂屋ノ関ニ而俄二艘三艘差出し候様被申付、橋本町七兵



衛、貸船屋源介、右つなぎ置候艀共都合三艘相揃、小船入江加子六人申遣シ候得共、不残不用二相成、夫々直二差戻ス、

一、うすへり廿枚前日二借り置、内五六枚計暫遣イ候事、

一、たはこ<sup>盆</sup>式ツ、藤新二而借り、又茶碗十計新調、

一、十五日、窺并出迎船案内、与次兵衛、太郎兵衛、

風呂屋ノ関会所詰、孫右衛門、六兵衛、忠兵衛、

嶋ノ関会所詰、勘三郎、新次郎、

小船入会所詰、三郎兵衛、市兵衛、

一、堀伊<sup>新</sup>三郎殿何か世話致被呉候二付、孫右衛門翌日挨拶ニ参る、但し手札持参、

大津

一、「<sup>貼紙</sup>配賦」御役所

大津浦始

右ハ田地養舟、品中村佐<sup>助</sup>と申ものノ流失致、御吟味之御廻状、文言例之通略之、

大津浦始東西之浦々

松本三ヶ所迄

右後八月廿四日参候二付、翌廿五日申刻

<sup>（兼寄書）</sup>

ボンノドウ

庄兵衛と申仁頼遣ス、

尤酒手廿四文先取申遣ス、

一、後八月廿五日、松本村坂口ノ長次郎被来、兼而御頼申置候肥前町柴屋長九郎宅裏、幅五尺計、長サ一間余り、波留場石、石場船入堀修復二遣ひ申度、以相对ヲ右石松本村江買請、依之、船二而近日之

内引取申度、右之仕合二付乗前用捨致呉候様被相頼候、但前以中間及相願<sup>談置候者</sup>候処、地続勿論船入堀二被遣候義、不残乗前取立候も如何二付、用捨いたし遣可然義二候得共、併訳も有之、松本浜之事故丸切了簡も難致、少々二而も御差出候様、前以船頭町市兵衛方申通置候

処、弥引取候ハ、其上村方以相談ヲ差出候様ト被申聞候趣在之候故、勝手二引取被申候様申遣候事、

尤石之義二付、素人二而ハ取扱難致候故、<sup>（比目）</sup>ひらの石舟相雇

為運候義二付、此段承知いたし呉候様被相頼候、

乗前挨拶在之候ハ、此所へ書記置可申事、

一、八幡方江頭太郎三郎老母死去之趣知らせ被遣候二付、左之通返事遣候事、

尚々堅田浦へも定而御伝被下候義と奉存候、宜御談し被下候、以上、

一筆啓上仕候、追日冷氣相増候処、其御地弥御安康可被成御座、珍重奉存候、然者江頭太郎三郎殿方御袋死去二付、香典之義御言伝被

下承知仕候、乍御世話可然御取計御遣し<sup>被下度候</sup>可被付候、尤先達田中江角

兵衛殿同様御取計可然様御頼申上候、<sup>我々奉存候、何分宜</sup>右御報旁早々如斯御座候、以上、

閏八月廿六日

百艘年寄

八幡浦船年寄

又右衛門様

御差紙

申渡儀有之間、今申刻迄無間違可被罷出候、此差紙其節可差返候、以上、

丑九月三日

大津御役所御印

坂本浦

舟年寄



肝煎

右辰ノ中刻御渡し被成、即刻を<sup>(押手)</sup>して市兵衛遣ス、賃錢百五十文申遣ス、

大津

廻状 御役所

急キ 大津始

明四日、所司代唐崎ノ大津辺御順見ニ付、右辺肥し舟通船不致様、船持共へ急度可申付候、此廻状昼夜刻付ヲ以早々順達、留可相返候、以上、

大津

丑九月三日 御役所御印

大津松本

馬場

膳所船町

右浦々庄屋

舟年寄

右勘三郎舟頭ヤツコ吉為持遣ス、

右御文言御廻状壱通

大津御役所御印

坂本

比叡辻

右坂本へをして市兵衛、差紙と式通持せ遣ス、

一、芦浦観音寺様御入院、九月三日川口弥蔵宅江御立寄被遊候ニ付、如先例恐悦ニ罷出、見肥焼<sup>杉折</sup>重<sup>入</sup>二斤入昆布熨斗付、但菓子名松風

ノ事也、与次兵衛、孫右衛門、上下二而罷出、西川多宮殿御取次ニ而御逢有之、御叮嚀ニ御挨拶有之候事、御雅名辰丸様と奉称、

右之通二而、若又弥蔵方江御入無御座候節、芦浦へ罷越恐悦申上候、此度ハ右御入有之候ニ付、弥蔵方限二而芦浦へハ不罷越候、已前兩度之例を以取計可<sup>申候事</sup>申事、但宝曆ノ丑年、明和ノ丑年兩帳二有之候、

九月九日、御礼

石原庄三郎様 鳥目百疋、木札付、

元々

芝山泰蔵様

〃

七里左六郎様

町役

石丸三五右衛門様

〃舟方兼帶

内堀繁多様<sup>天</sup>

勝手方

山田仲助様

舟方助役

牧野九郎兵衛様

右六軒へ鳥目五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、組屋敷不残、北出氏へ手札二而相勤、

孫右衛門、三郎兵衛、供和介

九月十一日、御役所ノ呼ニ参り三郎兵衛罷出候処、中嶋郷之助様被仰候ハ、明曉六つ時駕籠式丁、分持四ヶ、間竿人数上下七人、矢橋へ乗船之趣被仰渡候、又矢橋浦へ先触差出候筈ニ候へ共、其方仲間

右人足差支なく手当致置候様可申遣旨被仰渡候故、矢橋浦へ書状遣入、左之通、

以手紙得御意候、弥御安康可被成御座奉致賀候、然者当所御手代衆様方、明曉六つ時当津御出船、貴浦へ御越被成候、尤駕籠式丁、分持五ヶ、人足九人御手当被成置可被下候、右御先触御差出し可被成所、拙者共申達し候様被仰渡候二付、早速御通達申上候、乍御面倒一寸御承知之趣、御報可被下候、以上、

九月十一日

大津百艘

矢橋浦

御役人中様

九月十日

石山村

一、松茸 拾九本

庄屋

右例之通到来致候、乍併いつもとハ壹本不足御座候事、

配賦

大津御役所

大津始

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方二而掛改候間、得其意納入印形持参可致候、以上、

湖上船運上銀、来月十三日〆十七日迄二持参上納可致候、遲滞致間敷候、此配符令請印早々順達、留り所〆可相返候、以上、

大津

丑九月十九日

御役所御印

書面之趣、大津始、外浦々略之、貸舟やへも可申聞候、天文方御出迎二付此廻状松本へ持参、

同御文言壹通

松本始 廻り平兵衛へ遣入、

口演

一、舟御運上銀、来月十三日〆十七日迄二無遲滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所〆御返し可被成候、以上、

丑九月十九日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚六、六兵衛、源介、清助、源七、五郎八、善兵衛、源六

一、例年九月廿一日貴布祢御神酒役人打寄致頂戴可申候処、去八月江戸表〆測量御役人中湖辺御廻り、当廿一日二ハ大津宿り候旨風聞有之候処、弥廿一日坂本〆大津江御出二付、右御神酒延引いたし、廿四日二例之通相勤申候、

一、今津屋七兵衛義、是迄長々被相勤候処老年及ヒ、向後退役之義右組〆被申出候付、中間相談之上、近來条目之通取計頼候趣承知いたし、則組〆本人江此段返答いたし候事、右二付廿四日諸白式升七兵衛〆被差出候、

一、八郎兵衛方江治郎左衛門方〆養子被致候付、坂本町組〆被致披露、廿四日神酒之節顔見せ相済、酒式升被差出候事、

一、金子百疋、延紙三束并西川五郎兵衛様御書翰相添、

右者芦浦観音寺様御入院為御祝儀被下置候二付、則西川氏御書翰之写、此方〆御同人様迄御請申上候書面之写、左之通、

一筆致啓上候、冷氣之砌、御仲間中弥御堅剛可被成御渡、珍重不斜候、然者先般旦那入院之砌者、西川弥蔵方二おゐて御祝詞被仰上、殊二

御音物等被成御進上被入御念候義、幾久忝奉<sup>被</sup>存候、依而乍憚少目錄之通、金百疋、延紙三束被相贈之候、御祝儀御答礼被申入候迄二御座候、此段宜得御意旨被申付候条、如此御座候、恐々謹言、

西川五郎兵衛

九月廿八日

葆光

大津百艘

船年寄御中

尊札拝見仕候、冷氣之砌御座候処、被遊御揃益御機嫌克被為成御座候段、珍重之御儀奉存候、此度御入院為御祝儀、金子百疋、延紙三束從御前様被下置、難有頂戴仕候、乍恐右御礼宜御披露被成下度奉希候、且其割任<sup>割方</sup>先例、聊御祝詞恐悦奉申上候処、御叮嚀之御書面奉恐入候、右御請奉申上度奉捧愚札候、恐惶謹言、

九月晦日

百艘年寄

西五郎兵衛様

一、肝煎役之内堅田町組今津屋七兵衛義、被及老年候二付退役仕度旨被申出候段、組中<sup>組</sup>披露有之、承届ヶ置候、則委敷義者前書二留有之故、爰二略ス、且同人儀五十年余被相勤候事故、為祝金貳百疋遣之、以来存命中ハ隱居年寄並二いたし、尤席順ハ当役年寄之次二相心得候様、今九月廿九日、右<sup>組</sup>納衆へ申入置候間、正、五、九御神酒相勤候節ハ、呼可申答之事、

一、十月朔日、松本浦船役人利兵衛と申仁被来、兼而長次郎<sup>方</sup>御沙汰いたし御頼申置候肥前町浜繕石、明日引取申候間、宜御頼申上段被申聞、則為樽料南鐐沓片持參被致候事、  
委義ハ虎口二書留メ有之候、

一、乗前集金相場之儀二付、当丑九月晦日白銀屋陸助殿へかけ合置候へ共、委敷義ハ、問屋一件、寛政十二庚申年荷問屋中間舟賃払懸合留と申帳二記置、爰二略ス、

一、去ル閏八月十五日<sup>方</sup>、測量御役人中様湖辺浦々御廻村被成候処、当九月廿日坂本御泊り、翌廿一日大津御泊り二御越被成候段、当宿方<sup>方</sup>為相知被呉候二付、尾花川二艀船用意致置候而、右場所へ御出迎可申与存候へ共、右坂本統キ寺門領之処、船入用之儀も難計、相様<sup>相方</sup>之節ハ寺門領二住居致候艀遣ひ候者共へ寺門より申付、右艀船二而勝手二乗せ候儀も難計、左様相成候而ハ仲間方趣意難相立候故、いづれ坂本へ迄船御用向承旁罷越候二付、唐崎迄艀船相廻し置可申積致候、乍併右場所二て差掛り、寺門与及引合候儀も彼是御用向差支相成候而者恐多候故、前廿日二此段内々船方御懸り内堀様へ御窺旁孫右衛門参り候処、折節内堀様、牧野様御兩人様共御出役被成候故、浅野様へ参り右之段委細御咄申上、自然寺門与及引合候節御役所<sup>所</sup>被仰渡も有之趣申聞候間、此段兼て御含置可被下様申上候所、浅野様被仰聞候ハ、至極尤之事二候、左様義も有間敷事二候間、差掛り及引合御用向之差支二相成候而者不宜候間、明廿一日早朝<sup>方</sup>坂本旅宿へ参り、右測量御役人中へ、大津御役所<sup>所</sup>も船御用之節者無滞様可致旨被仰渡候間、今日御迎船召連御用向御窺旁罷越候間、船御用之儀も御座候ハ、可被仰付候様申入置候而、尚又寺門<sup>方</sup>出役被致候役人中へも其段申聞候様可然段被仰聞候二付、孫右衛門承之罷歸り、翌廿一日朝七つ時<sup>方</sup>柵屋市左衛門方艀沓艘、川口弥蔵方艀沓艘、右式艘二加子沓艘兩人宛乗せ、唐崎まで差遣し候而、年寄太郎兵衛、孫右衛門、供和介ヲ召連、陸二而坂本御旅宿七本柳ノ北田中蓮生寺

参り、右村役惣代五郎兵衛与申人へ得御意処、測量御役人中様方二も漸唯今御寢覺二而、御手洗等も相済不申趣、五郎兵衛被申之候二付、暫勝手二て差扣候処、無程御手洗相済候二付、案内致可申様五郎兵衛被申聞候二付、手札差出罷出候処、則御弟子衆之内御逢有之候二付、いづれも様方無滞御廻村被遊候段、一通り御挨拶申、今日私共船御用之儀も御座候ハ、可被仰付候、当村続キ大津迄之間二有之候三井寺領之分も私共積場二御座候故、大津御役所も此段被仰渡候二付、則唐崎迄御迎船召連参り、右船御用承旁罷越候趣申上候処、入念候儀二御座候、船入用之節ハ相頼可申、尚先達も此段申入候、則今日坂本より大津迄測量被致候人ハ、坂部氏、平山氏、其外両三人、又伊熊氏<sup>(能方)</sup>与高橋氏、其外之衆中者今日者ゑい山へ被参、夫ゝ当所へ御戻り、跡ゝ大津へ被参候積御座候、荷物之儀者当所ゝ船二て先へ大津迄積送り可申段、当村役人共へ申聞置候間、当村役人共と申合、何事も滞無之様取計可致様被仰聞候二付、引取村方役人中へ及引合、船手当之儀者如何被成候哉与相尋候処、五郎兵衛被申聞候者、荷物之分ハ艀船式艘二積、先へ大津迄送り申候、ゑい山へ御こし被成候御役人中様方ハ、跡ゝ艀ふね二て是又大津迄送り可申候、其外二艀船式艘用意致し置、船入用場所二て遣ひ可申趣被申之候、此方ゝ申候ハ、随分荷物之分又ハゑい山へ御こし被成候御役人中様方之儀ハ、被仰聞候通取計宜敷御座候、外二用意船式艘之儀ハ大津より御迎船与して艀式艘召連参り、則唐崎二待せ置候間、船入用之場所所有之節者、湖中二て船乗替候ハ却而面倒之事二御座候ハ<sup>共</sup>、手前共船二乗せ、当村方御領分之内ハ御尋等有之儀も難計候間、当村役人中之内御乗被成候へ共<sup>ハ</sup>、差支も有之間敷候間、当浦用意船ハ可被相廻候旨申聞候所、五郎兵衛被申候者、左様被仰聞候ハ、則昨日当旅宿前迄相済有之候間、今日ハ旅宿前ゝ唐崎迄之処、若船入用之

節者当浦方二用意致置候船遣ひ申候、いづれ唐崎二て御休息有之事二御座候間、各々方御迎船も則唐崎二有之事二候へハ、右唐崎ゝ船入用之節者各々方之御迎船二、当村領分之間者私共御用船可仕趣被申聞候二付、此段及引合候而、唐崎迄兩人共引取相待候処、右旅宿ゝ唐崎迄ハ海道筋測量被成候二付、船之儀ハ入不申候、無程唐崎へ御越被成候二付、兩人御出迎申上候処、平山様ハ先へ御出被成、坂部様ハ跡ゝ御越被成候二付、御両所様共一通り御挨拶申上候而、船御用之儀承旁罷り越候趣申上候処、入念候段御挨拶被下候而、鍵屋二て暫御休息有之、夫ゝ海道筋測量被成候積二て、御乗船ハ無之候二付、坂本村役之衆中追々付添被参候二付、此段申聞、此方迎船式艘共磯<sup>いそ</sup>ばたを押シ参り、入用之節者呼可申趣加子之者へ得と申付置、兩人ハ陸二て平山様先へ御出被成候二付、見合二付添参り、際川迄参り候処、寺門領志賀村役人御出迎罷出候、無程大津宿方ゝ宿場年寄左太郎御迎被参候、夫ゝも船者入不申候二付、先へ参り候処、寺門領村境毎二村役人罷出候、一本松まで参り候処、平山様御休被成候而被仰聞候者、是ゝも船之儀ハ入申間敷候間、勝手引取せ、出役兩人共是又引取可申段被仰聞候二付、右艀船式艘共尾花川相廻し置候様申付、兩人ハ尾花川中飯御休所まで付添参候処、夫ゝ大津宿ゝ御案内与して宿場年寄左太郎、順番年寄下堅田町弥介、右兩人出役二付、何角及掛合候処、是ゝ津内之処ハ尾花川ゝ東へ川口町、夫ゝ上へ濱通り枡屋町、東へ突抜辻二有之印ノ杭迄測量被成候而、又候北保町へ御戻り有之、加賀藏前ゝ下大門町上へ下北国町迄、夫ゝ南上北国町迄、夫ゝ東へ札辻二有之印ノ杭迄測量被成候積御座候二付、弥船之用意ハ入不申候二付、此段御窺申上候処、勝手引取可申候様被仰聞候二付、当宿出役之衆中へ、何時二而茂ふね入用之儀御座候ハ、可被仰聞候趣、得と相頼置、右艀式艘共為引取申候而、太郎兵衛、



孫右衛門兩人共昼九つ時引取申候、尤右御改之儀者昼八つ時二不殘相濟候事、

一、同夜当所旅宿八町万屋久兵衛方へ孫右衛門、三郎兵衛、右兩人挨拶二罷出候事、

一、御役所へ御配符壹通 石山村始 十一日七つ時 同村新右衛門へ渡入、

一、右同断 壹通 堅田浦 茶碗屋平三郎へ渡入、 十一日八つ時

右式通、十月十一日午刻請取、則、

一、十月十七日、塩津年寄半兵衛与申仁被来、矢熊村出荷物之義は是迄塩津、月出積場所二御座候処、先年京都大變之砌、才木類余程取扱致候処、塩津浦へ不申越、最寄浦方山梨子或は彦根領舟共多分引寄、夜分等隠積致候義二付、当夏庄屋方へ及引合二候処、則庄屋兩人有之、壹人は承知之旨二付、已来ハ塩津浦へ可被致舟積様取計候段被申聞候へとも、今壹人は昨近之義二付、前方之義ハ不存候間、商人中へも為承含、塩津計被積候義ハ、其趣二可致候へ共、強而外浦方へ為積候義不相成義二も不存候間、尚追而可致返答段被申聞、其後何之沙汰も無之、弥勝手二舟積被致候義二付、不得止事来春は出訴二も可及間、其節ハ当中間世話二も致呉候様被申聞、諸白三升切手持參被致候事、

一、十月十八日午刻、從御役所書付壹通、片田浦行、則封のまゝ即刻西切通船政次郎へ相渡入、

一、十月十九日、從石山寺米壹俵、但四斗入、右者当四月及引合候二付被差送、尤請取書者遣シ不申候、

一、十月廿三日未ノ刻少過、從御役所御差紙、鳥居川村へ問仲間添状致遣候、関舟治兵衛を今日中慥二相届候様取計候筈、使新藏、

十一月五日四つ時

一、御役所へ御書付式通 鳥居川村賃百文 大萱新田賃百七十式文 右仕立飛脚二遣入、使左兵衛、

一、十月中旬、湊町塩屋甚助と申仁、豊浦庄兵衛船二蜜柑荷物隠つミ被致候より事発、去ル寛政年中被及取メ荷問屋中間と打寄候一件、別帳二留書致置候事、

十一月廿六日、当御役所寒氣御伺、左之通、

一、石原庄三郎様 鴨壹掛 二重くり台、下ケ札

御町方

元メ

石丸左五右衛門様 御目付小頭兼帶 高橋角左衛門様

〃

柴山泰藏様 御目付 多賀喜曾太様

〃

七里左六郎様 〃 川嶋文左衛門様

船方町方兼帶

小頭

内堀繁太様 佐久間正藏様

御勝手方

右四軒銀壺両宛

山田仲助様

舟方助

牧野九郎兵衛様

右六軒式朱壺片宛

右之外御門内御手代衆、組屋敷不殘、北出雲平殿、此分手札計二而相勤候事、手札数廿枚、差出壺枚、

太郎兵衛、勘三郎、供新三、

一、十一月十六日、堀猪三郎殿内義死去二付、香典白銀壺両遣申候、但中間此節無人二付、十二月二日与次兵衛持参、

十二月八日

一、南鐐壺片

上田弥右衛門様内西村多右衛門殿、例之通参候二付、右之受取書遣し候、

覚

一、御納豆 五拾把

右は御旧例之通御前より不相替被下置、難有頂戴仕候、以上、

丑十二月十五日

百艘印

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子百疋

右は当津より御家中并御人足渡海為御挨拶御前より被下置、慥二頂

戴仕候、以上、

丑十二月十五日

百艘印

松岡市左衛門様

霜月廿七日、京都寒氣御伺

東御奉行

一、森川越前守様

真鴨壺掛

御用人

小柴宗右衛門様

柴田栄蔵様

鈴木又兵衛様

松野小右衛門様

田村直右衛門様

伊藤右内様

御勝手

榊原十兵衛様

村田忠兵衛様

右手札計

東御公事方

上田弥右衛門様

御公事下  
中川左左衛門様

本多金右衛門様

喜多尾八郎右衛門様

山田劔次郎様

森儀左衛門様

石嶋五郎様

櫛橋平蔵様

右者南鐐壺片つゝ、

平尾安左衛門様

中川定右衛門様

末吉新左衛門様

中尾勇右衛門様

森孫六様

右手札計

西御奉行



一、曲測和泉守様

真鴨耆掛

御用人

御取次

増田郷八様

矢沢龍右衛門様

鈴木順平様

芝忠五郎様

星野半右衛門様

大森範兵衛様

御取次

椎名市右衛門様

佐藤多仲様

右手札計

西御公事方

御公事下

深谷平左衛門様

千賀与三右衛門様

不破伊左衛門様

浅賀卯兵衛様

入江吉兵衛様

上田八藏様

本多新右衛門様

菊地治左衛門様

熊倉恵助様

柏原治部右衛門様

右者南鐐耆片つゝ

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗助様

右手札計

外二田内与助殿、銀三外、

若狭屋八兵衛殿、ひとり一羽、

孫右衛門、忠兵衛、供和介

覚

一、諸白式升

一、生鯛耆尾

かき小式籠

右者今津屋七兵衛方へ長三郎捨弟ヲ養子ニ被貰、今十二月廿一日寄合之席ニ而顔見せ相済候、為祝と持参被致候事、

〔<sup>貼紙</sup>一、南鐐耆片〕〔<sup>貼下</sup>十二月廿五日、山上〕

右ハ三上藏より歳暮之御祝義被下置候、

十二月廿五日

覚

一、金子百足

右者朽木兵庫助様方例之通被下置、慥ニ受取申候、以上、

文化二年

百艘舟年寄印

丑十二月

御用達

升屋市左衛門殿

一、当所下博勞町、松本村之内高見町、同平野町、右三ヶ所野口ニ有之候、往来之旅人并駕籠、かち荷持等一切通るまじき旨之御建札、年久敷相成候二付、御文言も難相見候故、今度御書替之儀御願申上度奉存候二付、仲間相談仕相調へ見候处、元文年中京都御役所より御建被下置、其後宝暦年中御書替之節も京都御支配之節、然ル処当時津内ハ当御役所御支配、尤仲間方ハ京都御役所御支配之事故、今度書替御願申上候ハ、何れ御役所へ願出候哉、此義難決候二付、十月八日夜当御役所、当時内堀様船方町方兼帯被成候二付、内々ニ而御宅へ太郎兵衛、孫右衛門兩人参り、委細御咄し申上、何れ御役所へ御願申上候哉与、此段御伺申上候处、内堀様被仰聞候ハ、当御役所罷出候様可然趣被仰聞候二付、承之罷歸り候、

一、当宿方へ届ケ之儀者、前以惣年寄小野氏へハ孫右衛門参ル、町代堀氏へは太郎兵衛参ル、右両家共委細咄し致し置、別段宿方へハ不及届候段、得と相願置候事、

一、十月十日、往還筋懸り町々へ太郎兵衛、孫右衛門兩人相廻り候二付、町毎ニ参り、右同様之義申談候も、彼是面倒之義ニ付、八町組七組下西八町年寄、京町組七組上小唐崎町年寄、右両家へ参り候而、委細相談候而、外町々へハ右七組年寄方申談シ被呉候様相頼置、夫より和泉町年寄、平蔵町下組年寄、右両家へ参り候處、折節右兩人共他出被致候二付、翌日太郎兵衛右両町へ参り委細相談之處、兩町共即答承知之趣被申之、尤平蔵町上組年寄は當時太郎兵衛相勤申候故、同方町分へ及披露候而、是又承知之趣ニ御座候、然ル處、其後右七組年寄市右衛門一同承知之趣返答有之候二付、早速願書下書相認メ掛町々へ相廻し、町々年寄名前書人被申越候様申遣候處、一同名前書人参り候二付、右下書堀氏へ多郎兵衛持参致し、本紙相認メ被呉候様相頼置候處、少々文言ニ加筆被致候而、本紙筆工多七ニ相認メさせ、為持被越候事、

一、十一月二日、多郎兵衛、孫右衛門、右三ヶ所高札文字見改参り、其節右三町年寄方へ、今度御高札書替之義御願申上候間、近々当御役所より御町分へ御沙汰も有之候ハ、其節は何角宜敷頼入候趣、御沙汰も有之候ハ、其節は何角宜敷頼入候趣挨拶ニ参り置候事、

一、十一月四日、掛り町々へ當六日ニ御願罷出候趣、口上書相添へ、右願書へ本紙ニ調印致し可被相廻様申遣候、尤六日右町々惣代与して兩三人計可被罷出候様申遣候二付、六日二町々惣代与して上西八町年寄、上東八町年寄、下東八町年寄、下小唐崎町年寄、葭原町年寄右五人、仲間より多郎兵衛、孫右衛門兩人、都合七人御役所へ罷出候處、町代部や詰合惣年寄矢嶋氏取次ニ而願書、左之通差上候事、

#### 乍恐奉願口上書

一、当所下博勞町方松本村へ続候野道御座候處、往来旅人并駕籠、步行荷等ぬけ通り候而、津内往還筋町々并船方ニ至迄困窮ニ罷成、去ル元文三年御支配御役所江御願申上候二付、下博勞町并松本村内高見町、平野町、右三ヶ<sup>所</sup>野道入口ニ往来旅人并駕籠、步行荷等ぬけ通る間敷旨之御建札被成下、其後宝曆六子十一月奉願、御書替被成下候處、猶又年久敷罷成、御建札破損ニ付、御文言見得兼候様相成御座候間、乍恐此度御書替被成下候様奉願上候、尤入用之儀は左之町々并百艘仲間方致来り候二付、新札板之儀ハ御下知次第早速取拵、右願之通御聞濟被成下ハ、難有可奉存候、以上、

#### 文化貳年

丑十一月

上西八町年寄

作兵衛

下東八町年寄

治兵衛

上東八町年寄

与兵衛

下西八町年寄

庄右衛門

上京町年寄

善吉

中京町年寄

庄七

上小唐崎町年寄

藤兵衛

下小唐崎町年寄

○後在家町年寄

長七

葭原町年寄

太兵衛

鍛冶屋町年寄

七兵衛

境川町年寄

重兵衛

和泉町年寄

九右衛門

平蔵町上組年寄

代五人組吉右衛門

同町下組年寄

源七

百艘船年寄

七兵衛〇

太郎兵衛

孫右衛門

大津

御役所

右願書差上候処、町方御部屋二而内堀様被仰聞候は、願書之趣御聞濟被成候而、当下地之高札之儀は右三ヶ所町分より持参可致様申遣候間、新札之儀ハ急々取拵候而持参致候様被仰渡候、尚又右高札之写書致差上候様被仰聞候二付、跡方孫右衛門左之通相認メ持参致候事、

御建札御文言写

此道より往還之旅人并駕籠、かち荷持等之類、一切通るましき者也、

子十一月

建札尺寸写

一、高サ両方 壹尺貳分

一、中高サ 壹尺壹寸五分

一、幅 壹尺六寸五分

一、厚サ 壹寸

右は桧板フシ無し

但柱上貳寸三分角 長サ

下貳寸五分角



地中不相知、

一、垣高サ 貳尺

中 壹尺四寸四方

但し四本柱二而、間割竹三本宛

札之つなぎ木貳本、はしらアテ二而

一、垣是迄之通竹二而者損じ早ク候二付、此度アテ二而いたし置、

但し此柱貳寸三分角四本

并小柱巾貳寸、厚サ五分

右書付差上候処、内堀様被仰聞候者、三ヶ所共右「之垣」<sup>(貼紙)</sup>致し有之哉与御尋被成候二付、孫右衛門御答申上候ハ、仲間方留書二ハ三ヶ所共致し候義ハ無御座候へ共、高見町、平野町、右式ヶ所之場所ハ甚野口道中狭ク御座候故、定而下博労町計二可有之哉旨申上候処、内堀様被仰聞候は、夫は畢竟其方推慮与申もの、又留書与申も自己之留メ二候へ者、是等も取用ひ致かたく候間、当三ヶ所町分呼出し相尋候上可及沙汰様被仰聞候二付、承之罷歸り候事、

一、同六日二右三ヶ所町分へ、明七日二下地高札持参致候様御役所より御差紙参り候二付、六日夜松本村高見町年寄、同平野町年寄、右兩人太郎兵衛宅へ参り被申聞候は、明七日二下地御高札町分御役所へ持参致候趣、今日御差紙到来仕候二付、内々御尋参り候、右御高札之儀二付、是迄町分二差構候義は無之候処、此度者如何之訳二而町分持参致候様申参り候趣被相尋候二付、多郎兵衛相答候者、此義は先年御建被下置候節、夫々町分へ御渡し被成候而、則町分請書等御取被置候二付、定而右之趣ヲ以申参り候様申聞候処、町分被申聞候ハ、右請書等之義も兼而承知致候へ共、是等之義も其節其御仲間方御持参被成候二付、調印致候趣被申之、是又町分右高札持参致候人も無之、左候へハ人足雇イ候へ者賃錢等も相懸り甚迷惑之趣被申之、況今日御差紙到来致候節も使賃錢相渡候様被申聞候二付、此義は其御仲間方二而受取可被申様申遣候趣被申之候二付、多郎兵衛申候ハ、其御町内二御費等為致候段も甚気毒存候、乍併此方持参致候義ハ心易事二存候へ共、御役所より御差図無之候而ハ取計難致候間、此義は内々御伺申上候而及沙汰候趣申聞候処、何れ返事為聞呉候様被申聞候而罷歸り被申候二付、仲間相談仕候処、今以御役所へ御伺申上候儀も如何之義二候間、人足賃相懸り候而も畢竟此度惣入用高二相成候へ<sup>者</sup>、何分賃錢之處ハ随分此方差出候、

町分を持参致候様可然存候付、即刻多郎兵衛高見町年寄方へ参り、先刻之義仲間方二而相談之處、御役所へ御伺申上候も、彼是面倒之義二候間、人足相懸り候へは、御町分二而御雇被成候而、賃錢之處御町分二費等為致候段も氣毒存候間、此方懸り町々を差出し可申間、明日ハ其御町分より御役所へ御持参可有之趣及返答候處、尚隣町へも相談候可申積被申聞候二付、罷歸り候處、跡方何之沙汰も無之、七日二右町分を持参致候事、尤下博勞町之儀は無其儀、町分を持参被致候事、

一、新札三枚共出来候二付、十一月十五日御役所江孫右衛門持参致し候處、惣年寄小野氏、町代遠藤取次被呉候而差上候處、御組之内柿沼小平太様御請取被成候二付、御渡し申上罷歸候事、

一、十一月十九日、町代部屋を年寄老人罷出候様差紙到来仕候二付、早速孫右衛門参り候處、町代部屋二而遠藤被申聞候は、下博勞町高札建場所之義寢と難相分候二付、御役所より御建被下置候御太切之高札之儀二候へハ、得と場所見改メ参候様、御懸りを下拙へ被仰渡候間、明廿日其仲間より壹人、右懸り町内を兩人参り候様被申聞候二付、翌廿日遠藤氏は筆工多七召連被参、懸り町内之内、上京町年寄、中京町年寄、仲間を孫右衛門、博勞町年寄、右何れも立会相談之上、場所相定候而、則遠藤氏を右之趣口上書筆工多七為相認め、御役所へ被差出候事、

一、十一月晦日、御役所を八つ時罷出候様御差紙到来候二付、左之通参候、上東八町、下東八町、葭原町、松本村之内高見町、同平野町、右五町年寄并仲間を多郎兵衛、孫右衛門兩人、惣年寄矢嶋氏、町代遠藤氏付添町方御部屋へ罷出候處、内堀様被仰聞候者、先達而三ヶ所野口高札書替之義願出候二付、今日書替出来候間相渡し候旨被仰渡候而、三ヶ所夫々町分へ御渡被成候二付、別段三ヶ所町分へ被仰

渡候は、右高札太切二致し、出火等之節は早速取除候様被仰聞、則請証文御読為聞被成、得と披見之上調印致し差上候様被仰渡候而、請証文御下ヶ被成候二付、町代部屋二而三ヶ所共調印致し差上候、則請証文之うつし、左之通、

(この間、一丁白紙あり)

右高札夫々町分へ預り置、明朔日一統立会之上相建可申様相談二而引取候而、夫より孫右衛門御懸り役人中へ手札二而御挨拶参り置、尤御目附三軒へは今日野口高札御書替被下置頂戴仕候二付、此段御届可申上候趣申之、猶又跡を右御礼可申上段申上候而罷歸り候事、

一、十二月朔日、朝五つ時を高札相建候二付、掛り町々へ案内致候處、右掛り町々為惣代上小唐崎町年寄、下小唐崎町年寄右兩人、仲間より多郎兵衛、孫右衛門兩人、大工小兵衛并手伝老人召連参り、三ヶ所之内夫々町役町毎二立会候而、夕方迄二三ヶ所共高札不殘相建候上、何れも引取候事、

御高札

丑十一月二致有之、

文化式丑十一月、博勞町、高見町、平野町、野道往来留建札書

替願入用之覚

一、金壹歩式朱

内堀様

一、銀六匁

柿沼様御礼

一、銀八匁六分

惣年寄式人

一、銀九匁

町代兩人

一、銀四匁三分

御目附様三人

石丸様

一、銀四匁三分 筆工多七殿  
 一、錢貳百文 門前茶代  
 一、錢百文 秋岸寺  
 ✂金壹歩貳朱  
 銀三拾貳匁貳分  
 錢三百文  
 一、錢百文 博勞町建札場向イ茶代  
 一、同廿六文 片キ三枚  
 一、同三拾九文 紙代  
 九兵衛  
 一、銀五匁五分 高見町  
 代六百拾文 平野町 小歩雇イ代共入用  
 一、錢四百文 雇イ人足賃  
 ✂  
 右は二口ハ高見町平野町書付来ル、  
 一、壹貫八拾四文 八百半  
 ✂ 中食代  
 十〇  
 一、廿四匁八分 百石町  
 代貳貫四百七十七文 伊賀屋酒代  
 ✂  
 一、拾七匁五分 建札三枚、板代  
 一、七匁貳分 柱三本  
 一、三匁六分 柱四本、井垣壺ヶ所  
 一、五匁五分 ✂キ  
 一、拾三匁五分 右大工手間三人

一、百八拾八文 手間壹人  
 一、拾五匁三分 建札大工手間  
 一、八分 釘  
 九五  
 ✂六拾三匁四分  
 代六貫六百七十一文  
 ◎百八十八文  
 ✂金壹歩貳朱 六五五  
 代貳貫七百七十三文  
 銀三拾貳匁貳分 八八五  
 代三貫六百三十七文  
 ◎拾壹貫九百十一文  
 三口✂拾八貫三百廿五文  
 右之通京町組へ書付為持遣ス、  
 十二月十二日  
 右之内へ  
 一、五貫貳百四拾文 京町組  
 一、壹貫三百九十五文 八町組  
 一、六百五拾三文 四町分  
 三口✂七貫貳百九十八匁 平蔵町  
 引✂拾壹貫廿九文  
 右は当仲間方ハ私、  
 右一件入用割方之儀ニ付、元文年中、宝曆年中両度共相糺し見候処、  
 睨と難相分候ニ付、則下小唐崎町年寄七兵衛儀御役人中へ挨拶二廻



り候節、掛り町惣代二被参候砌、当会所二而及引合候者、此度右入用割方之儀、先年之処相調へ見候処、睨と難相分候、此義畢竟此度之処者格別之儀二而も無御座候二付、仲ヶ間方より取計致置候而も宜敷事二候へ共、夫々御町分御名前等有候事、此方共より取計致候段、却而失礼二存候二付、此義御談し申上候間、善兵衛と御相談之上、可然様御兩人御取計可被下候、仲間方二おゐては如何様二而も不苦候趣申之候二付、七兵衛被申聞候ハ、夫は結構二被仰下候、左様候へ者、当善兵衛殿と相談之外、町内へも及掛合可申段申之罷歸り被申候、然ル処、其後善兵衛殿内々太郎兵衛宅へ参り被申聞候者、此間七兵衛殿へ其御仲間方此度入用割方之儀私共兩人より外町分へ及談、可然様取計致候様被仰聞、御仲間方結構二被仰下候趣ヲ七兵衛殿方承之候、乍併其御仲間二思召之程も難計候二付、如何取計致候哉内々二而御談し参候趣被申之候二付、太郎兵衛相答候者、於仲間方者別段趣意は無御座候間、此間七兵衛殿二申候通、如何様二而も宜敷候間、各々方可然様御取計可被成候趣申之候二付、善兵衛被申聞候ハ、此度惣入用高之内、「半減通<sup>（半減）</sup>其御仲間へ御引請被下、残り半減通り掛り町拾四町へ割付」差出し候様致候而は如何可有之趣被申聞候二付、随分被仰聞候通二而、宜敷御取計被呉候様申聞候二付、罷歸り被申候、夫々町分へ被談候処、京町組之分ハ不残右之通二而承知被致候へ共、八町組ハ四町共被是申対談相調へ不申趣二付、此段善兵衛殿方多郎兵衛方へ参り被申聞、此上は内々御役筋方被申聞呉候様致し候哉之旨被申之候へ共、左様致候義二而も有之間敷旨申聞候二付、善兵衛殿被申候、左様被仰聞候ハ、私共手先二而は難相調へ候間、其御仲間方直々及引合呉候様被申之、京町組八町分ハ則七組上京町年寄方二取集メ有之候間、勝手二請取参り呉候様被申聞候二付、十二月晦日廻り五兵衛二書付為持、京町組、八町組共取

集メ遣候処、京町組之分不残被相渡受取申候、和泉町、平蔵町右両町之儀は多郎兵衛より及引合候而、平蔵町之分は則太郎兵衛持参致候二付請取申候、和泉町之分は右町内年寄代役九右衛門与申仁相勤居申候、右九右衛門儀者当時小船入之人下ヶ致し居候二付、右一件之儀は何角右之仁へ及引合候、此度入用割方儀も、右九右衛門へ及引合候処、随分承知致し町内へ申談候へ共、当時町内借財等多有之、甚難渋之趣申立候而、外町分へは沙汰致し間敷候間、右入用割合之儀暫用捨預り度趣ヲ以、段々被相頼候二付、右町分ハ日々小舟入人下ヶ共加子共参り居候、町内二而別而当時甚難渋之趣も兼而承り居候故、此度之処は其儘二相含置候趣申之、重而例二者不相成段得と九右衛門へ及引合置候事、

八町組之分ハ七組下西八町年寄方へ参候処、右町年寄被申聞候は、未取集メ不致候間、跡方取集メ置候様被申之候二付罷歸り申候処、十二月廿八日頃八町組方御役人中へ之謝礼其外御役所前二而弁当之入用、右式口計入用高之内半減通り之割合為持越之候二付受取置申候、跡方及引合可申与存候へ共、申掛<sup>（申掛）</sup>候而対談相調不申候而ハ其向二も難致、又候右八町之儀は旅籠屋之もの共、泊り客每度石場杯へ内々つれ参り候趣兼而承り候へは、却而渡船方之障り二相成申候、表向二致し随分取候義も有之候へ共、此節役方「杯甚綿密之仁」二御座候故、彼是入用之処御糺二相成候へ者面倒之事故、畢竟此度之義最初二入用之儀掛り町不承知之事二候へは、仲間方手切二而も致度存念二御座候故、先此度之儀は此儘二致し置候、重而右書替等之節は得と相考候上二而取計可然候事、

一、鳥居川村二日毎二遣候茶屋店売蜆、従往古勢田方差遣候処、去ル子年頃方故障出来、鳥居川村江一統為申合蜆売不申候方事発、鳥居川



村方地頭膳所表江蜆取舟として艀御免之義願上候処、早束<sup>(速)</sup>於膳所表二聞済在之、既艀舟七艘貸り舟いたし候処、惣而船之義ハ大津御役所江願不申上候而者難相濟事二付、右願并聞済在之趣大津御役所江願出候処、蜆取舟之義ハ格別之訳も有之、外浦方二而容易二御免無之、勿論せた之者共も御糺在之候処、差支之趣彼は申立隙入候内、<sup>(居懸)</sup>鳥川同領之事故、地頭表方御奥書被差赦候事を故障申立候段不埒之旨二付、則せた庄屋傳右衛門と申者手錠押込二相成、尚又右落着後所払二相成、せた一統大混乱之由、大津表二而弥艀舟御免無之候而ハ地頭之申条難相立、膳所役人中方大津御役所江直<sup>(懸)</sup>合二相成、依之蜆取舟と申而ハ新規之義故難差赦、只漁船と唱七艘御免在之候段、せた并鳥川<sup>(居懸)</sup>方も承り申候、

一、最初二膳所<sup>(居懸)</sup>せた江被申付候ハ、是迄蜆運上<sup>(已来)</sup>せた方五貫文上納致来り候処、向後三貫文二減遣候段、鳥居川ハ<sup>(已来)</sup>是迄五貫文上納致候旨、外二くほへ<sup>(居懸)</sup>是迄三貫文差出候由、都合十式貫文相成候事、

一、鳥居川村年寄久兵衛、茂兵衛、翌寅正月七日酒三升持参年礼二参れ、旧冬從御役所ハ差紙等之義毎度御せわ二相成候所、兼而及御聞も被下候通漁舟御免在之候付、此末何事も宜頼入候段被申聞候二付、從此方申聞候者、此義二付別段御尋可申入与存居候事二御座候、右漁舟之義ハ此方二差而差支も無之義二付、從御役所も何之御沙汰も無御座候、右二付而ハ川筋浜宅通り二而、外二荷物積入又ハ旅人小渡し等被致候義ハ決而不相成ハ勿論、是迄艀ふね二荷物運送坏ハ御制禁之御触流も在之、定而御承知之事二ハ可有之候へ共、尚又心得違無之様村方一同為申合可被置段申聞候処、随分御尤二存候、漁舟之外荷物旅人等のせ、他浦へ罷出候義ハ仕間敷<sup>(已)</sup>被申居候事、右之始末勢田存念二ハ新規之義二候へ共、同地頭と申旁辻も不相叶義二候ハ、無是非事二候へハ、希<sup>(ねがわ)</sup>ハせた方差放下<sup>(ねがわ)</sup>請之由二而蜆為

取申度、無左二而ハ是迄之規矩も難相立、いろく、骨折内願いたされ候へ共、何分同領の事、強而申張候へハ右庄屋傳左衛門同様地頭方あたり在之、辻も此節不叶事故、まづ暫時節を見合只此儘二致置候段、せた年寄方内々咄有之候、蜆取ふねせた方二ハ七八拾艘も在之候由、

#### 目録

- 一、篠田牧太郎様舟方助役二付挨拶之事、
- 一、七里左六郎様<sup>(御内室)</sup>母公御死去香典、
- 一、
- 一、野田源藏舟持立之儀二付市左衛門へ掛合之事、
- 一、内堀繁太様元<sup>(加判)</sup>、牧野九郎兵衛様舟方助役被仰蒙候二付、御挨拶之事、
- 一、町代部屋方彦根迄里数被尋候事、
- 一、山王御神事神輿舟二法師老人急死之事、
- 一、善左衛門舟八まん行積金藏堀二而水入濡荷之事、
- 一、御藏番衆方俵を多ク舟積被致候故掛合之事、
- 一、年寄三郎兵衛跡役孫右衛門へ為勤度趣願書之写、
- 一、忠次郎、忠兵衛と改名、市兵衛本役、庄兵衛見習之事、
- 一、石山寺へ石舟積二付湖月坊へ掛合之事、
- 一、内堀様御変宅御祝儀之事、
- 一、吾妻川御見分、
- 一、肥前町井筒や宗七水死之事、
- 一、高橋角左衛門様小頭兼帯、川嶋文左衛門様御目附助役之事、
- 一、測量為御用天文方御役人様御越二付、舟御用相勤候事、
- 一、肥前町方松本へ石被引取候二付、松本方断被申候事、

- 一、江頭太郎三郎老母死去之事、
- 一、芦浦観音寺様御入院恐悦之事、
- 一、今津や七兵衛退役并八郎兵衛養子顔見せ、
- 一、乗前集金相場之儀二付掛合之事、
- 一、塩津年寄半兵衛岩熊村出荷物之儀二付被参候事、
- 一、湊町塩屋甚助隠積之事、
- 一、堀伊三郎様内方死去香典、
- 一、今津や七兵衛養子顔見せ、
- 一、野口御高札一件、
- 一、鳥居川村の蜆舟膳所表へ願出候事、

(裏表紙見返し)

(印：百艘)

(裏表紙)

八拾 百艘

## 二、「万留帳」文化三年（一八〇六）

（表紙）

「八拾壹」  
（後筆力）

丙 文化三年

万留帳

寅 正月吉日

（表紙見返し）

目録書奥二有之、

（本文）

正月二日、当所御礼

石原庄三郎様

金子貳百足、目録台下ケ札付

御町方

元々

石丸佐五右衛門様

御目附小頭兼帯

高橋角左衛門様

〃

柴山泰蔵様

御目附

多賀喜曾太様

〃

七里左六郎様

〃

川嶋文左衛門様

船方町方兼帯

小頭

内堀繁太様

佐久間正蔵様

御勝手方

右四軒白銀壹両つゝ

山田仲助様

船方助役

牧野九郎兵衛様

右六軒金百足つゝ

船方下

御門吟助殿五百文

北出雲平殿

御袋へ貳百文

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

御足輕半七殿

〃

小遣梅八殿

小野惣九郎殿

〃 藤七殿

町代

〃 三人江鳥目貳百文つゝ 堀猪三郎殿

〃

遠藤重五郎殿

右五軒白銀壹両つゝ

吉本弥四郎殿

山本兵五郎殿

右貳軒へ鳥目貳拾足つゝ

〃 金貳両

五百文一

銀壹両九ツ

貳百文六ツ

白崎久太夫様

御蔵番三人

組屋敷不残

御門内手代衆

平蔵町年寄

右ハ手札計ニて相勤申候、

與次兵衛、太郎兵衛、供新蔵

三日、京都御礼

西御奉行

曲渚和泉守様

金子三百足

目録台  
下ヶ札附

御用人

増田郷八様

鈴木順平様

星野半右衛門様

御取次

椎名一右衛門様

佐藤多仲様

芝忠五郎様

大森範兵衛様

右七軒へ白銀壹両つゝ

東御奉行

森川越前守様

金子三百足、右同断

御用人

小柴惣左衛門様

鈴木又兵衛様

村田直右衛門様

御勝手

村田忠兵衛様

右八軒へ白銀壹両つゝ

西公事方

深谷平左衛門様

木波伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉恵助様

右五軒へ金百足つゝ

組頭兼帯

千賀与惣右衛門様

上田八蔵様

菊池治部右衛門様

菊池治左衛門様  
柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井惣助様

眞壁郡右衛門様

〆七軒銀壹両つゝ

東公事方

上田弥右衛門様

本多金右衛門様

山田釵次郎様

石嶋五三郎様

右五軒へ金百足つゝ

組頭兼帯

中川奎左衛門様

目附〆兼帯

中川定右衛門様

櫛橋平蔵様

喜太尾八郎右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新左衛門様

森孫六様

〆八軒へ銀壹両つゝ

奥田九左衛門殿 銀壹両

東西御門番 三百文つゝ

東西中番中へ 三百文つゝ

宿鍵屋下女へ 貳百文

山科大津屋孫兵衛へ 百文

上町代

田内与助殿 銀貳両

下町代

藤沢傳六殿 貳百文

藤村佐一殿 貳百文

上町代中へ 五百文

下町代中へ 五百文

宿鍵屋佐介 三百文

追分丸屋四郎兵衛 百文

〆金三両三歩

銀貳両壹つ

銀壹両三十文

銀五百文貳つ

// 貳百文三つ

右之通孫右衛門、六兵衛相勤ル、供五兵衛、荷持和介

正月四日、初寄り并見世勘定例之通相勤リ、目出度奉存候、

正月十一日、例之通り帳かため祝儀、役人不残出勤、朝飯有之、尤六兵衛、勘三郎兩人、無扨用事二付不参之事、

まんちう百 上 末組小船中

諸白式升 下組小船中

同式升 関船治兵衛

同式升 坂本新兵衛

同三升 尾花川船方式人

するめ式把

右之通持参有之、上下小船、尾花川共、勝手二おゐて酒出し申候事、

関船治兵衛、坂本新兵衛兩人ハ勝手方手伝致申候事、

正月六日、小船入上組四郎兵衛かたふね加子直乗押手善兵衛、右乗合之内廿四五才計成女傭人、矢橋着舟之節揚り候而四五丁計歩行いたし、引タヲレ居候趣、矢橋番人ハ同所船会所江相達候二付、矢橋舟方取計二而大津江のせ戻し候様、右旅人江申聞候得とも、跡へ者戻りとうなく明日ハ草津之方江可罷越間、今日之処此儘ニ差置呉候様旅人相頼候故、定而明日ハ出立可致候へ共自然之義も難計、依之前以為相知候段、以書面ヲ矢橋ハ大津へ申越候二付、見届ケ旁直様右使同道二而、同日七つ時過ハ舟主四郎兵衛、加子善兵衛、大雪ニ付岡廻り矢はしへ差遣候、翌日も雪二而道も甚そんし矢張立行不申、又候七つ八つ時分より上組仁右衛門見舞旁ミセニ遣候処、冷強病氣重り北便難通、弥出立難叶、是非ニも大津へ送り戻候様申之候故、八日八つ時分ハ右加子 四郎兵衛 善兵衛外傭人付添、右病人出所京都二条新地江差遣為及引合候処、京都ハ去八月埒明、当時大津八丁高嶋屋安兵衛と申者親判ニ付引渡候旨申之、則其夜九つ時分大津へ帰り、右高

嶋屋安兵衛へ引合候処、右之通り相違無之二付、明日ハ早々右病人安兵衛方へ引取候様押合相済、翌九日早朝小舟入ハ船仕立、安兵衛并二君八と申者、上組治兵衛付添、新堀沖迄罷越候処、折悪ク其節ハ大西風ニ而矢はしハ舟も立かたく、岡廻りニ而右病人かここのせ、矢はし加子傭人并番人付添、小舟入江為送戻候付、則右安兵衛中間内之者兩人小舟入二のこり居候故、直様引渡し宿元江つれ帰り申候、勿論此方ハ遣候舟も右之様子中中二而、矢橋ふね登り二承、新堀沖ハ漕戻申候事、

一、同日矢橋舟年寄長七、利兵衛大津へ御礼二被登候序旁、小舟入会所へ被立寄、則此方太郎兵衛挨拶并及懸合、右一件入用に承り置、翌十日小舟治兵衛、当中間代兼帶二而矢はし江礼二遣申候、

矢橋舟方江酒三升、

加子一宿いたし候宿へ鰯壹俵代貳百文、

右ハ当中間 差遣候事 差遣候事、

一、かたけ白米一升つゝ、九度二而九升、

右ハ番人方二旅人逗留中入用、外二錢五百文別段心付番人江、黒米六升大津迄かこ人足貳人、外二三升中飯代、送り来り候かこ半助へ貳百文、

右米錢代メ壹貫五百文、高嶋屋安兵衛ハ差出ス、

右一件相済候後、当中間へ酒三升、小舟へ肴持参二而、安兵衛礼二来り候、

一、正月十五日朝、嶋ノ関波留場上ニ、古雪踏一足、嶋木綿小財布壹つ、合羽たばこ入壹つ、徳利壹つ、茶碗壹つ、右之品捨有之候趣、嶋ノ関新兵衛ハ相知らせ候二付、早速太郎兵衛参見請候処、右之趣相違無之候二付、此段御役所へ左之通書付ヲ以御届奉申上候、



乍恐口上書

一、字嶋ノ関湖水船入浜之義ハ私共仲間請地ニ付、今朝六つ時頃仲間歩  
キ平兵衛浜先見廻り候処、波留場石垣上ニ別紙品書之通捨有之候旨、  
私共へ為相知候ニ付見請、近所ニ心当り之義も無之哉与穿鑿仕候得  
共、見知候ものも無之、勿論怪敷義も無御座候ニ付、右品差上御訴  
奉申上候、以上、

寅正月十五日

大津

御役所

捨物品書覚

一、古雪踏 壹足

一、嶋木綿小財布 壹つ

但内ニ端銭少々有之、

一、紙たばこ入 壹つ

但きせる壺本添

一、徳利 壹つ

一、茶碗 壹つ

〆五点

右之通御座候、以上、

寅正月十五日

大津

御役所

右之通相認メ、町方御役所へ町代堀猪三郎取次ニ而御届奉申上候処、  
御当番安井角兵衛様御聞濟被置、尚又様子相知レ候者、早速御訴

百艘船年寄

太郎兵衛印

可申上候様被仰渡候事、

正月十五日、芦浦御礼

一、観音寺様

扇子三本入壹箱

但し扇子箱くりあし台

右当年者御上京御留主ニ付御逢無之、御酒并御節子等者例年之通り  
被下置候事、

御家中西川五郎兵衛様、下物久松清右衛門様

片岡喜右衛門様 右御三人江扇子三本入壹箱つゝ、

右之通り孫右衛門、市兵衛相勤申候事、供与八、

一、正月廿一日、如例貴布祢御神酒、役人不残打揃、塩屋金七相招く、

一、同日、坂本町組八郎兵衛見習役出勤被致候、同組忠兵衛引付入盃相  
濟候、

右ニ付養子振舞料金百疋被差出候、諸白式升、鯛壹尾、鮑式つ、右  
ハ出勤祝儀として被差出、即座料理申付、一統給ひ申候、

一、津内出火之節小笠原蔵屋敷近所出火有之候節、船屋三郎兵衛右蔵所  
御出入被致候付、先三郎兵衛天明年中る所持舟為相廻用向被相勤候  
趣ニ付、其節蔵所る会釈等有之候由、依之此度三郎兵衛中間へ  
被相頼候者、自然右等之節所持之舟田舎へ下り当所ニ不居合候節ハ、  
中間るいつれの舟ニ而も為相廻呉候様、乍併当御役所御用ニ付船役  
多人用之節ハ、譬三郎兵衛所持之船たり共中間差図ニ任せ、外用ハ  
不相勤候段、当御役所御用ニ遣ひ可申候旨勿論之事ニ候へ共、左様  
之義無之節ハ右三郎兵衛頼之通り取計可申候、尤三郎兵衛罷出取計  
候歟、又ハ使ニ而も被差越候害也、右為挨拶と南鐐片被出候、  
已来八年々聊宛挨拶被致候害之事、

正月廿八日、御役所内堀様を年寄老人呼二参り、孫右衛門罷出候所、御同人様被仰候者、拙者義先達而町役被仰付事多候故、舟役御断去年の御頼申上候処、一昨日御免被仰付候故此段御風聴申入候、跡役之義ハ牧野九郎兵衛、加役者未被仰渡無候得とも、定メ四人之内へ可被仰付候、此段序之節浦々えも申達被下候様、

一、去九月御諸司代唐崎御順見之節、御代官早舟之加子共骨折二付、其御御酒二ても可被下筈之所、時分柄御取込二付延引二相成、此度酒三升加子ともへ被下置候趣被仰渡候故頂戴仕、即刻御玄閑迄孫右衛門御礼申上候事、

一、鳥目三百文

是者同断御代官休足所唐崎茶代、仲間より扣置候分御渡し被成候事、一、諸浦扣もの子年取集之節松浦氏へ、并二大浦へ飛脚賃書載被出候得とも、此分者出所無之、乍氣毒除置候事、

一、去冬諸浦扣帳被差出候内二、坂本系御廻状御差紙等浦々江被差出候義毎々之事、此御廻状二限り飛脚賃書載候訳如何と御尋被成候故、此方る申上候者、折悪敷便舟幸便も無御座候、諸浦がより御廻状と相心得、仕立飛脚遣シ扣置書載申候たん申上候、然者認方あしく、此方二て直し可申候、此後掛も替り候得ば、随分念入可被置候様、御申付被成候事、

一、先年貸舟屋六兵衛艦二て、鍵屋佐七浦変死人之節奥印、去年また小船入二て変死人之節奥印之義二付、貸舟屋仁右衛門并源介故障ヲ申候故、鍵佐浦変死之節書付ヲ吟味可致旨、与次兵衛并貸船屋兩人へ申付置候、此義いまた相調不申、近々しらへ申可聞候、右之外拙者役中掛り残り候儀者無之候哉、若残り候義も有之候ハ、可申聞候様被仰渡候事、

右之通二付、是迄長々被相勤、尚又已来元メ役二も有之候故、仲間相談之上右挨拶二与次兵衛内堀御氏御宅江参、金百疋為御肴料持参いたし候事、

一、去五月の北之町組市兵衛本役二被相成候処、此節肴少々到来候由二而、年寄、肝煎中江被及披露候、正月晦日打寄賞翫いたし候、ふなてつぼう、あら吸物、吹ふた五種組、ふり塩やき、松風銘酒式升、右ハ是迄例も無之、勿論已来迎も形とハ成不申事、

二月五日、町方御役所へ年寄老人罷出候様申参、次郎左衛門罷出候処、御町役内堀繁太様被仰候ハ、去ル安永七戌年柳町堀詰請地二建家仕度旨願出候節、其中間方二も差障之儀ハ無之由書付差出し有之処、漸至此節二右普請二此節取懸り申度、尤少シ目論見替度段右町の願出候、定而其中間方二差支茂有間敷様二存候へ共、為念相尋ル間障り之有無書付を以相答候様被仰渡、則安永年中之絵図、此度目論見替候絵図共御かし被下候二付、得と拝見いたし候処、差支二相成候様子二無之故、其段書付差上置候事、

但し委敷訳ハ安永七戌年柳町建家願留書帳へ相記有之、則此帳面ハ空地一件之内へ入置もの也、

覚

一、炭式俵

右者朽木兵庫之助様より被下置、慥二請取申候、以上、

文化三丙寅二月七日

百艘船年寄

枳屋市左衛門殿

覚

今昼九つ時を吾妻川浚方御見分二御越被成候二付、例之通御取計可被成候、以上、

寅二月十日

惣年寄

町代

百艘船年寄衆中

右書付到来致候二付、例之通年寄太郎兵衛右場所へ罷出候処、町掛り内堀繁太様御組山方柿沼小平太様、宿場年寄善右衛門付添、牢屋敷御見分有之、夫を京町通り境川町を川下迄御見分無滞相濟候上二而、嶋ノ関会所二而御休息被成候二付、茶、たばこ差出し候処、折節いなり新地二相撲有之候二付、直様右相撲へ見物二御越被成候而、中人頃迄御覽被成、御引取可被成候事、

二月十六日

京都西御奉行

曲渕和泉守様 関東御下向、

追分迄御出迎 孫右衛門、三郎兵衛、供和介

松本村迄御見送り 太郎兵衛、六兵衛、供五兵衛

一、二月十九日、御所司代稲葉丹後守様御組、獅子飛御順見御内見二付、左之御名前小舟入る御乗舟、小舟壹艘、

永田五郎七様

松下幸次郎様

向坂熊太郎様

大石彦三郎様

ノ

当二月十八日、御役所を呼二参六兵衛罷出候処、舟方御掛り牧野九郎兵衛様被仰候ハ、今度東尾上より丸舟遣ひ申度旨願出候、右浦方二者船株売つ之処、其売つハ勘次郎と申もの小丸舟壹艘遣ひ罷有、今又右舳相願候義紛敷相聞へ候間、其上中間方二而相調右可申上様被仰渡、其節尾上浦之願書此方へ御渡し被成候、則右願書写如左、

乍恐書附を以奉願上候

一、此度当村彦左衛門義、致借船渡世仕度御願奉申上候、就夫当浦之儀者、往古を村方二丸船拾壹艘御座候由聞伝罷有候、享保年中二者湖水浮配鳥獵船六艘御座候、獵ハ休居候得共、当御役所様御支配之節被為仰附候御運上銀ハ、唯今二至迄御地頭様江上納仕候、且又其昔より若州様、朽木様、分部様、右三ヶ所様御本陣四郎左衛門方二者五拾石壹艘、拾八石壹艘船止候得共、右三ヶ所様今津迄之船運送御用向ハ、当分借船を以相勤罷有申候、問屋四郎兵衛方二四拾八石壹艘、御地頭様御年貢米積来り候、船止候後茂未御世話仕来申候、十助壹艘、善四郎壹艘、彦左衛門壹艘、勘次郎壹艘、孫次郎壹艘、伊兵衛壹艘、善兵衛二拾八石壹艘、市郎右衛門式拾五石壹艘、徳左衛門七拾五石壹艘、孫四郎拾八石壹艘、四拾五年以前宝暦年中二太郎兵衛式拾石壹艘暫遣ひ申候、同年二四郎左衛門拾八石船作替、御極印石附御請申候、往古より船遣ひ申候家々ニ、唯今二船小道具杯残り有之候儀二御座候、其後三拾<sup>三</sup>老年以前、安永年中勢田之橋御掛替之節も、四郎左衛門、孫四郎、徳左衛門、御運上銀ハ不及申二、船渡入用櫓打三艘分差出申候、別段申上候通、乍恐当村義ハ小浦とハ乍申、海道浦筋二御座候間、船数無御座候而ハ、御用向相勤り不申難渋仕候、其上近年御地頭様御代官所、海津表へ御引被遊候二付、湖上往返之御用多御座候間、必止与相勤り不申候、持船、借船当分借二而茂御用向相勤渡世仕度奉存候間、何卒御慈悲之上、乍恐御賢慮を以先々

之通之船株御免被成下候様、偏二奉願上候、以上、

浅井郡

東尾上浦

文化三年寅二月

十助印

善四郎印

彦左衛門印

勘次郎印

孫次郎印

伊兵衛印

四郎兵衛印

善兵衛印

市郎右衛門印

孫四郎印

太郎兵衛印

四郎左衛門印

舟年寄徳左衛門印

庄屋太郎治印

大津

御役所

右二付尾上舟年寄徳左衛門ヲ当舟会所へ相招キ、治郎左衛門、太郎兵衛、孫右衛門立会様子相尋候処、徳左衛門申候者、当浦方ハ若狭海道二而、若州様、朽木様、分部様并御地頭郡山様御家中方、毎度西湖今津、海津まで之渡船御頼被成候義有之、舟数無之候而者不并理二有之、且者先々も舟数遣ひ罷在候儀ハ無相違候二付、此度願上候事二而、外二申立候証拠とても無之候旨被申之候二付、寛延四未八月石原清左衛門様〆湖上浦々之舟株高相調帳面二仕立差上候様百

艘中間へ被仰渡、其節湖上浦々〆中間へ取置候印付書物之内、東尾上浦之分相調見申候処、則当船年寄徳左衛門先代之印書如左、

寛

一、拾八石積 壹艘

孫四郎印

一、拾八石積 壹艘

四郎左衛門印

右ハ当八月二御帳面二書上申持船之分二而御座候、

一、船株之儀ハ前々〆大船壹艘株二而御座候、然共只今二而者大船無御座候、以上、

東尾上浦

船年寄

寛延四年

徳左衛門印

未八月廿五日

百艘御年寄中

右之通其節も舟数ハ式艘遣ひ居候へ共、株ハ壹つならて持伝へ不申趣と認有之、猶又安永三千年為船御改御廻村之節二者、丸船四艘御改請候旨、当中間留帳二記有之、此義如何之訳二而株壹つ二而如此舟数時々二増減有之事哉、今以難相分候へ共、湖辺之内舟株無之候而も漁船、尿取舟又者海越田地へ通行之ため、丸舟遣ひ居申候村々も夥多有之候へハ、定而右等之類二而可有之と存、尤無株之丸舟ハ其所々二而積のせ候品の差別有之、諸荷物運送ハ不相成筈二而、勿論右尾上浦ハ廻船場之義二候へハ、前々〆持伝へ被居候壹艘之船ハ、廻船艫おりも可仕筈二候得共、たとひ此度願之通御免被為成候共、新規無株丸船之分ハ、右御家中方西湖へ渡船用計二而、其余諸荷物運送等者決而不相成、勿論廻船艫おりも不相成、自然差障り二相成候節ハ、相止メ候古法二候間、右之趣得心之事二候ハ、此方共〆差障り之儀申上間敷候得共、不得心義二候ハ、可被申聞段申聞、



則右寛延之印書見せ候処、写忝枚呉候様被申写遣シ候処、熟得被致、何分宜敷取計呉候様と相頼被申候二付、如左此方<sup>ル</sup>書付ヲ以申上置候、

#### 口上書

此度東尾上浦二小丸船<sup>壹艘</sup>遣<sup>ヒ</sup>申度段御願被申上候処、右浦二ハ舟株<sup>壹つ</sup>ならて無之、当時勘次郎と申もの<sup>壹艘</sup>遣<sup>ヒ</sup>罷有候上二、今又願出候儀ハ如何々<sup>ニ</sup>候哉、私共方<sup>ニ</sup>て相調<sup>右</sup>可申上様被為仰渡、依之船年寄徳左衛門へ様子相尋候処、同人申候二ハ、尾上浦者関東方之若狭海道筋二候故、若州様、朽木様、分部様并地頭郡山様御家中方、西湖今津、海津迄毎度渡船御頼被成候儀有之、舟数無之候而ハ不<sup>レ</sup>弁理二有之、且ハ先年も舟数遣<sup>ヒ</sup>罷有候儀ハ無相違旨二申之候二付、寛延四未八月湖上浦々船株高御糺之節、右尾上<sup>方</sup>私共中間へ差越置申<sup>候</sup>書付相調見候処、其節茂株ハ<sup>壹つ</sup>二而十八石積式艘遣<sup>ヒ</sup>居候旨二認有之、猶又安永三年舟御改之節二者丸船四艘御改請候旨、是又私共中間留書二御座候、然<sup>レ</sup>共如何之<sup>ニ</sup>候<sup>二</sup>而舟株<sup>壹つ</sup>ならて無之浦方二、右舩船数増減御座候事哉、私共方二而も今以難相分奉存候得共、既二湖辺之内船株無之村方二而も、漁船并こゑ船又者海越田地へ通行之ため二丸船遣罷有候村々も御座候へ者、定而右等之類二而、船数ハ遣<sup>ヒ</sup>居候義二而可有御座と奉存候、尤無株丸船之分ハ、其所々二而積のせ候品々差別有之、諸荷物運送之儀者不仕筈二御座候、勿論右尾上浦ハ廻船浦二而御座候へハ、乍恐此度願之通御許容被為成候義二御座候ハ、右御家中方西湖へ渡船仕候迄二而、諸荷物運送等決而不仕、廻船艫おり之儀も前々<sup>方</sup>持伝へ被居候<sup>壹艘</sup>二限り、其余無株船之分ハ其儀仕間敷、自然差障り二相成候節ハ、御下知次第二早速相止メ候様御請書被為仰付候様仕度奉存候、且堅田浦、八幡浦へも申聞候上二而可奉申上筈二候へ共、遠方浦之儀故かけ合も障取、且ハ於右式ヶ浦も別段存寄有之間敷様奉存候二

付、此段奉申上候、以上、

寅二月十九日

百艘年寄

次郎左衛門印

大津御役所

右書付二月十九日御役所二而船方御掛り牧野九郎兵衛様へ差上置候事、

右之書付并尾上浦願書共翌十九日御役所へ治郎左衛門持参仕、牧野様へ式通共差上、委細之<sup>ニ</sup>候<sup>二</sup>申上候<sup>一</sup>、是二て<sup>レ</sup>訳合も聞へ候ゆへ、其段御代官様へ相伺可申と被仰候二付、いよく願之通御免被為成候義二候ハ、私共方へ御手形取置候様仕度奉存候間、此段御含置被為下候様、訳而願込置引取申候処、其後又候呼二参罷出候<sup>一</sup>被仰聞候者、徳左衛門義呼出シ候<sup>一</sup>、前々ハ舟数十艘余も御座候<sup>一</sup>、ケ様二願出候度毎御糺請候義恐入候間、此度十艘御聞濟置被下度、尤廻船其外他之差障り二相成候儀ハ急度仕間敷、如何様之御請書被仰付候共違背仕間敷旨申之相願候、此儀如何二存候哉と御尋被成候二付、尾上浦<sup>方</sup>者種々申立相願候共、寛延年中式艘遣<sup>ヒ</sup>候之外二証拠も無之儀二御座候得者、強而<sup>レ</sup>忝<sup>一</sup>艘之儀ハ格別二候へ共、其余相願候儀二候得者、堅田、八幡へも申遣、三ヶ浦相談之上ならてハ御返答難仕旨申上候<sup>一</sup>、迎も大造成義ハ御取用ひも無之候得共、二、三艘之儀ハ免遣候而も不苦哉与被仰候二付、好ミ候儀二而者無御座候へ共、御免被為成候義二御座候ハ、後年差障不出来様二急度御請書被仰付、猶又私共方へも手形取置申度候間、弥何艘御免被為成候与申儀御究り被遊候ハ、今一<sup>一</sup>心御為聞被下度徳左衛門へかけ合、<sup>右</sup>可申上候間、其上二而被仰付候様被成下度段、呉々申上候<sup>一</sup>、何れ二も評議定次第可申聞と被仰下候事、

一、翌廿日呼二参治郎左衛門罷出候<sup>一</sup>、船数三艘差免し、其余二遣<sup>ヒ</sup>



申度節者、時々願出糺し申請候様申渡し、則如此之請書申付候、其旨相心得候様被仰聞候二付、私共江取候書付之儀徳左衛門へかけ合候上二而、右申上候様仕度候間、恐入候得共請書御貸被下、暫御猶予可被下段御断申上置引取、即刻舟会所へ徳左衛門呼、二郎左衛門、太兵衛、孫右衛門立会及かけ合、則如左三ヶ浦宛之一札取置候、

#### 一札

一、当浦方勘次郎と申もの、小丸船壹艘遣ひ居候処、若州様、朽木様、分部様并御地頭郡山様御家中方西湖江渡船之儀、毎度御頼被成候義有之、船数無之候而者不弁理二候ゆへ、右壹艘之外二、此度小丸船三艘御免被成下度旨ヲ以、当所御役所様江御願申上候処、段々御糺之上願之通御許容被成下候儀二御座候、尤当浦之儀者各々方三ヶ浦廻船場二而、船株ハ壹つならて所持無之浦方二候故、此度奉願御免被為成候船之分ハ無株船二候ゆへ、右御家中様方渡船用二限り積のせ仕候迄二而、其外之諸荷物者決而運送仕間敷、并廻船艫おり之儀も、前々々持伝へ罷有候壹艘分者順番二立会可申義二候得共、株外之船者其儀不相成、自然差障り等二相成り候節者、御下知次第早速相止メ可申様急度被為仰付、則御請印形差上置申候、然ル上者、右御役所様二而被為仰渡候趣急度相守可申候、依之後年違乱混雜為無之、猶また各々方へも書付差出し置候処、仍而如件、

浅井郡東尾上浦

船年寄

徳左衛門印

文化三年寅二月廿日

大津浦

堅田浦 船年寄中

八幡浦

※

(※箇所に横書)「此一札之本紙ハ御箱へ入置、」

右之趣対談相済候旨、治郎左衛門罷出御届ケ申上、其節尾上浦御請書返上仕引取申候、但し右御請書此方二而写置候二付、左二記入、

差上申御請言之事

一、当村船年寄徳左衛門持船之内、小丸船壹艘同村彦左衛門江借船二仕度段、別紙願書差上候二付、尾上村之儀ハ前々船株壹艘ならて無之処、如何々之訳二而式艘所持罷有候哉御糺御座候、右船株壹艘之儀ハ、往古々諸荷物積請運送仕来候株二而、既二廻船艫折等之儀も右持伝へ居候船之外、一切不仕罷有候儀二御座候、此度奉願候者右株之外二而、当村之儀ハ若州海道筋御座候得者、毎々若州并朽木、大溝、其外地頭往来人、今津、海津迄渡船頼候付、艫船二而ハ渡船も難相成御座候二付、何卒株船之外小丸船三艘此度御免被成下候ハ、村方渡世相続仕、一同難有奉存候旨申上候処、段々御糺之上被仰聞候ハ、右株之外渡船願之義二候ハ、外浦二も右二似寄候通ひ船遣居候類も有之儀二候得共、自然渡船二事寄諸荷物積請、内分二而運送等仕候儀二ハ無之哉、右等之義有之候而者差障相成候義二付、容易二御取用難被成筋之旨被仰聞奉承知候、前文二申上候通、今津、海津辺江之往来人渡船仕候迄二而、諸荷物運送等之儀ハ決而不仕、廻船艫折之儀も前々々持伝へ候丸船株壹艘二限り、其余無株船之分ハ堅ク仕間敷旨、再応御頼申上候二付、然ル上ハ此度小丸船三艘願之通御聞済被成下候間、右申立候趣急度相守可申、尤右船数之外此渡船数相増度節者別段申立候様可仕、勿論外浦之差障り相成候節ハ、早速相止メ可申旨被仰渡候趣、逸々承知奉畏候、若相背候ハ、其節如何艫被仰付候共、御願ケ間敷義無御座候、依之御請印形差上申候、仍而如件、

江州浅井郡東尾上村

文化三年寅二月廿日

庄屋太郎次

船年寄

徳左衛門

大津

御役所

〔後事〕  
「此次文化八未七月再発、」

一、同日夕方徳左衛門船会所へ参、只今御役所表相済、尤御請書庄屋印形之儀者跡を持参候様、結構二被仰渡候儀二御座候、右二付各々様二も段々御苦勞二相成、忝存候、  
右為御挨拶早速罷越候旨申之、酒三升持参被致候、但し橋本町大新切手也、

当御役所船方御掛り内堀繁太様為御助役、去春牧野九郎兵衛様江被仰付有之処、内堀様義旧冬町掛り被蒙仰候二付、当春より船方おも役牧野様被成御勤候、然ル所向後牧野様方二舟御入用之節ハ、印鑑二為引合差出呉候様被仰聞、当二月廿一日御印鑑壹枚御差越被置候二付、則帳場南之方壁二張置候事、

一、去丑十月留帳二記有之候通、岩熊村舟積之義二付、塩津浦舟年寄半兵衛義、何角申参り被置候所、今度月戸浦孫六、長左衛門被参、与治兵衛、次郎左衛門逢候所、趣意ハ違候得共、右岩熊村八月出浦之舟積場所二而、則同領二付御年貢米其外共前々を積来り候所、塩津浦より新規之義被申懸、数度及対談二候得共相分り不申、尤御公辺二相成候義ハ不好義二候間、何卒各々様御世話ヲ以品能相分り候様致度段被申之候二付、左之通手紙相認メ右兩人江相渡、塩津江被達候様申聞置候、

態以手紙得御意候、追日春暖二相成候所、弥御堅勝可被成御座、奉珍重候、誠二去ル十月御出之砌御申置被成候岩熊村舟積之義二付、此度月出浦孫六殿、長左衛門殿被参始末被相語、尤御公辺二相成候義ハ甚以不好候間、双方熟談二而相分り候様勘弁二預り度旨被申聞候、此義拙者共手先二而相納り候事二も有之間敷候得共、争論二相成候義氣之毒存、且ハ旧冬各々方を茂承り置候訳茂有之事故、一応御双方江申談し上度様存候間、月出浦御同道被成、御上津有之候様致度存候、委細貴面二可申承候、以上、

二月廿九日

百艘舟年寄

塩津浦

舟年寄衆中

此一件終二出入二相成、当所石原庄三郎様御役所二而御吟味二之上、百艘方へ取囃被仰付、下済相調候二付、則発未別帳面二留記有之候事、

上巳御礼之事

石庄三郎様江

青銅百疋、下ケ札付テ

御手付

石丸佐伍右衛門様

元々

柴山泰蔵様

〃

七里左六郎様

町方兼帯

内堀繁太様

勝手方

山田仲助様

船方

牧埜九郎兵衛様

右六軒鳥目五拾疋宛

御門内御手代衆、組屋敷不残、中保町新建不残、北出雲平殿、右  
ハ手札計、

与治兵衛、六兵衛、供和助

三月四日、御役所より御配符壹通、但し堅田行、  
右御渡し被成候二付、暮七つ時堅田藤七渡ス、

三月六日

一、うくひ 廿尾

右者瀬田橋本村の例之通到来致候二付、式尾つゝ配ル、  
但し橋本村年寄喜兵衛と申仁持参被致候、

一、三月七日、月出孫六、長左衛門、前段一件二付登り来り、宿藏橋町<sup>山口町</sup>  
近江屋仁兵衛方二止宿被致居候、

一、同九日、塩津船年寄半兵衛、弥右衛門、右一件二付被登来、扇屋和<sup>閑脱</sup>  
邇屋藤左衛門方二而止宿被致候、

一、三月九日朝、塩つ年寄引合、与次兵衛、太郎兵衛、孫右衛門

一、十日朝、与次兵衛、治郎左衛門、孫右衛門、月出孫六、長左衛門江  
引合、同日昼後塩つ兩人江引合置、  
但右一件ハ別帳二委留置候事、

一、三月十日、先月柳町埋堀之義二付、右為挨拶と諸白五升、生鯛式尾、  
いか一はい、持参被致候、五人組喜兵衛、

右ハ別一件帳二委記有之、

右柳町年寄わかさ屋九兵衛殿方江、中間の手札持参礼二参候事、

一、三月十一日朝、月出招積方之義申談、其後塩津招同様申談候処、一  
先歸村致中間相談申上、跡る可及返答旨二付、尚又其趣月出江申聞、  
両浦とも歸村被致候事、

一、三月四日午刻、江戸芝高縄の出火いたし大火事之由二付、石原様御  
屋鋪茂類焼致候二付、三月十五日米屋会所の相尋二被越候、当御役  
所江御見舞として当中間を罷出候哉之段、依之与次兵衛米会所頭取  
木屋久兵衛江面談いたし候所、三十年来已前目黒焼之節旧記も有之  
候哉、又ハ是迄右例も無之義二候ハ、御見舞二罷出候二も及間敷  
哉之旨、右久兵衛被申候二付、此方二も留帳調見候処、其節留書等  
も無之候二付、此段米会所へ申咄し、御見舞之義中間相談之上相勤  
不申候事、

右之趣二候処、矢張米会所ハ頭取久兵衛殿計御玄閑迄罷出候様被申  
聞候二付、当中間之義も太郎兵衛袴羽織二而御玄閑迄御窺二罷出  
江戸表大火御屋敷茂類焼有之候段恐入候、依之殿様御機嫌御窺申上  
候旨申演之候事、

右之義二付、御手代衆中二も此節御慎被居候段承候事、

四月朔日、例年之通日吉御神事御配符御渡被成候、御状箱三、添御  
廻状壹通、×大津浦共四通、

大津百艘

一、御配符壹通

船持中

但し御文言例年之通二付略之、

覚

一、船数七艘

是八日吉御神事之節、御馬船

右之船来ル十九日、日吉御神事二候間、如例年可差出候、尤服忌差合之もの相改可申候、此配符令受印早々順達、留方可相返者也、

寅四月朔日 石庄三郎御印

山田浦

橋浦

船持

右山田浦之御配符壹箱、四廻り五兵衛、東江為持遣ス、

来ル十九日、日吉御神事神輿船割賦之事

堅田浦

水主<sup>(人脱)</sup>九宛

丸船貳艘

外楫取壹人

船年寄

但百八拾石積<sup>ル</sup>貳百石積迄

二宮方早船

今津浦

丸船壹艘

水主拾壹人  
外楫取壹人

甚丞

丸船壹艘

右同断

十左衛門

丸船壹艘

右同断

八郎左衛門

丸船壹艘

右同断

船年寄

海津浦

丸船壹艘

水主拾壹人

次左衛門

外楫取壹人

丸船壹艘 右同断

嘉助

丸船壹艘 右同断

甚兵衛

丸船壹艘 右同断

船年寄

塩津浦

丸船壹艘 水主拾壹人

角兵衛

丸船壹艘 右同断

弥右衛門

丸船壹艘 右同断

孫三郎

丸船壹艘 右同断

清兵衛

右之船例年之通致吟味、来ル十九日以前大津江着船可致候、尤服忌差合之もの相改可申候、此配符令受印早々順達、留り所より可相返者也、

寅四月朔日 石庄三郎御印

堅田浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々

船年寄

牧野九郎兵衛様<sup>方</sup>御添触壹通、御文言左之通、

来ル十九日、日吉御神事二付、例年之通船割賦被差出候、右差船之内差支有之候ハ、石付揃候丈夫成船致吟味、代り船可被差出候、尤御神事四五日已前大津江差船、其段可被相届候、此添廻<sup>ル</sup>状共昼夜不限早々順達、留り所より可被相返候、以上、

大津御役所

寅四月朔日 牧野九郎兵衛

堅田浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々

船年寄中

右堅田浦始之御配符并添御廻状共式通壱箱入添状付、片田堀之舟忠二郎江相渡、四月朔日午之刻、

山王御神事之節、神輿船二寄近年雇水主乗船いたし、還御先着勵合之砌水主共不法之儀有之、相互二怪我人等致出来候由も相聞候付、右御神事之節寄進乗或者助水主二罷出度もの有之候共、往古々定来候神輿船壹組二加子式拾貳人之内江加り候儀者格別、右之外壱人も神輿船江乱乗候儀致間敷旨前以申触候趣、弥堅可相守候、若相背候もの於有之者、急度可及沙汰条、可得其意候、

右之趣船持并水主働いたし候もの共へ不洩様可申聞候、此廻状浦名下令請印、早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

寅四月朔日 御役所

矢橋方八幡船木迄

右浦々庄屋、船年寄

右同断

坂本方北小松迄

右浦々庄屋、船年寄

右書付八例年昨朔日御回状壱所二御差出被成候処、御失念二付則二日呼二参り、与次兵衛御役所江罷出候処、牧の九郎兵衛様御渡し被

成候、依之昨日此方船割賦差入御渡被成候御用箱、右序二御役所へ持参いたし候へ共、直様かり請矢橋始之方差入、矢橋船へ上ノ番片田町舟相渡し候、西側坂本始之方ハ、此方御用箱二差入相廻し申候、使両方とも与八、但此箱留り所百艘会所へ御戻し被成候、此書付箱二入遣候、坂本大道市右衛門渡、

前二留有之候山田浦、矢橋浦へ御差出被成候御配符、其箱当二日小舟入会所へ戻り候旨申之、廻り与八当会所へ持参候二付、翌三日朝御役所へ次郎左衛門罷出、牧野九郎兵衛様へ差上ル、

右ハ矢橋方小舟入会所へ差越候哉、山田方参候哉之儀ハ不分候へ共、重而ハ先浦方直二返上仕候様可申遣事、尤右御配符二も山田浦、矢橋浦と御認有之儀二付、山田浦へ相届呉候様と、先年山田方申参り有之間、重而ハ山田へ相届可申事、

四月三日

一、酒式升切手

右ハ当関木地屋忠兵衛祖母死去香儀遣ス、尤当関内二不幸有之節ハ、何れも如此取計有之候事、

一、当三月膳所新堀ニてすもふ致候二付、見物ニ参候様札持参被致候へとも、見物ニハ不参、しかれとも水上仲間より願之義故、貳百文相そへ戻候事、但し同シ仲間之者藤次郎へ相渡ス、是迄もふだ持参致候事二三百文相添戻し候へども、已来者持参不致様申置候事、



一、大津町組之内市松義去秋死去被致、当時右名前仁無之候二付、名跡之もの取捨可申筈之处、未菱屋伊兵衛義も若年之事故、差当り名跡二可相立もの無之、追而相定候迄当時仁兵衛預り二致置申度、跡同組大津町江親類俱々被相頼候、依之中間相談之上、出作組、北之町、堅田町江も及通達、頼之通大津町組へ書付取也、一同承知いたし義二付、今般四月九日酒肴被差出、役人一同打寄請申候事、伊兵衛并親類玉屋十兵衛当日挨拶礼二被罷出伺候ハ、始終取持被致候事、

吸物 鮎 八寸御重 生貝、あつやき、かまぼこ、

ミそ 干柿、いかミそつけ

小附食 鯉さしミ あらすつほんに、せうか、かりぎ

きうり

小焼物 さはら切目、付やき

生鯛 おろし 赤貝生姜酢 大はす

醤油 汐焼 蓼酢

はつさなか 香物 大こんあさつけ 水物梨子

ひたし物いりうな きうり 枇杷

×酒松霞 板元貝屋半六

一、四月十日、沖之嶋方鰯三本到来、則日貝半へあつけ申候、

一、石場寶浄院、此度聖護院様峯入御供被仰付候二付、御初穂寄進之儀被相頼候二付、鳥目式百文、則寄進帳共四月十七日二廻り与八江為持遣候事、

月出へ遣し候書面之写

以手紙得御意候、薄暑之砌弥御堅勝二可被成御座珍重奉存候、然者兼而被仰聞候一件之儀、当十四日塩津弥右衛門殿被参、何卒相談候様致度存色々申談罷有候へ共、先日被仰聞候趣二而ハ迎も相調不申候、何分月出方を御取鎮被下度候、尤此方共御公辺へ願出候了簡二而ハ無之候へ共、先方る被願申御召状附候へハ、何方迄も罷出候積り二御座候との返事二而御座候、右不熟之段於拙者共二者扱々氣之毒二候へ共、致方無之義候間、左様思召可被下候、尚御上津之儀も御座候ハ、心緒貴面二可申述候、先者此段御達申度如此御座候、以上、

四月十八日

百艘舟年寄

月出浦

孫六様

長左衛門様

右之書状川口柴屋仁兵衛方へ持せ遣入、

一、船方牧野九郎兵衛様、山王御神事当年始而御出役二付、為御心得之是迄右御神事二付、事変之義共有之候ハ、書付くれ候様内々御頼被成、依之左之書付相認、四月十九日朝与次兵衛持参いたし、於御役所二直々差上ル、

覚書

一、明和八卯年四月十四日、暮時過迄御祭礼之御沙汰無御座候処、林作四郎様、服部丈右衛門様、北出氏、執行代江御懸合在之、御神事御延引之事二候ハ、船共為引取可申哉之趣御達在之候処、是非御執行者可有之、万一及延引候ハ、御召船迄御返答可有之由二而、其夜

四つ時頃神輿於七本柳二而御乗船無滞相濟、同夜八つ時半時頃御帰館在之候御事、

一、天明三卯年四月廿四日、坂本於松原二膳所御供舟文使之者を坂本之者打擲いたし、御神事及遅刻、暮時二相成御神輿御乗船、夜二入夫の御供備相濟候処、大風大雨浪高真つ闇二而方角不相知、御召船ハ堅田町裏へ漕付、御奉行船ハ小船入、御台所舟、御供舟ハ扇屋関金藏堀、御水船ハ大濱へ着船いたし、御殿様二ハ追々御迎來り、堅田町の御乗物二而陸地御帰館在之候事、其外膳所御供船も扇屋関へ漕付候而、翌日百艘を送り遣候事、

一、寛政拾一未四月廿日、御帰船之砌闇二而風雨つよく、殿様御召船ハ際川江掛り、夫の陸地御帰館被遊、船二ハ御組御同心計御残り被成候二付、水主共大勢追々かけ付、漸無恙金藏堀へ着船仕候、尤膳所御供船も其夜ハ其辺二掛り罷有、翌日引取被申候、其外御役船之分無難二歸着仕候御儀二御座候、

一、享和三亥四月廿日、七本柳神輿船着船場所之儀ヲ申募及口論、坂本之もの共塩津船方之ものへ疵付候段、即刻同所二而塩つ浦の御届被申上、内堀様御聞掛被成置、御神事後大津御役所江被召御糺御座候上、其後京都御役所懸り二相成候、尤委細之義ハ塩つ浦二能存知罷在可申と奉存候、

於七本柳御機嫌御窺罷出候浦順并献上物之覺

|      |       |
|------|-------|
| 鮒拾枚  | 百艘    |
| 菓子一折 | 本堅田   |
| 諸白三升 | 坂本    |
| 鰻頭一折 | 松本三ヶ所 |
| 同    | 矢橋浦   |
| 鮒三枚  | 山田浦   |

鰻三本 釣漁師  
鮒三枚 西ノ切

以上

右之通二御座候、以上、

寅四月十九日

百艘

一、近來船方御懸り役二付神輿船關取四月十八日御神事前日内堀様於御宅有之候処、当年ハ前書牧野様御懸役二被仰付候付、四月十八日右御同人様於御宅二無滞關取相濟、年寄与次兵衛例年之通手つたひ二参候事、

御酒二枚重大盃

吸物椀二竹のこ、やきとうふ、こんにやく、にしめ也、

干鰯むしり、花かつほ

外二白豆腐やつこ、是者是迄無之候、

当年ハ別御あしらい、

一、失態之義二付、前書書面月出清左衛門江遣置候処、此度登り來り候二付、四月十九日直二申咄し不熟之趣、尚又得と勘弁いたされ、此上存寄も有之候ハ、何時二而も可被申來段申聞候処、今日ハ山王御神事取込二付、とくと相考跡の可申来旨二而被引取候事、

|    |     |
|----|-----|
| 彦根 | 山形屋 |
| 米原 | 出船宿 |
| 長濱 | 平兵衛 |

橋本町北側西長屋江下ル東角山形屋平兵衛、但彦根長屋山岡嘉右衛門方ノ別家也、与申方二、両三年前方右之札表二懸ケ有之、当浦之障二可相成と存、御役

方まで内々申上置候、然ル処同人義同町南側東筋違向へ変宅いたし、前懸ケ札出し有之候処、当二月十一日平兵衛并町役人等、町方之御役所へ被召出御察当被仰付、右看板札者御取上ケニ相成候趣風説承之候二付、為心得爰ニ留置候事、

四月廿五日、針江浦幸左衛門当会所へ被参、与次兵衛、次郎左衛門立会、例年之祝儀舟宿酒代并積荷物ハ何様之品被積登候共、舟賃ハ米四百六拾俵分の米舟賃被渡候様申談候処、種々仕来り又ハ此節難渋等取交断被申候へ共、取用難成筋のミの事故、其利筋申聞候二付、宿酒手之儀ハ向後相止メ可申候得共、舟賃之儀ハ其時の積物丈ニ而了簡致呉候様と達而被申候二付、然らハ一向三ヶ浦とも例年一ヶ浦へ米三俵つゝニ而仕切ニ可被致哉と申談候処、式俵方強而式俵半迄ニ究呉候様と被申、此儀当浦切ニ取極も難成候間、頓而舟帳納之節上津可被致、其節三ヶ浦も相揃可談と申置候、依之舟帳納御日限之内未被登候筈ニ定置候、尤自然難登り差支等候ハ、前以被申越候様と申置候間、其頃沙汰不被致候ハ、堅田、八幡へも右日限ニ被登候様、此方方申遣可置事、

但し其節幸左衛門難登旨断被申越候ハ、九月十四日堅田ニおゐて三ヶ浦立会可得御意間、其節ハ無間違堅田迄被出候様と申談し置有之候事、

四月廿六日

一、笋拾本

右者例年之通り三井寺ヨリ到来、役人中へ配当致候事、

一、坂本町組小兵衛義、船株一つ所持被致自分ハ商売用二付、京都へ被

登居、何角之義ハ同組酒屋佐右衛門殿江中間表之用向被相頼置候処、此度勝手二付、右船株売払申度段被相願出候処、是迄永々被持伝置今更中間離散被致候段氣之毒ニ存、何卒不相替持こたへられ候様申咄候へ共、内借等も有之、何分売払候へハ勝手ニも相成候段、佐右衛門殿方も俱々被相頼候事故、組内相談之上、則同組治郎左衛門方へ中間定メ直段を以買得被致、四月廿六日帳切相済申候、右小兵衛一罎之義、別紙書付等御箱ニ収メ有之候二付略ス、

右治郎左衛門方為祝儀、定列之通鳥目式拾足、坂本町組江鳥目三拾足、別ニ為肴料と鳥目百足、中間役方人江被差出候、是ハ例ニハ不相成候事、

一、坂本町組八郎兵衛船中絶致在之候処、当年新艘造り被立、右為祝儀金貳百足中間へ被差出候二付、一統及披露、右鳥目百足と打混し、酒肴相調役人不残打寄、即座ニ祝候事、

一、已前ハ船方ニ御座候処、当時町方懸り内堀繁太様、外ニ三好仁十郎様、同心左久間官吉様、但正蔵様御子息也、右三人去亥年樂姫宮様関東御下向之刻、御役二付道中賄方として石原庄三郎様御下向在之候処、右三人道中筋ニおゐて御無念在之候趣二付、京都へ御召寄、其上当四月十三日網乗物ニ而江戸江御下り、依之右繁太様義ハ是迄格別御懇ニも被仰候事故、御宿元江為御尋治郎左衛門罷越、御老母ニ御目懸り何角之義共申上候処、念ニ入候段被仰聞候、尚又四月廿六日又留主中為御尋と与次兵衛罷越、菓子壱箱三種入持参いたし、右老母ニ進候処、一統へ厚礼申くれ候様被仰聞候事、右菓子、千とせ飴、大こんへいとう、わらひの形あるへいとう

代拾五匁余り

京都三条小橋橘屋ニ而買調候事、

一、五月六日、堅田網船方鮒五枚至來、使樵次郎

五月節句御礼左二記、

石原庄三郎様へ 青銅百疋、木札付

元々

柴山泰藏様

〃

七里左六郎様

町役

石丸佐五右衛門様

勝手方

山田仲助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ青銅五拾疋つゝ、

御門内御手代衆、組屋敷不殘、中保新建不殘、北出氏へ、手札計、

孫右衛門、三郎兵衛、供和介

一、五月九日、大坂御目附様石山筋供御之瀬御順見御越被成候二付、例

之通小船三艘差出シ候事、

本田丹下様

小出主膳様

右之通二付、例之通孫右衛門、三郎兵衛出向相勤ル、供和助

一、若狭屋八兵衛殿弟岡田弥兵衛殿

右同人子息

小八殿

右兩人共見習ひ二御供被致由二付、右同人八兵衛殿方被引合候二付、  
為心得記置候事、

一、五月十一日巳ノ下刻、御役所方御茶壺之御配符式通、左之村方へ持  
せ遣入、

野洲郡

野田村始老通 賃錢三百五十文、先取、

蒲生郡

田中江始老通 同 四百文、先取、

右之通十二日朝、飛脚和介持せ遣入、

先触 大津御役所

御用 牧野九郎兵衛

百艘方

矢橋迄

覚

一、分持 壹荷

此人足 壹人

右者就御用我等儀明後十九日大津出立、野洲郡野洲村迄罷越候条、  
御定之賃錢受取之、人足可被差出候、此先触矢橋村二留置、我等着  
之節可被差出候、以上、

大津御役所

五月十七日 牧野九郎兵衛印

百艘

矢橋

庄屋

年寄中

雨天二候得ハ陸路罷越候間人足用意不及候、  
右廻り五兵衛直持せ遣ス、

一、五月十八日昼八つ時、矢橋治郎兵衛船乗合旅人大勢乗せ、膳所城  
先二而矢橋茂兵衛船大津方帰り二、双方引合ニ乗合、船之へ先二積  
込有之候兩掛并勢州山田荷物式固、茂兵衛船之ろ杭二引懸ケ入水致、  
早束引上ケ候処、荷物式固ハ則矢橋問屋茂兵衛方積入、当津問屋白  
銀屋陸助江宰領共引取被申切解干乾、右之内上之御所江参候熨斗  
も少々しめり候二付、宰領付添直様上京被致、残り之分ハ白銀屋相  
頼置、矢橋茂兵衛呼二遣し、被来次第相談可被致旨、又兩掛ハ美濃  
之国立木安五郎と申仁二而、老母、若徒兩掛式荷之内一荷水入いた  
し、小船入船屋平六方江着被致、早束干乾いたし候処、右老母衣類  
其外鞠之衣装等二而、尤右安五郎殿は飛鳥井様御近習格二而被相勤  
候趣被申聞、外之品ハ自分之物二而、乍迷惑如何様可致なれ共、飛  
鳥井様御内へ届、目代方届状、御印鑑等も濡候事故、此忤二も難相濟、  
何分上京之上御殿へ申上、御差図次第二可取計段被申聞候、則矢橋  
役人呼二遣、酉刻過年寄長七、利兵衛、浜番藤十郎、問屋茂兵衛被  
登来、与次兵衛、太郎兵衛俱々申断、大躰了簡も可被致義二候へ共、  
此上御殿表之義ハ難計、随分品能申上、穩便二済候様可致間、安心  
可致段被申聞候二付、先つ引取候事、  
但矢橋不被登来候已前二、宿平六方へ治郎左衛門、太郎兵衛  
挨拶二罷越、具二申承、右同様之事、  
一、茂兵衛、藤十郎は夜通し二宿方相頼ミ、かこ二而上京被致候、  
一、翌十九日朝、矢橋年寄兩人并与次兵衛宿平六方へ罷越、前夜之趣  
尚又挨拶いたし、無程出立被致候二付、駕籠式挺、外二人足式人矢

橋方差出し、京都旅宿富小路三条下ル岐阜屋作兵衛と申方迄被差送、  
前日る雜用等不殘矢橋方被取賄候事、

一、右之趣二付、矢橋年寄兩人引続京都旅宿迄断二被登候事、

一、翌廿日七つ時過、右兩人当所江被引取、於京都段々被及懸合、無難

二事済致候趣被申咄候、

一、勢州山田荷之方ハ、諸事京都境町四條上ル所、伊勢荷問屋伊勢屋某  
と申仁引受世わ被致、夫々大躰断も相立候趣二候処、上ノ御所江上  
り候熨斗、乾候程たんく縮候而、逆は納り不申趣二付、直様右宰  
領引返し、勢州山た江二日限二而夜通し二被往登申候、被帰次第如  
何様二も取計事済いたし候様可仕段、先案心之旨被申咄候、

六月五日辰之刻土用入

六月十日、当所暑中御窺

石原庄三郎様 素麵三拾把 二重くり台下札  
包熨斗

御町役元 小頭 佐久間正藏様

芝山泰藏様

御目附小頭兼帶

七里左六郎様

御勝手かた

山田仲助様

御目附  
「多賀喜曾太様」

御町役元

石丸三五右衛門様

「川嶋文左衛門様」

船かた

「四軒十五わ宛」

牧野九郎兵衛様

「五軒廿把宛」

右之外御門内御手代衆、長家并北出雲平殿、手札計二而相勤ル、



与治兵衛、勘三郎、供五兵衛

手札数差出し共凡三十式三枚二而宜

一、六月十一日、三井寺を暑氣見舞として、例之通素麵廿把到来致候事、  
一、右暑氣見舞之節、内堀様此節江戸下ノ御差支二付差扣へ、

右三井寺より到来候素麵、夜分孫右衛門致持参候、

一、六月十三日、矢橋年寄利兵衛、中村茂兵衛兩人被来、頃日はまり荷  
之事落着二付、右為挨拶酒三升、鯛浜焼二枚持参致よし、年寄長七  
義此節庄屋役承り候付、不参致候趣断被申候、右浜焼二ねき入即座  
二披露目申候事、

一、五月、月出浦船年寄を塩つ浦より相手取、当御役所江御訴訟被申上候  
処、六月十六日双方御召出二付、右両浦庄屋付添被罷登逗留致被居候、  
依之左之通見舞遣入、

一、諸白三升切手 塩つ浦へ  
鯛浜焼式枚 宿和邇屋彦左衛門方江為持遣入、

一、諸白式升切手 月出浦へ  
鯛浜やき一枚 宿川口丁柴屋<sup>仁兵衛</sup>兵衛方へ為持遣入、  
鯛一枚四匁つゝ、

此節肴物払底二付高直御座候、

六月十三日、京都暑氣窺、

西御奉行

曲淵和泉守様

右ハ此節御退役二付関東御下向故相勤不申候事、

東御奉行

一、森川越前守様

御用人

小柴宗右衛門様

鈴木又兵衛様

村田直右衛門様

御勝手方

村田忠兵衛様

右八軒へ手札計

西公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新右衛門様

熊倉恵助様

右銀壺両宛

東公事方

三 山田釵次郎様

一 上田弥右衛門様

四 <sup>(貼紙)</sup>「石嶋五三郎様」

二 本多金右衛門様

右へ白銀壺両つゝ、

金式百足

御取次

松野小右衛門様

柴田宗藏様

伊藤右内様

鈴木七藏様

同下

千賀与惣右衛門様

上田八藏様

菊地治郎左衛門様

柏原次部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗助様

真壁郡右衛門様

右手札計

同下

中川奎左衛門様

末吉新左衛門様

喜多尾八郎右衛門様

<sup>(貼紙)</sup>「中尾勇右衛門様」

櫛橋平藏様

平尾安左衛門様

中川定右衛門様

森孫六様

右八軒へ手札計

上町代

田内与助殿へ白銀三匁

若狭屋八兵衛殿へ刺式(刺脱カ)さし

右之通孫右衛門、忠兵衛相勤申、供和助

一、例年之通湖上船増減相改帳面記、来月朔日ヨリ十五日迄二可致持参候、

一、右帳面之内、浦方ニヨリ貸船混乱いたし間、(候脱カ)借り主、貸舟屋共入念相改、船毎ニ貸借符合いたし候様可書出候、

右之通得其意、此配符致請印無遅滞早々順達、留り所より可相返候、以上、

大津

印)寅六月廿二日 御役所印

大津浦始川道終

庄屋

舟年寄

一、同 壹通 御文言同断故

略之

松本浦始伊庭終

覚

一、金貳百疋

一、白銀壹枚

但し当年者糠屋八兵衛殿持参被致、  
如此請取相認メ差遣し候事、  
右者從御本山被下置、慥ニ請取申候、以上、

文化三年寅七月朔日

百艘年寄印

当津十日講御肝煎中

右金子之所例年五百疋ニ在之候処、此節御普請御休ニ付、金子之所計貳百疋ニ相減シ呉候様講中糠屋八兵衛ヲ以被相頼候ニ付、中ケ間相談之上右之通り相減シ候得共、亦々御普請始り次第先例之通り五百疋ツ、被下候筈ニ、糠屋八兵衛殿へ引合置申候事、

京都西御奉行

牧野大和守様御登り

草津迄御出迎 孫右衛門、勘三郎、供和介

石場迄御出迎 同断

八町迄御見送り 孫右衛門、三郎兵衛、供同人

六月晦日夕石部御泊り、

七月朔日夕当津御泊り、

一筆啓上仕候、残暑之砌ニ御座候へ共、弥御安全ニ可被遊御勤役奉珍賀候、然者今度西御奉行様御初入恐悦御請御日限被為仰出候ハ、早速御知らせ被下候様仕度、偏奉頼上候、右御頼申上置度態々如斯御座候、恐々謹言、

七月三日

百艘舟年寄

田内与助様

右之書状三日朝飛脚三井屋へ渡入、

七夕御礼

石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

元々

柴山泰蔵様

〃

七里左六郎様

町役

石丸左五右衛門様

勝手方

山田仲助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ青銅五拾疋つゝ、

御門内御手代衆、組屋敷不残、中保新建不残、北出氏へ手札計二而相勤申候、

孫右衛門、三郎兵衛、供孫七

一、下堅田町年寄弥助殿身上不如意二付、町中の方以取立、則白銀屋陸助殿、いせ屋孫左衛門殿頭取被成世話、此度五拾目掛二十人取退講被結遣、中ケ間四廻り四人方壹枚致加入候様被申聞候間、如何之返事可仕哉と申出候二付、及評義相考江候所、右町内ハ四廻り舟上ケ番乗せ場二付、四廻り并水主共義日々ニ立入致渡世候所、折二振故障等有之、町衆之内ニも彼是被申居候仁も候へ共、右白陸、いせ孫両家ハ荷問や之事故、百艘方江始終交り被致、殊ニ百艘内ニ縁家も有之、別而いせ孫ハ百艘中間内ニ候故、両人方取詰被置町衆方も此兩人江之遠慮ニ而、是迄差障筋不出来由ハ兼而及承候事ニ候へハ、右講ニ致加入も置候ハ、町中の方氣受も宜候わんと被存候而被申候事と存候二付、断ハ難申義候、尤其方共日々渡世ニ附候へハ、先四人為中合手切ニ致加入可然、万一未ゑくニ而差滞義も出来候ハ、

其節可致遣勘弁段申渡置候、依之右四人之内北野町組廻り之与八名前ニいたし、壹枚加入いたし候事、

一、五拾目掛二十人

内十人分今寅七月の年ニ式会宛、振鬨入札ヲ以五ヶ年ニ相済候由、残十人口ハ五ヶ年済候上、割戻しニ相成候由、

×

右之通当寅七月五日結講相勤り候事、

一、田内与助殿方西御奉行様御初入之儀、来ル廿一日と申返書参り候二付、左之通り返事致遣ス事、

当月四日出之御状昨八日相達シ、忝拜見仕候、残暑強御座候処、弥御壮健可被成御座、珍重之御儀奉存候、然者西御奉行様御初入御礼之儀、来ル廿一日ニ相究候二付、前日上京可仕段被仰下、委細承知仕候、段々御世話被下候段、忝奉存候、猶此上宜敷御引廻シ被下候様奉希候、右御請申上存迄、書中を以如斯御座候、恐惶謹言、

七月九日

百艘年寄

田内与助様

一、片山浦太郎兵衛船米其外荷物積登り、七月十一日荷物揚ケ仕廻、金蔵堀蔵橋町之行当り江廻し置候所、同夜四つ過時、艫之間より火出候所、右堀ニ居合せ候船之水主共并右町内之衆中かけ付早速消鎮申候、尤御蔵御役所近辺之事故、右御役人様方ニも火事装束なされ御越有之候故、百艘年寄次郎左衛門、蔵橋町年寄仁兵衛同道ニ而、御役所、御当番所并ニ御目附方三軒江ハ不取敢、夫方治郎左衛門壹人舟方御手代牧野九郎兵衛様、同下役北出雲平殿江も即刻口上ニ而御届申上置、猶又御蔵番衆三軒江ハ、右舟宿蔵橋町近江屋喜兵衛、舟

主被召連御断二被参候様致差図遣し候二付、早速被参候所、御蔵懸り重役石丸三伍右衛門様江も相断候様と、御蔵番氣山氏より被致差図候二付、是又御断二被参候事、

一、翌十二日早朝、宿喜兵衛舟主召連北出氏江参り、昨夜御届可申上義二候へ共、混雜仕罷有、無其義段断申可被参様と致差図置候二付、則同日早朝右兩人北出氏江被参候所、其段御同人を重役牧野御氏江御申上被成候所、追付出勤之上右可及沙汰間、差扣江候様と被仰聞其後北出氏を呼二参り、先達而御地舟左様之義も有之所、其節も不及御届二相済候趣候間、此度之義も不及其義御聞済被為置候間、左様心得候様と被成御申候旨、当会所江宿喜兵衛舟主代申参ル、

一、翌十二日朝、次郎左衛門義右舟内見二参り候所、艫之間火床之辺、前づら之ふりかけ、をも木、たな横ばん、挟げた、束木台敷居、帆柱之す等黒クふすぼり、垣戸やけぬけ候迄二て有之故、見物人参り候而ハ如何ニ存、大濱江為廻置候、尤舟主太郎兵衛義ハ登り不申、雇か子計二候事、

右一件為挨拶諸白切手式升、宿近江屋喜兵衛持参、

#### 乍恐口上書

一、当津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙、此度西御奉行様御替二付、御書替頂戴仕度候二付、為御願明廿日京都東御役所へ持参仕候二付、此段御届ケ奉申上候、以上、

文化三年

寅七月九日

大津御役所

右之通町方御役所へ御届ケ申上候、但し御目附三人、橋本町年寄、

小歩キハ口上届ケ二而候、

#### 乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙、御書替頂戴仕度奉願上候、則先達而被下置候御高札、御印紙、奉御高覧二入候、尤是迄之御高札、御印紙共、前々之通り被下置候様奉願上候、以上、

文化三年

寅七月廿一日

御奉行様

大津百艘年寄

与次兵衛印

孫右衛門印

七月廿一日、西御奉行様恐悦相済候後、東御役所江罷出、御印紙、御高札共御廊下二而中川左衛門様へ差上候所、則公事方御部屋へ罷出候様被仰聞、公事方与力本田金右衛門様、御印紙御文言之訳其外船方之義共具二御尋被成、猶追而可及沙汰間其節罷出候様被仰渡候、從此方別段御願申上候者、御制札ハ文言之处あさやか二見へ候間、御名書、年月計御書替被下度段申上候処、尤之義二候間、致承知候旨被仰渡候、

七月廿一日、京都西御奉行御初入恐悦御受被成候旨、町代田内氏を前以為知来候二付、前日を与次兵衛、孫右衛門、供和助召連、宿<sup>(神泉苑)</sup>しんせんゑん町鍵屋佐助方へ罷登り候、

西御奉行

牧野大和守様

金子式百疋

目録台

下ケふた付

御用人

(小熊三郎左衛門様  
同藤四郎様)

同居

(香西伴助様  
同宗吉様)

酒卷吉右衛門様

神山善太夫様

御勝手用人

中村重右衛門様

御取次

十九浦九十九様

嶋田武助様

岡野大助様

横溝市右衛門様

〆九軒

名ふた計二而勤、

上町代田内与助殿世話被致候二付、先例之通銀壹兩遣し申候、

石原庄三郎手代

先触

曾根源次郎

大津始

覚

一、乗駕籠 壹挺 此人足式人

一、分持 壹荷 此人足壹人

〆人足三人

右者我等儀就御用、明廿五日曉六つ時大津御役所出立、江州愛知郡読合堂村迄罷越候条、書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遅滞差出、且川越、渡船之場所は從前宿及通達、差支無之様可被取計候、此先触早々継送、於読合堂村我等着之上可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

寅七月廿四日

曾根源次郎

大津、矢橋、草津、守山、武佐、愛知川、読合堂村、愛知川

迄迎人足三人可被差出候、

右宿々

問屋

年寄中

右未下刻御渡被成候二付、即刻小舟入迄五兵衛為持遣入、則矢橋金勝屋ふね加子彦兵衛へ遣入、

七月廿五日聖護院様御入峰二付、矢橋浦方先年も峰入之節、当津ノ船を借り申候故、此度も手支之節者御借被下度趣、前以頼来り有之故、其趣相心得罷有候処、先年二者上京人も無数候故か、借り船之沙汰も無之候事、

一、明五廿五日

一、御高札可相渡間、明後廿五日九つ時、東御役所江年寄兩人罷出候様被仰渡、公事宿鍵屋佐助方添手紙被差越、賃錢貳百五拾文相渡申候、七月廿三日出、廿四日二来ル、

一、廿五日九つ時分、東御役所御廊下江与次兵衛、孫右衛門、繼上下二而罷出候処、中川左衛門様御出被成、暫相待居候様被仰渡、無程公事方御部屋江御呼被成、先規之通御印紙新古并御高札御名書計御書改被成、御懸り役本多金右衛門様方御渡被成、則右御印紙、御高札之受取一札御取被成、首尾能相済候事、

奉差上一札

一、大津百艘江被下置候船御高札并御印紙頂戴仕、尚又是迄之御印紙共前々之通被下置難有奉存候、仍而一札奉差上候処、如件、

大津百艘年寄

文化三年

与次兵衛印

寅七月廿五日

孫右衛門印

御奉行様

已前者右御受書右之通相認差上、御聞済在之候義も在之候へ共、当时者御役所御帳面二被相認置候而、連々は迄之分二引続印形御取被



成候、勿論文言右二隼<sup>(準)</sup>候事、  
右為御札と東西御役所江差上候覺

東 森川越<sup>前守様</sup> 金貳百疋宛 目錄台  
西 牧野大和守様 下ケ札付

但麻上下二而上ル、  
東公事方 西公事方

上田弥右衛門様 深谷平左衛門様  
本多金右衛門様 不破伊左衛門様  
山田釵治郎様 入江吉兵衛様  
石嶋五三郎様 本多新左衛門様  
熊倉恵助様

右九軒金百疋

右之内御懸役 本田金右衛門様江別ニ金百疋  
右同断同心 中川李左衛門様江別ニ金百疋  
御書役 森孫六様江金百疋

ノ金四両

西御役所御届書之覺

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰ニ御建被下置候船御高札、御印紙、御書替被成下候様、先達而東御役所江奉願上候処、右御高札、御印紙頂戴仕、難有奉存候、乍恐此段奉御届申上候、以上、

大津百艘年寄

文三化三年

寅七月廿五日

御奉行様

与次兵衛印

孫右衛門印

右御届申上候処、深谷平左衛門様御廊下江御出、御高札御文言之訳、百艘天正年中より由緒御尋ニ付、具ニ御答申上候処、古き事共ニ在之候間、随分大切ニ相守候様御懇ニ被仰聞、難有引退候事、

但是迄公事方同心御出被成候へハ、宜規<sup>ジキ</sup>ニより銀壹両差上候事も有之候へ共、此度ハ右之振合故、別ニハ出し不申候、

一、右翌廿六日早束<sup>速</sup>当御役所江及御届ニ、場所江懸可申処、御高札場屋根余程苔付在之候ニ付掃除為致度、依之暫猶予いたし候事、

一、御高札場扣柱土際くさりニ付、此度ハ石ニ而扣柱為致候、石工石屋嘉七、手間九匁五分、はち巻鉄輪四つ為致候、かち屋神出西打、四五ノ四尺柱石貳本、代九匁貳分ニリ  
鉄輪<sup>テッ</sup>四つ代鏝共、壹貫五百文、◎相場九匁也、

蒲生郡浅小井村へ御配符相達し候様被仰候ニ付、飛脚和介遣ス、

但し賃銭八百文申遣ス、

七月廿七日

右御高札当廿五日頂戴仕罷歸り候ニ付、翌廿六日当所御役所江相届掛上ケ可申処、扣柱朽損有之、石二仕かへ候ニ付、右繕ひ中御届之儀見合罷有候処、今廿九日迄ニ出来仕候ニ付、則御届書之写左之通、尤別ニ普請届<sup>ハ</sup>いたし不申候事、

乍恐口上書

一、先達而御訴奉申上候船御高札、御印紙、京都東御役所ニ而頂戴仕罷歸り候ニ付、此段御届奉申上候、以上、

百艘舟年寄

文化三年

寅七月廿九日

治郎左衛門印

大津

御役所

右之通町方御役所へ御届奉申上候事、

当所御目附方

高橋角左衛門様

多賀喜曾太様

川嶋文左衛門様

〆右三軒へ銀壹両つゝ持参致、口上二而相届置、

橋本町年寄へ者口上届計、

同町小歩へ先格二而錢貳百文遣入、

京都八朔御礼

西御奉行

一、牧野大和守様

金子三百足

目録台  
下ケ札付

御用人

小熊三郎左衛門様

香西伴助様

酒巻吉右衛門様

神山善大夫様

右八軒へ銀壹両宛

西御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉恵助様

御取次

十九浦九十九様

嶋田武助様

岡野大助様

横溝市右衛門様

千賀与三右衛門様

上田八蔵様

菊地次左衛門様

柏原治部右衛門様

酒井宗助様

右五軒へ金百足つゝ

廣瀬佐野右衛門様  
眞壁郡右衛門様

右七軒へ銀壹両つゝ

東御奉行

一、森川越前守様

金子三百足

目録台  
下ケ札付

御用人

小柴宗右衛門様

村田直右衛門様

村田忠兵衛様

鈴木又兵衛様

右八軒へ銀壹両宛

東御公事方

上田弥右衛門様

本多金右衛門様

山田釵二郎様

石嶋五三郎様

右四軒へ金百足つゝ

東御下役

中川奎左衛門様

中川定右衛門様

吉竹勝左衛門様

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

東谷新左衛門様

森孫六様

右九軒へ銀壹両宛

上町代

田内与助殿 銀貳両

町代

藤沢傳六殿 貳百文

奥田九左衛門殿 銀壹両

東西御門番へ 三百文つゝ

東西中番中へ 三百文つゝ

藤村佐一殿 貳百文 宿鍵屋下女へ 貳百文

上町代中へ 五百文 山科大津屋孫兵衛へ百文

下町代中へ 五百文

鍵屋佐助へ 三百文

追分丸屋四郎兵衛へ百文

✂金三兩三步

銀貳兩 壺

銀壹兩 三拾三

錢五百文 貳

貳百文 三

右之通孫右衛門、新二郎相勤ル、供五兵衛、荷持和介

当所八朔御礼

石原庄三郎様 金子貳百足  
目録台下ケ札付

元✂

柴山泰蔵様

〃

七里左六郎様

町役

石丸三五右衛門様

勝手方

山田仲助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ金子百足つゝ、

小頭

舟方下

佐久間正蔵様

小頭目付兼帶

高橋角左衛門様

御目付

多賀喜曾太様

〃

川嶋文左衛門様

右四軒へ銀壹兩つゝ、

〃

遠藤重五郎殿

右五軒へ銀壹兩つゝ、

吉本弥四郎殿

山本兵五郎殿

右貳軒へ鳥目廿足つゝ、

右之外

御蔵番御門内御手代衆

白崎久太夫様

組屋敷不殘

平蔵町年寄

右者手札計二而相勤申候、

✂金壹兩三步

銀壹兩九つ

五百文壹つ

貳百文六つ

治郎左衛門、三郎兵衛、供孫七

右之外内堀繁多様御町掛り二候へ共、此節少々御吟味筋二付関東表へ御越被成候二付、表向御礼ハ相勤不申候へ共当時町掛り二候へ共、

北出雲平殿

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

〃

小野宗九郎殿

町代

堀猪三郎殿

御門吟助殿五百文

右御袋へ貳百文

御足輕 半七殿

御小使 梅八殿

同 藤七殿

右三人二鳥目貳百文つゝ、

元舟役御勤被成、御入魂之間から故、御窺として金百疋夜分治郎左衛門持参致し候事、尤七夕之節も右同様御伺として持参仕置候事、

針江幸左衛門殿へ遣し候書状之写、左之通

以手紙得貴意候、秋冷相増候処、弥御平安可被成御座奉賀候、然者兼而申入置候其御地祝儀舟一件之儀、船帳納メ御上津之節三ヶ浦立会可申談旨、当四月御面談之上示談致置候処、其后御伝言被仰越候ハ、右帳納メ之節ハ御登り難成、依之九月十四日二ハ旁御出津可被成旨致承知候、弥右之趣ニ御座候ヘハ、当九月十四日於堅田浦三ヶ浦共打揃待受罷有候間、無間違右日限堅田伊勢屋三右衛門方へ御出可被成候、兼而其積リニ致置可申候、委曲其節面上万々可申承候、右為念以書中如斯御座候、以上、

八月十九日

百艘年寄

問屋幸左衛門様

尚々此書状相届キ次第、いつれ貴答可被仰越候、間違為不申以前、右之段申入置候義ニ御座候ヘハ、くれぐれ早々貴答承度候、

一、針江右之返事状八月廿八七日到来ニ付、奥ニ留置候、

覚

一、船壹艘 但し矢橋迄

右者就御用明廿六日曉七時半時方出立、野洲郡迄罷越候条、書面之船右刻限無遅滞御役宅門前へ差向ケ可被申候、尤矢橋方草津迄人足三人繼立候様、今日中ニ無間違申遣置可給候、以上、

八月廿五日辰刻中

石丸三五右衛門

右之申参候ニ付、即刻矢橋へ書状相認メ遣候、則三郎兵衛殿東番ニ付持参被致、舟も右同人申付られ候様頼遣候事、

去ル十九日御認御貴翰早速慥ニ相達、忝拝見仕候、如貴命追日秋冷相催候ヘ共、各様被遊御揃、弥以御勇健被成御入候之段、珍重御儀奉存候、然者兼々仰被聞候祝儀舟之儀ニ付、先達而出津之節御見廻仕段々御熟談も申上候得共、何分御地浦各々様方計思召ニ而も即答も難被仰沢合ニ付、其後六月舟銀納之節、無余儀不参御断別段申上候之処、其旨御承知被遊下、依之当九月十四日堅田浦二而御立会之折節、御同意参上可致様、兼而承知仕候所、此度為念と御座候而御しらせ被遊下候段、大キ御世話様之段忝奉存候、何様此義者いつれ善惡共承引候上、尚亦御願も申上度筋御座候ヘ共、弥如仰九月十四日二片田伊せ屋三右衛門殿方迄無間違可参候間、其砌委細可承候間、左様思召可被下候、右者此度之御報申上度迄、愚筆如此候、折節取紛自然鹿書御用免被下度、余者拜面之節と申残候、恐惶不備、

八月廿三日

幸左衛門

針江浦

大津百艘

御仲間様

右之通針江右之返事参候処、幸ひ八幡舟参り合有之故、左之通八まんへ以手紙申遣置候、

尚々此書状着仕候ハ、為念早速御返書可被下候、以上、

以手紙得御意候、秋冷之砌弥御揃御堅栄可被成御座奉賀候、然者兼而御噂申上候針江浦祝儀船之儀ニ付、来月十四日二者幸左衛門殿堅田へ被参候筈ニ御座候間、各様二も乍御苦勞右日限無間違片田へ御出可被下候、先者此段御案内申入置度、如此ニ御座候、万事ハ其節貴面ニ可申述候、不具、

八月廿八日

百艘年寄

八まん浦舟年寄中様

右書状八まん舟太郎兵衛江八月廿七日八ツ半時渡ス、使和介

九月四日

一、松茸 貳拾本

石山村庄屋ろ

右例年之通到来致候事、

則役人中配り申候、但し貳本宛也、

一、針江浦祝義舟之義二付、前文之書面八幡江遣し候所承知之由、同浦より返書到来二付、尚又片田浦江、左之通書状出ス、

尚々いせ三殿方江も其段御達し置可被下候、已上、

態以手紙致啓上候、秋冷弥増候所、各々様弥御堅栄可被成御座奉賀候、誠二江頭付替も近々二相成り、其節ハ御苦勞ニ奉存候、然ル所兼而為申合罷在候針江浦祝義舟之義二付、来ル十四日二ハ右浦幸左衛門殿、八幡年寄中義も御地江罷越被申候筈ニ御座候間、各々様ニも御他出不被成、御待受被下候様仕度候、委細之義ハ其節罷越可申上候へ共、右御案内申入置度、如此御座候、不具、

九月五日

百艘年寄

堅田浦

舟年寄中様

前二留有之候はり江浦江かけ合一件之義ハ、九月十四日堅田いせ屋三右衛門宅ニおいて三ヶ浦立会、はり江幸右衛門江引合相済候事、但し委細之義ハ三ヶ浦廻船対談帳ニ留置候二付、爰ニ略ス、

追而本文運上銀大津橋本町古望仁兵衛方ニ而掛改候間、得其意納人印形持参可致候、以上、

湖上船運上銀、来月十三日ハ十七日迄二持参上納可致候、遲滞致間敷候、此配賦令請印早々順達、留り所ハ可相返候、以上、

大津

寅九月十八日

御役所御印

大津浦始

川道終

右浦々

庄屋

船年寄

右者十九日午刻、坂本四ツや源七船へ相渡ス、

同御文言老通

松本浦始

伊庭終

右ハ十八日未下刻、松本村へ和助為持遣ス、

口演

一、船御運上銀、来月十三日ハ十七日迄二無遲滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所ハ御返し可被成候、以上、

寅九月十八日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、五郎八、

善兵衛、源六

一、九月廿一日、如例貴布祢御神酒朝飯有之、役人不残相祝イ候事、外二隠居今七相招候、

覚

一、船老艘 矢橋迄

右者就御用、明廿三日曉七つ時出立、江州村々へ罷越候条、書面之



船右刻限無相違相廻し可被申候、尤矢橋浦の草津宿迄人足七人繼立候様、今日中申遣し置、刻限無差支様取計可給候、以上、

寅九月廿二日午ノ刻

藤沢永四郎

森嶋與惣次

篠田牧太郎

石丸三五右衛門

百艘当番中

右之通申参候二付、即刻矢橋浦へ書状相認め遣候、廻り平兵衛へ為持遣し申候事、

芦浦松岡市左衛門様へ来翰之写

以手紙致啓達候、寒冷相催候、各御中愈御堅勝二可被成御渡、珍重之御義二御座候、然者此方用向二付、毎度中間共并村方人足荷物等為持乗船之刻ハ預御世話、其上幸二矢橋を罷越候帰船有之候刻者、御差図被下乗船甚便利二相成候段者、全御取計故之義忝奉存候、猶又此上共前々之通不相変乗船之儀御心添御頼申入候、

一、其御浦の矢橋へ渡船歸り之刻、此方用向二而罷越候中間人足共乗船致度段、会所へ相断前々の御方へ御取計之通二渡海致来り申候処、近頃彼是と申義有之候二付、此間芝田清蔵へ懸合申候処、前々之通大津船帰船有之候刻ハ、乗船之義承知之旨二御座候、此上其御浦方二矢橋へ歸り船有之候刻者上船為致度候、此段御入魂申入候、右之段為可得御意、如斯御一統へ宜御哈御通達可被下候、以上、

観音寺内

九月廿二日

松岡市左衛門

大津浦百艘

年寄御中

追而申入候、本文之内二差支筋之儀有之候、可被仰聞候、右御返答承り度候、御承知二有之候ハ、其旨芝田清蔵へも申入度候、右可被仰下候、以上、

右書状持参、使之衆直二返事承り歸り度由被申候へ共、折節詰合衆も無之候、右使之衆心ぜぎ之由被申候故、日々便りも有之儀二御座候へハ、跡の御返書差上可申様可被仰下旨申返し候、跡の返書左之通、尊札忝拜見仕候、寒冷二御座候へ共、益御安全被遊御座目出度御儀奉存候、然者御中間衆并村方人足御用向二而、当浦の御乗船之節幸二矢橋へ歸り候舟有之刻者、御便船被成候処、近頃御不利二相成候付、矢橋清蔵へ御掛合被遊候処、矢橋方二ハ前々之通心得居候間、私共儀も同様取計仕候様、尤御差支之筋も候ハ、可申上様と被仰下、恐入罷有候、此義大津、矢橋、松本三ヶ所船共、右為乗戻り者仕間敷旨、先年当表御役所二而被仰渡候付、都而乗せ戻りハ不相成事二候へ共、其後も御家様之義者格別二取計仕候処、近頃二而ハ猥り二往還之旅人迄も類し混雜仕候二付、猶又当夏取締方申渡置候義二御座候、併此後之儀も御家様御用向者無御差支様仕度奉存候、何れ矢橋浦へ面会仕度、外用も御座候二付、近内両浦申談候上、**右**可申上様可仕候間、夫迄御用之分者御人別二御鑑札御持参二而会所詰番へ御達し被成候ハ、無御滞様申付置候間、其段人足衆へ睨と御申渡置被成下候様仕度奉存候、先者此段貴答申上置度、如斯御座候、恐惶謹言、

九月廿三日

百艘年寄

松岡市左衛門様

此書状廿六日夕方、下物半七へ遣入、

一、先触宅通、柴山泰蔵様、岡田大八様、御用長持宅棹、此人足四人、乗物宅挺、人足四人、加籠宅挺、人足三人、分持四荷、人足四人、

竹馬壹ヶ、人足壹人、合拾六人、

右者当作毛検見、御代官明廿六日未明大津出立、左之通被罷越候条、得其意於宿々書面之人足無遲滞差出し継立可被申候、且渡船、川越等之場所者、前宿方及通達、無差障様可取計候、尤村々送り向イ之儀者例年之通申合、無間違様取計可被申候、此先触早々順達、於泊り村二可被相返候、以上、

寅九月廿五日

石原庄三郎手代

岡田大八

柴山泰蔵

大津宿始北野村迄

右宿村々問屋、庄屋中

追而上下人数十一人之積り可被相心得候、以上、  
先触中嶋剛之助様

一、乗駕籠壹丁

右者我等儀明廿六日アカツキ 曉八ツ時大津御役所出立、左之通罷越候条、

書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遲滞可被差出候、且渡船川越等之場所者前宿方及通達、差障り無之様可被取計候、此先触早々順達、於押越村我等着之上可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

寅九月廿六日(五カ) 中島剛之助

大津宿始

押越迄

右宿村々問屋、庄屋中

右先触式通共、小船入会所へ新蔵持参、但し廿五日午刻過、

一、十月朔日、從御役所赤之浦江御書付(并脱カ) 通御渡なされ候二付、此方方

書状付船便り二遣ス、同日夕かた太右衛門舟清七江渡、

一、御目附役之内高橋角左衛門様盜賊懸り之義二付、当九月七日江戸江付添御下り被成候、依之留主中為御見舞白銀一両、十月三日御宅江与次兵衛罷越申候、当月中頃二ハ御帰可被成哉之旨、御内室御咄し被成候事、

矢橋浦船年寄方来状之写

以手紙得貴意候、寒冷之節弥御堅勝可被成御勤役奉珍重存候、然者天文測量方御用 御役人中様御順村二付、一昨夜彦根領惣代中より膳所領惣代江、刻付二而書状到来、左之通二御座候、

十七日彦根御泊、十八日仁保御泊、十九日草津御泊、但守山領此義相知レ不申候、

右之通被申越候、依之今晚仁保御旅宿迄膳所領惣代罷出候様、内々被仰付候二付、今晚七ツ時出立二而、当浦茂平次殿仁保御泊迄被参候、尚又彦根領惣代中の方申来候儀者、品二寄矢橋方大津浦へ御乗船被遊候御様子も内々承り、此儀も相知不申候得共、為御心得之申遣し候与被申越候、尚追々様子相分り候ハ、早々御案内可申上候、右得貴意、如斯二御座候、以上、

矢橋浦

十月十八日辰刻

船年寄

百艘御年寄中様

右之通到来二付、返状左之通、

貴翰忝拜見仕候、弥御平安被成御勤役奉賀候、然者測量御役人中様方御登り、明十九日草津歟守山御泊二而、品二寄貴浦方当浦へ御乗船之程も難計旨被仰下、拙者共義ハ何之心得も無之処、右為御知被

下忝奉存候、尤今晚仁保御旅宿迄茂平二様御出被成御座候由、御苦  
勞之御儀二御座候、弥御乗船二而当浦へ御越被遊候義二候ハ、御  
着船場所へ御出迎二罷出、御待受居申度候間、乍御面倒尚又早速御  
案内被下候様、偏奉頼候、右御報旁御頼申上置度、早々、以上、

十月十八日午下刻

百艘舟年寄

矢橋浦

舟年寄中様

同十九日卯上刻矢橋浦方再音、左之通、

今日辰刻書状差上申候処、則御返書午ノ下刻至慥二落手仕候、然者  
今十八日未下刻出、守山宿問屋方書状到来仕御座候<sup>処</sup>、矢橋浦役人  
今晚泊り江頭村迄罷出候様被仰付候間、此状参着次第早々御出務可  
被下候、呉々無相違今晚中江頭村御旅宿迄御出勤有之候様与十八日  
未下刻出、則当浦へ西下刻到来、依之同役治右衛門并村方役人兩人  
右江頭村へ遣し申候、然ル所惣代茂平次方申刻出書状到来、測量方  
御公役様方弥明十九日、從矢橋大津浦へ御乗船手当可致旨、今申ノ  
刻被仰出候、則御召船式艘被仰付候、

伊能勘解由様外式人様、御三人先へ御越被成候、則草津中食二而御  
座候、高橋様外式人様跡方御越被成候、伊能様御召船式艘、御供船  
式艘、是ハ早朝方仕立候様申来候、高橋様者少々御延引二相成候趣、  
当浦方出帆八つ時分二申来り候、右之通御承知可被下候、尤着船場  
所嶋ノ関江向ケ御着船積り二御座候、此儀も御差支も有之候ハ、  
此者へ御報可被下候、右御案内申上度、甚取込乱筆御免奉希候、早々、  
以上、

十月十八日丑上刻

矢橋浦  
舟年寄

百艘

御年寄中様

以手紙得貴意候、弥御安康之由奉賀候、然者先刻御達申上候通り、  
天文方御奉行様御通行二付、渡船払底二御座候故、貴浦之船御借り  
申渡船為致候間、何卒此段御頼申上候、猶今日之処宜敷御断申上候、  
右御断申上度、如斯二御座候、以上、

十月十九日

矢橋浦  
詰兩人

小船入詰御役人中様

追而申上候、右御奉行様今五つ時笠川村迄御出被遊候由、案内御  
座候間、鳥渡御知らせ申上候、以上、

昨日者預貴札則御報申上候処、猶又今日御使札被下、忝拝見仕候処、  
測量御役人中様御義、今日草津御中飯二而貴浦方御乗船被遊、嶋ノ  
関へ御着舟之段被仰下承知仕候、差懸り候御用向二付、嚙々御混雜  
奉察候、乍此上当浦二抱り候御用向候ハ、早速御知らせ可被下候、  
奉頼上候、右御頼旁御報如此二御座候、以上、

十月十九日辰上刻

百艘年寄

矢橋浦

舟年寄中様

一、右矢橋方参候書面二、矢橋浦役人今晚御泊り江頭村迄罷出候様被  
仰付候二付、同役次右衛門并村方役人江頭村迄遣し候と相認有之故、  
若哉渡船方二かゝわり候御用筋御尋にも難計存候二付、右御伺并矢  
橋へ挨拶旁肝煎勘三郎儀、同日辰上刻方小船二而矢橋迄参候処、着  
船之上番所へ参り前文之趣致挨拶、其上二而矢橋役人御泊りへ被  
参候、御用向如何之筋合、此方心得二も相成候義も有之哉之心得二  
而相尋候処、江戸御役人中方呼二参候義二而も無之、御地頭方御泊  
り迄罷出候様被仰付、夫故下地分間掛り片岡村役人壱人、矢橋浦茂

平二兩人御泊り迄被參、膳所御領分之間始終付添被居候、矢橋矢橋船年寄兩人ハ矢橋之入口ニ而御出迎被申上、此度ハ船方浦方之御尋無之、唐人街道被成御打、仁保御泊ニ而矢橋江屋時御着之上、矢橋茂平二取次ニ而百艘年寄御伺ニ被罷出候様被申上候故、肝煎勘三郎罷出候処、御上役勘解由様御逢之上、先達而登り候節彼是世話ニ相成、此度も入念之義と御挨拶有之候、大津へ引取候へハ、幸ひ之事故荷物受取歸り、坂部定平と申者へ相渡し、天文方道具拵らへ置候様、則勘解由様を御状入之小風呂敷包御渡し有之、右之荷物江同船いたし先キへ歸り候積り之所、矢橋出船御役人中和同時ニ相成り、大津着ハ御役人中之船三丁計さきへ着いたし、直様八町御旅宿江被成御着候、夫故跡ハ右御宿江小風呂敷包致持參候所、勘解由様又々御逢之上御挨拶有之相済候、

一、高橋善助様御同役式人七つ時御着之處、西風強候故石場へ御上り被成候ニ付、太郎兵衛、孫右衛門御挨拶申上ル、同夜御旅宿へ孫右衛門、六兵衛御挨拶參り、船御用之儀も御座候ハ、可被仰付旨申上候所、所ニ寄リ頼申し度由被仰候故、右之趣人馬会所へ申置、弥御乗船ニ相成候ハ、前広ニ御知せ被下候様頼歸り申候、廿日九つ時、右会所へ呼ニ參り孫右衛門參候所、弥御乗船之様子ニ候間、直二伺候様被申候故、御旅宿へ參り御伺申上候処、坂部様被仰候ニハ、毎々乍御世話曉七つ半時出立之積りニ候、右ニ付勢田橋本迄乗船いたし度、乗人十三人、外ニ打上<sup>テ</sup>下<sup>リ</sup>、荷物少々有之候間、式艘用意いたし、扇屋関ハ乗船可致候間、其積り致置被呉候様被仰候ニ付、当御役所船方御掛り牧野様迄右之趣申上置、曉七つ時用意相調待居候処、俄ニ止メ相成候様子粗受給、早速御尋旁々孫右衛門參候処、最早会所前迄御出被成、御目ニ掛り御挨拶申上候、伊能様被仰候二者、今朝ハ余り寒サ故陸ニいたし、毎度大意ニ世話之段、厚御丁寧ニ御挨拶

有之罷歸り候事、

右一件ニ付、嶋ノ関新兵衛方ニ而何角世話いたし候故、酒三升切手遣入、外ニそうし小遣雇人、押手善太へ式百文遣入、右之通無滞相済候事、

十月廿一日、如例年日和定、夕飯有之候事、

一、当月四日、矢橋渡舟のせ方之義ニ付、与次兵衛、太郎兵衛兩人、矢橋江罷越、前書ニ在之候芦浦中間人足之義及引合候者、是迄矢橋并大津戻り舟ニのせ遣候処、右双方共戻り舟ニのせ候義不相成事故、於矢橋浜ニ其段芦浦江断被申達候処、頃日松岡市左衛門殿、芝田清藏方江被立寄、是迄通り差急キ候節、戻舟ニ乗歸呉候様、無左候而ハ甚差支候旨、段々被相頼候、則芝田氏被承置、夫ハ松岡氏者京都へ被登、歸り掛ニ又被立寄候、矢橋年寄中ハ被及返答候者、此義ハ大津江御頼可被成候、大津ニ承知被致候ハ、矢橋之義ハ如何とも可致段、依之頃日左之書面大津へ芦浦ハ被差遣候義と被存候旨、矢橋ニ而被申咄候、依之与次兵衛、太郎兵衛申候者、右之趣ニ候ハ、芦浦之義ハ前々由緒も在之、格別之事ニ候間、是迄之通戻り舟ニ双方共のせ遣し可申候、乍併前段之通全躰不相成場所之事ニ候へハ、此上自然差支等之義も有之候ハ、其節ハ御断可申達、平生浜役之者随分氣を付滞無之様取計致進可申候、此段御承知可被下旨、矢橋ハ松岡氏江可被及返答段申談置候付、大津ハ別段松岡氏江返事ハ遣し不申候事、

一、十月十五日、矢橋舟年寄利兵衛、治右衛門、御運上銀納ニ被登候序、当会所へ被立寄前段芦浦人足之義、身分舟賃ハ是迄被相払、尚又此

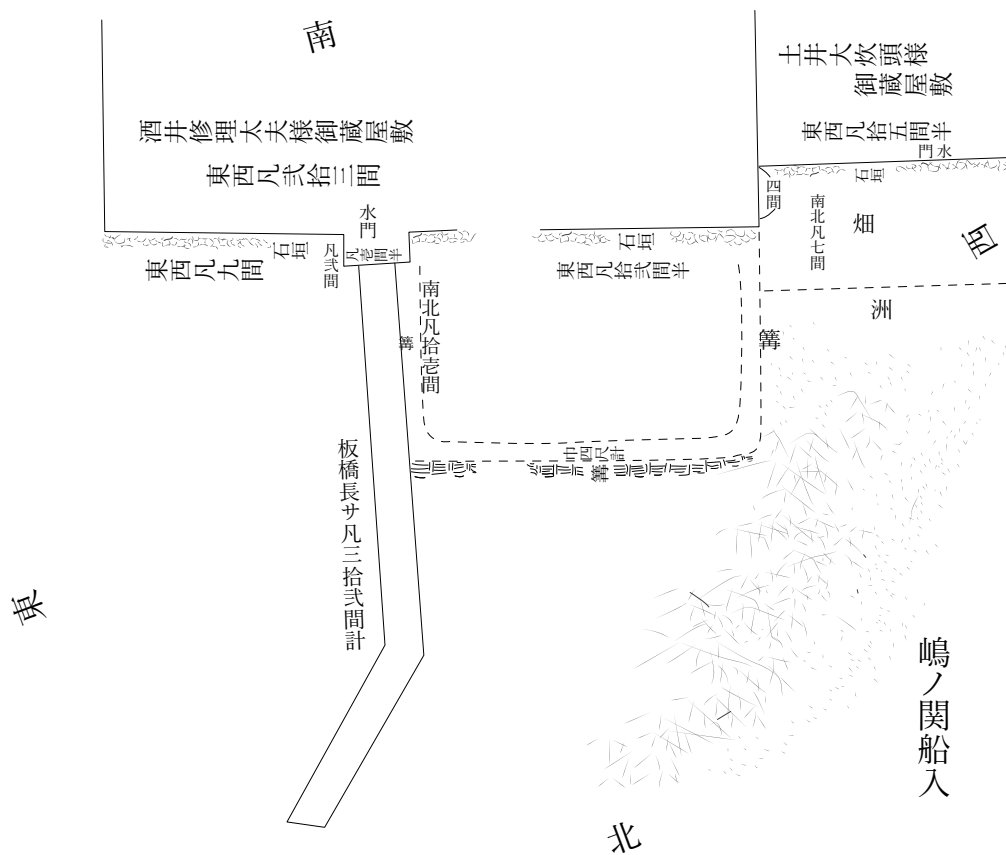


已後共随分舟賃ハ差出可申旨松岡氏方も被申達候へ共、已来ハ舟賃番所ニ而受取候而ハ如何ニ付、若被相払候共舟ニ而船頭酒手ニ可被遣様答候旨、被申置候事、

一、西御公事方入江吉兵衛様隠居石亭、当十月十八日死去、同廿一日晩葬式在之候、依之廿五日為御悔孫九郎上京致、香典金百足遣し候、

平蔵町若狭蔵裏石垣際ニ築地被致候様子見請候ニ付、仲間及相談候処、差而當時之差構ニ相成候儀者無之、勿論蔵屋敷之事ニ候へハ、差障申立及掛合候共容易ニ相止メ被申間敷、然ル時者品合悪敷相成可申、乍併其俣差置、却而後日御役所方御察当請候而ハ如何ニ候間口上ニ而一通り申上置候而可然との評儀ニ付、則十一月九日年寄次郎左衛門義、塩津、月出出入之義ニ付罷出候序ニ、舟方掛り牧野九郎兵衛様へ申上候ハ、若狭蔵裏石垣際湖中ニ築地被致候様子ニ見請申候、尤當時私共差構ニ相成候儀も無之候得共、前々方津内浜がわ并堀々新規之儀不仕筈ニ付、自然新規目論見被致度候得ハ、何れも御役所へ相願、猶又私共方へも差障り之有無御尋被成下候儀ニ御座候処、右若狭蔵方ハ私共へ右不被申聞、御役所方も何之御沙汰も無之候ニ付、御窺御届ケ旁此段申上候、尤町方御役所へハ別段不申上候間、宜敷御評儀被成下候様と申上候処、委細承置候、猶有増絵図相認メ、持参可致様被仰聞候ニ付、左之通絵図相認メ、同十三日太郎兵衛持参致し、牧野九郎兵衛様へ差上候処、尚評儀可致と被仰聞候事、

絵図左二記、





十一月十五日

一、米壹表

右ハ例之通石山寺ノ到来候ニ付、高嘉ヘ売払申候事、此代金一分とせに四百十文受取、

覚

一、御納豆 五拾把

右は御旧例之通御前より不相替被下置、難有頂戴仕候、以上、

寅十二月四日

百艘印

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子 百疋

右は当津より御家中様并御人足渡海為御挨拶、御前より被下置、慥ニ頂戴仕候、以上、

寅十二月四日

百艘印

松岡市左衛門様

覚

一、銀三百目也

右は此度当村浜ニ新船入拵候ニ付、御助力御頼申上候処、書面之銀高御手伝被成下、忝慥ニ請取申候処、実正也、此後追々致手入舟囲方無差支様取計可申候、以上、

文化三年寅

滋賀郡真野濱村

八幡屋善助印

十二月三日

百艘

御中間衆中

一、諸白三桧

生鯛壹尾

かき小籠五

✂

返礼として持参有之、受納いたし置候、

右は先達而講会目論見被申加入致呉候様頼被参候へ共、近来今堅田村、小野村等も同様之義被頼参候処、入講之儀は断申、尤今堅田へは枕掛銀何程遣之、小野村之儀は普請成就致候ハ、聊之出銀可致遣旨ニ取計置候事ニ付、右真野村へも同様懸ケ合置候処、舟入出来候旨を以又々被頼参候ニ付、中間相談之上銀三百目遣候ニ付、前書之通受取書取置申候事、

十一月七日、当御役所寒氣御窺

一、石原庄三郎様

鴨壹掛

二重くり台、下ケ札

御町役

石丸三五右衛門様

御目附小頭兼帶

高橋角左衛門様

元✂

柴山泰蔵様

御目附

多賀喜曾太様

〃

七里左六郎様

〃

川嶋文左衛門様

〃

内堀繁太様

小頭

佐久間正蔵様

柳屋九右衛門印  
庄屋伊左衛門印

御勝手方

右四軒へ銀壹両

山田仲助様

舟方助

牧野九郎兵衛様

右六軒へ貳朱壹片宛

右之外御門内御手代衆、組屋敷不残、北出雲平殿、此分手札計  
手札数凡廿枚計、治郎左衛門、新治郎、供与八

十二月七日、京都寒氣御伺

東御奉行

一、森川越前守様

真鴨壹掛

御用人

御取次

小柴宗右衛門様

柴田栄蔵様

村田直右衛門様

伊藤右内様

御勝手方

松野小右衛門様

村田忠兵衛様

鈴木七蔵様

同

串原三郎兵衛様

西村昌助様

右手札計

東御公事方

御公事下

上田弥右衛門様

中川左左衛門様

本多金右衛門様

中川定右衛門様

山田釵次郎様

櫛橋平蔵様

石嶋五三郎様

喜多尾八郎右衛門様

右四軒へ南鐐壹片つゝ

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

(西御奉行脱力)

一、牧野大和守様

真鴨壹掛

御用人

御取次

小熊三郎左衛門様

嶋田武助様

香西伴助様

岡野大助様

神山善太夫様

横溝市右衛門様

中村重右衛門様

御勝手御用人

十九浦九十九様

右手札計

御公事方

御公事下

深谷平左衛門様

千賀与三右衛門様

不破伊左衛門様

上田八蔵様

入江吉兵衛様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

酒井宗助様

熊倉恵助様

廣瀬佐野右衛門様

右五軒へ南鐐壹片つゝ

真壁郡右衛門様

山田傳左衛門様

右手札計

町代田内与助殿、銀三匁

若狭屋八兵衛殿、ひとり一羽

右之通孫右衛門、六兵衛相勤ル、荷持大津町組加子伊八

覚

八幡貸舟屋利左衛門方かり舟

百艘下知内

一、丸舟三拾五石積壹艘

甚兵衛

但帆柱壹本、梶壹枚、艫式挺、錠壹挺、板味四

ノ右五品入有之

右之船当月十三日夕方小舟入二繋置候処、翌朝相見得不申、尤其夜西南風強吹候故流出候哉と存、早速松本辺方山田浦迄穿鑿二参り候処相知し不申故、今十五日当浦中始西側堅田浦迄、夫方木濱へ渡り山田浦迄、残りなく相尋候へ共相知し不申候、此儀相對なし二乗参候もの哉、又ハ流出仕候儀哉相知し不申旨、十五日夕五つ時上下惣代徳藏、甚兵衛申出候付、翌十六日年寄太郎兵衛御役所へ罷出、御懸り牧野九郎兵衛様へ其段申上、御廻状御差出被成下度奉願上置候処、左之通、

覚

百艘下知内

一、丸船三拾五石積

甚兵衛持

但船道具共

但八幡貸船屋利左衛門方借り船

右之船小船入浜先二繋置候処流失候哉、当月十三日夜方不相見候二付、段々相尋候へ共不見当由二而、浦々吟味之儀願出候間、浦限相糺右船有之候ハ、百艘へ及通達二可相渡候、此配符浦名下令請印早々順達、留所方可相返候、以上、

大津

寅十二月十六日

御役所御印

大津始

長沢迄

右浦々庄屋

舟年寄

坂本四つ家繁八へ渡、

松本始

伊庭迄

右浦々庄屋

船年寄

右之通り新八持せ遣ス、

(横書)「右流失舟御廻状御差出被下候処、堅田浮御堂式町目平兵衛と申仁方二ひろい置候旨申参候付、十二月廿日下組の<sup>者共へ</sup>加子貫二参候様申付、尤右平兵衛方へ迄通、舟年中宛二而迄通、当中間方書状相添遣候処、道具等も揃有、引取歸り候付、翌廿一日次郎左衛門御役所へ御届二罷出、御懸り牧野様へハ銘酒三升の切手致持参御礼申上候、尤此分計ハ中間方贈遣置、此外諸入用并堅田浦への挨拶等二至迄不残下組二而贈候様申付、中間方者手伝遣不申候事、」

覚

一、南鐐壹片

右者例年之通御持せ被下、慥二請取申候、以上、

寅十二月十九日

百艘年寄印

上田弥右衛門様御内

西村多右衛門様

右之通請取相認メ遣ス、

覺

一、金子百疋

右者朽木兵庫助様方例之通被下置、慥受取申候、以上、

文化三年

百艘年寄

寅十二月

御用達

升屋市左衛門殿

此帳面之内、四月末二留有之候当所御手代内堀繁太様、三好仁十郎様、御組同心佐久間官吉様、右三人共いまた御落着之上二而者無之旨二候得共、一先ッ帰津被仰付候趣二付、十二月廿五日御帰宅被成候付、与次兵衛、太郎兵衛、鳥居川迄御出迎申候处、厚く満足二思召御盃有之、御帰宅直二太郎兵衛儀御三軒江御悦申上置候、猶又翌朝次郎左衛門義も御悦二参置、

一、金五百疋 内堀御氏へ

一、同百疋ッ、 三よし御氏

佐久間御氏江

右之通孫右衛門持参、御悦申上置候处、其後御三人様共為御挨拶、年寄共宅へ御出有之候事、

目錄

- 一、上組四郎兵衛舟二乗合せ候女矢橋浦二而行たふれ候事、
- 一、嶋之関二品々捨物有之候事、
- 一、小笠原近所出火之節舟廻し候儀二付三郎兵衛る被頼出候事、
- 一、内堀繁多様舟役御退役、跡役牧野様御勤被成候事、

- 一、真野浜ニ新船入之事、
- 二、下組甚兵衛小舟流失御廻状、

(裏表紙)

「八拾一 百艘」



### 三、「万留帳」文化四年（二八〇七）

（表紙）

丁 文化四年

万留帳

卯 正月吉日

（貼紙）  
「八拾貳」

（表紙見返し）

#### 目録

- 一、鍵屋利助が関津舟へ糖百俵隠積之事、
- 一、尾花川、観音寺町大火之事、
- 一、八幡鉄屋卯兵衛行之鉄度々欠有之趣申立候事、
- 一、赤ノ井太右衛門へ之書状之写、
- 一、地舟ノ戻り四艘大風ニ而致難儀別而治郎左衛門舟、忠次郎舟山田浦  
ニ御世話ニ相成候事、
- 一、三井寺観世音開帳之事、
- 一、分銅改之事、
- 一、獅子飛為下見と御組様御下り被成候事、
- 一、内堀様、三好様、佐久間様從江戸御召ニ付御下り被成事、
- 一、弓弦半六唐崎浜辺ニ灯籠建度趣ニ而助力相頼候事、
- 一、石場が渡船之旅人入水致候へ共早束引揚連歸り候事、  
（連）
- 一、新在家村油屋長兵衛が菜種舟積之事、
- 一、牧野様が矢橋渡船ニ入水人度々有之趣相聞へ候ニ付被仰渡候事、
- 一、大津町上番舟ニ金子取落し有之事、

一、新濱ノ草刈ノ者膳所沖ニ而入水候事、  
此次之目録ハ奥ニ有之、  
（本文）

文化四丁卯年

正月四日、当所御礼

石原庄三郎様

金貳百足

目録台  
下ケ札付

元々

石丸佐五右衛門様

〃

柴山泰蔵様

〃

七里左六郎様

御勝手方

山田仲助様

元々

内堀繁太様

船方

牧野九郎兵衛様

右六軒金百足宛

御目付小頭兼帶

高橋角左衛門様

御目付

川嶋文左衛門様

右銀貳両つゝ

舟方下

北出雲平殿

銀一両

御目付

多賀喜曾太様

小かしら

佐久間正蔵様

惣年寄

町代

矢嶋藤五郎殿

堀猪三郎殿

〃

〃

小野宗九郎殿

遠藤重五郎殿

〆銀一両つゝ

宿場肝煎

〃

吉本弥四郎殿

山本兵五郎殿

鳥目廿疋

御門番吟助殿五百文

御袋江式百文

御足輕半七殿

小遣藤七殿

〆式百文つゝ

但小遣梅八殿ハ押詰御暇出候付不遣、

白崎久太夫様 御蔵番三人

組屋敷不殘、門内御手代衆

平蔵町年寄

右ハ手札計

与次兵衛、三郎兵衛 供廻りとハ

右之通例年二日ニ御礼相勤候所、当年ハ一ツ橋第八男御逝去ニ付、

大晦日ハ二日迄鳴物御停止、普請ハ不苦旨御触在之、依之町内諸礼

も相慎ミ、京都御役所も三日之处四日ニ相務メ候様相成候、

正月四日、初寄合(領脱力)見せ、諸帳面勘定仕立、中飯在之候、

正月十一日、如例年帳固メ祝儀として役人不殘出勤、但勘三郎、庄兵衛不參、

鰻頭百

上組惣代 治兵衛 徳蔵

諸白式升

下組 甚兵衛 平六

諸白式升

坂本新兵衛

諸白式升

尾花川

酒式升

関舟治兵衛

するめ二把

惣代助右衛門 弥兵衛

右之通致持参、年礼相済、いつれも於勝手ニ酒為祝候事、関舟治兵衛、坂本新兵衛ハ取持致候事、酒飯致させ申候、

正月四日、京都御礼

東御奉行

森川越前守様

金子三百疋

目録台 下ケ札

御用人

小柴宗右衛門様

御取次

柴田栄蔵様

村田直右衛門様

伊藤右内様

御勝手方

松野小右衛門様

同忠兵衛様

鈴木七蔵様

西邑昌助様

串原三郎兵衛様

右九軒へ白銀壹両つゝ

西御奉行

牧野大和守様

金子三百疋、右同断

御用人

御取次

小熊三郎兵衛様

嶋田武助様

香西伴助様

岡野大助様

神山善太夫様

横溝市右衛門様

中邑重右衛門様

御勝手方

十九浦九十九様

右八軒へ白銀壹両つゝ

東御公事方

同下

上田弥右衛門様

中川奎左衛門様

本多金右衛門様

同定右衛門様

山田釵次郎様

櫛橋平藏様

石嶋五三郎様

喜多尾八郎右衛門様

右四軒へ金百疋つゝ

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

下九軒へ

森孫六様

白銀壹両宛

吉竹勝左衛門様

西御公事方

同下

深谷平左衛門様

千賀与三右衛門様

不破伊左衛門様

上田八藏様

入江吉兵衛様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

酒井惣助様

熊倉恵助様

廣瀬佐野右衛門様

右五軒へ金百疋宛

真野郡右衛門様

山田傳左衛門様

右七軒へ白銀壹両つゝ

上町代

田内与助殿へ

銀貳両

奥田九右衛門殿へ銀壹両

下町代

藤澤傳六殿へ

貳百文

東西御門番へ三百文宛

藤邑佐一殿へ

貳百文

宿鍵屋下女へ貳百文

上町代中へ

五百文

山科大つ屋孫兵衛へ百文

下町代中へ

五百文

小番へ三百文

宿鍵屋佐助

三百文

追分丸屋四郎兵衛

百文

東西中番中へ

三百文つゝ

×金三両三步

銀壹両 廿四

銀貳両壹つ

五百文 貳つ

三百文

五<sup>六</sup>

貳百文

三

百文 貳

右之通孫右衛門、忠兵衛相勤申候、供五兵衛、荷物<sup>中</sup>和介

正月十五日、芦浦御礼

一、観音寺様

扇子三本入<sup>中</sup>壱箱

但しくり足台

右当年は御逢有之、恐悦仕候、御酒并御節共例年之通被下置候事、

御家中 西川五郎兵衛様、下物久松清右衛門様

片岡喜右衛門様

右三軒へ扇子三本入<sup>中</sup>壱箱つゝ

右之通六兵衛、新二郎相勤ル、供与八

正月廿一日、如例貴布祢御神酒頂戴致候事、

但し勘三郎、市兵衛、庄兵衛×三人不参、外二今七も、

坂本町組八郎兵衛、去寅正月<sup>中</sup>見習二被出候所、当神酒より本役二

相成被申候事、

但去寅正月盃相済有之故、此度者不及其儀候事、

正月廿八日

御老中

安藤対馬守様御登り二付、石場迄御出迎、

太郎兵衛、六兵衛、供

同晦日

御所司代

阿部播磨守様御登り二付、石場迄御出迎

太郎兵衛、三郎兵衛、供和介

翌朝八町迄御見送り、孫右衛門、八郎兵衛、供和介

朔日

一、右御所司代

八丁御見送り、孫右衛門、八郎兵衛、供和介

二月四日七つ時、御蔵町鍵屋利助方ノ津舟ニ糠百俵計積歸り申候趣、関屋治兵衛五日夕方孫右衛門方へ申参り、何卒御仲間ノ御吟味被下候様頼候故、即刻相談之上鍵利下代呼二遣し相糺し候処、糠七拾俵同村弥右衛門ト申者へ地はなしニ壳渡シ申候、右弥右衛門ノ治兵衛方江者被届ケ候与相心得候趣之返答二付、何方へも届ケ無之、拔積ニ相成済不申、其元ノ船頭呼二被遣候哉、但シ此方ノ呼二遣し候哉、此方ノ呼寄吟味致候節は、村役人、荷主共呼寄候、左様ニ相成候而は甚以六ツケ敷候義与申聞候処、私方も行届キ不申、不調法之事故二付、私方ノ急々呼二遣し可申候間、明日迄御待被下候様被頼、然ル処六日夕方加子兩人召連歸り候趣被届ケ、則七日朝宿治兵衛、加子兩人召連会所へ参候故、致吟味候処、加子申候二者、荷主

より被届候与存、暮方二者相成心せき歸り申候段、不調法断申候二付、右躰不埒之義難相済候得共、後々随分念入候ハ、此度之儀は為済可遣候へ共、乍併其方共計二而者無心元、歸り候ハ、右之訳村役人へ得与申聞、近々序之節役人衆当会所へ被参候様、其上二而当所舟積方之訳可申聞、無間違様得与申付、猶又治兵衛へも是迄行届キ不申事共申付、左之通乗前受取為済候事、但鍵利へも舟積方随分被念入候様申聞置候、

一、糠七拾俵

此乗前、銀貳拾壹匁

代貳貫三百文

内壹貫四百五十六文、治兵衛へ遣入、

残八百四拾文、中ケ間入、

但し是迄先船二積歸り候節は、壹俵二付貳拾文つゝ請取候由、か様之拔積之節は、壹俵二三分つゝ請取申趣次兵衛申之候故、右之通請取申候、

舟主

小兵衛

加子

徳二郎

権二郎

荷主

弥右衛門

同十二日、関津舟年寄平助会所へ被参、此間八村内之もの共不調法仕候処、早速為御済被下、右二付村役人罷出候様と被仰聞候趣、右加子共罷歸り申聞候付、右御挨拶旁参上仕候と被申候付、以来聊之品二而も無断積歸り候歟、又ハ当津を持越松本浜、膳所浜杯

二而積被申候得者、無用捨急度取計二及候間、其段村中へ不洩様折々御申付置可被成と申聞候処、仰之趣村中へも申付置、向後不調法之儀無之様可仕候、万一心得違不持之義仕候もの御座候ハ、如何様共御取計可被成下と申被歸候事、

二月九日、晴天北風強吹、未中刻方尾花川町治郎兵衛方出火、同夜酉中刻迄二熊の川之左右、尾花川兩側二而拾八軒、觀音寺町南側二而三拾六軒、都合五拾四軒類焼致、中間内船屋忠兵衛居宅壹軒隔南隣迄焼候故、早速船相廻し可遣所、御役所并新建御屋敷等へ差急相廻し、同人方者家財不残被取退候迄舟不参、甚不都合二候間、平生二其心得可致置事、

一、筵百枚  
尾花川類焼中へ  
但壹軒二凡五枚當り

代三拾匁

一、酒壹斗、切手  
右町中へ

代拾匁

一、酒壹斗、切手  
觀音寺町中へ

代拾匁

右町儀者歩方、舟方有之、別而艀持中も多有之、自然於仲間方二急御用二而多人歩入用之節相頼候儀も可有之事故、如斯執計置、

一、酒五升  
舟屋忠兵衛へ

鯛式把

代七匁五分

類焼者無之候へ共、至而近火二付遣入、

一、酒三升  
舟屋長三郎へ

代三匁

是者少々間も有之候へ共、家財等取退ケ混雜二付遣入、

合銀六拾匁五分

右之品々為持、翌十日治郎左衛門、太郎兵衛挨拶二罷越し、尤尾花川、觀音寺町兩町へハ、此上相応之用向御座候ハ、無遠慮被申聞被呉候様と別而申述置候事、

去ル寅極月十四日、八幡新町鉄屋卯兵衛行鉄拾三束、当所塩屋佐右衛門方三郎兵衛舟二積下り候処、目形七百目欠在之旨請取二書のせ、舟賃も不被渡、勿論是迄二も度々左様之事候故、舟宿忠兵衛差図二て、右三郎兵衛船加子安ヲ鉄卯江遣、右鉄不残掛直させ候処、何れ二も無欠候故、難題被申掛候儀難相済旨安及応対候処、不調法之段断被申、則無疵の受取二書替、舟賃も被渡、三郎兵衛ふね之儀者事済候得共、是迄も加子共不立会、自分方二而掛改請取二欠書のせ、船賃不被渡義度々有之候処、忠兵衛義其不及穿鑿二も差置候儀ハ不行届向後問屋附ならてハ直着ケ不致旨百艘方申参、忠兵衛身分も難立旨申立、忠兵衛儀卯兵衛江かけ合、町役方へ相届ケ可申与強ク申聞候処、以来ハ念入正路二掛改可仕間、是迄通積送り被下候様二舟方へ相詫呉候様との事故、町内へ者不届見合罷在候内二、塩佐子息喜九郎掛ケ集二被下、直々忠兵衛と申談じ、卯兵衛儀是迄之欠目申立候ハ、右損銀者引負、最早手合不致積二而、卯兵衛方へ被参候処、不及其沙汰二塩佐方書付表之通、無故被相渡候て、先頃忤不調法成掛改方仕候二付、以来問屋附ならて者運送難致与舟方被申候由二候処、左様相成候而ハ外聞二も拘り候へ者、向後ハ籠略無之様随分念入、船賃等も相渡可申間、何分是迄通積送り出来候様、御帰津次第無捨置船方へ頼呉候様と被申候趣并忠兵衛方之伝言等、極月廿六日塩佐殿、次郎左衛門方江参、委細二被申聞、始而承之、右躰忠兵衛



儀無次第取計被居候事、此方二者曾而不存故、来春忠兵衛二も逢候上二而、同人も相立候様又者後々取締方も可申談間、夫迄ハ先つ船積被成間敷与塩左へ申談置候、然ル所当正月六日喜九郎、二郎左衛門方へ被申参候者、卯兵衛方が当三日出二て書状参、此節鉄急入用之儀二而、甚手支罷在候間、早々積下シ呉候様、乍併是悲間屋附ならてハ船方積送り不被下事二候へ者、存知寄も御座候間、早々右返事可致と申参候、如何返答可致遣哉と被申候故、治郎左衛門差図仕候ハ、旧冬其元御帰宅後早速船方へ頼出置候へ共、何分月廻之折柄故、春得と中間相談之上及沙汰候迄直船積者差扣へ候様と之事二候処、今度御紙面二付猶又早速舟方へ申出候処、早春之事故未難調候間、今暫相待候様との事二候得共、御手支之由被仰越候事故、一舨之儀ハ跡が可被仰下候得共、此節出在之候鉄之分ハ御積被下候様と訳而頼入、則鉄八束積下シ申候、猶濟方之儀ハ船方が返事次第可得御意間、左様相心得被居候様と申書状ヲ付、勿論忠兵衛方へも其訳別紙二被申遣、可然と申聞、則正月十日八郎兵衛船二鉄八束積下シ被申候、依之卯兵衛儀相驚キ候哉、忠兵衛方江参何卒早々上津致し、舟方へ相頼呉候様無抛被相頼候旨ヲ以、二月八日忠兵衛、二郎左衛門方へ参、是悲間屋附二相成候而者外聞二も拘り候事故、大津彦根他屋が松原親類共方へ着ケ可申積二候得共、甚不弁理二候故、ながく続候儀二而も無之候得者、重而鹿略致間敷候間、何分是迄通り積送り被下候様、幾重二も相詫呉候様と被申候旨、其外委細之儀共忠兵衛、二郎左衛門へ噂被致候付、同九日夕塩左殿并忠兵衛舟会所へ招キ、二郎左衛門、太郎兵衛立会相互二申談、表向ハ兩人が段々相詫被申候得共、舟方がハ卯兵衛殿へ及面談、一札取之可申と申候所、今一応兩人が卯兵衛へ逢、弥以来鹿略不被致様子二候ハ、兩人請合二相立可申間、卯兵衛へ御直談者用捨可被下与達而頼入候ゆへ、然らハ任せ可申間

此上卯兵衛殿へ急度被申聞、早々右可被申出候、夫迄ハ舟積難致旨の意ヲ以卯兵衛へかけ合被申、可然と申談置候付、忠兵衛歸村之上、其意ヲ以被掛合候積之處、此度忠兵衛登り居候留主中二、鉄八束三郎兵衛船二積参候付、忠兵衛留主宅へ卯兵衛被申参候者、右鉄も積下分被呉事二候へ者、最早御登り被下候二も及間敷との事二て、甚不束二相成、態与卯兵衛へハ逢不申、且庄右衛門殿儀此間中面会之節何ゆへ沙汰不被致事故、一向難得其意間、得と相糺早々右申越呉候様と、同十一日八幡が京へ参候仁二、忠兵衛が治郎左衛門方へ態々伝言有之候付、即刻舟会所へ佐右衛門殿招キ様子相尋候処、聊塩佐殿心得間違故之事二候処、書面二て返事仕候而も分り兼候付、同十三日が塩左殿八まんへ被下、十四日夕被帰、翌朝二郎左衛門方へ参被申聞候者、私儀罷下り忠兵衛へ逢候処、同人被申候ハ、昨日卯兵衛儀私宅へ被参、無是悲逢候事故、拙者も漸昨日致帰宅候、定而此間鉄八束積参り可申候、此義其元甚御手支之趣甚氣之毒二存、内々佐右衛門殿と申談、舟方へハ押包、加子へ酒手ヲ遣、のミニまかせ蜜二積下シ候儀故、自然跡が露顯致候而も至而六ヶ敷相成候間、必沙汰被致間敷候、扱又一件の儀塩佐殿と兩人度々舟方へ罷出掛合候所、卯兵衛殿へ遂直談一札取不申候而ハ難為濟との事二候得共、向後聊も鹿略無之様私共急度請合二相立可申間、直談之儀ハ用捨被下、是迄之儀者私共へめんじ御済シ被下、不相替積送り不被下候而ハ卯兵衛が被頼候所、詮も無之間、何分私共へ御任せ可被下と達而頼入候二付、然らハ今一応卯兵衛殿へ兩人が急度被申聞候上二而、右可被申聞候、其上二て積送り可致との儀二候と取繕ひ申聞候処、卯兵衛儀重々悦候而被帰候、猶又只今呼二可遣間、私義も其意ヲ含卯兵衛へかけ合候様と忠兵衛被申、則呼二被遣候所、早速卯兵衛被参候故、忠兵衛と立会私が委細申聞候所、昨日忠兵衛殿方も左様被仰下、全

各々方無如在御せわ被下候段千万忝候、向後之儀ハ随分念入、聊抹略無之様仕候間、此段御安心被下、急度請合呉候様と被申候間、是迄通り二積送り被遣可被下候、則忠兵衛よりの書状も佐右衛門殿持参被致候、且佐右衛門殿手前之応対筋も逸々相調候而帰津被致候事、

忠兵衛方差越候書状之写、如左、

一筆啓上仕候、弥々以御安康奉珍重候、誠ニ此間ハ罷登り申候而得貴意大悦仕候、然者其節鉄屋卯兵衛方鉄荷之儀御地掛合様子ヲ引合可申与存罷在候所、帰宅前日ニ鉄八束分三郎兵衛積舟ニ而積入参候申候故ニ、右御地之掛合趣者難出来、甚当わく仕困り入申候、乍去今更致方も無之故、私義心得之以此儀ハ佐右衛門殿方荷物もたんく<sup>と</sup>及延引ニ申事故ニ、心得ニて百艘方ハ隠積ニ致被積越候趣ニいたし候而、鉄卯方へ相聞せ取計相済申候、尤右之趣者佐右衛門方のミ込と致シ不申候ハね者御中間わけ合相立かたく、夫故右趣取計申候、尤卯兵衛方跡々之儀者急度正直ニ相守可被申段、得与引合置申候、尚又佐右衛門殿も昨日此方へ被参候て、右取計ニ致置段申聞候而、又々鉄屋卯兵衛本人私宅へ呼寄申候而、佐右衛門殿と兩人ニて得と以來<sup>後</sup>之儀引合申置候、右承知之趣ニ御座候間、跡々荷物者是迄之通ニ御さし向遣可被下候、委細者佐右衛門殿ニ御聞<sup>被下</sup>可被下候宜敷御承知可被下候、尚其内私も上津之節何角御物語可申上候、右之段申上度、如此ニ御座候、恐々謹言、

二月十三日

大津屋忠兵衛

百艘御年寄衆中様

参人々御中

大津屋忠兵衛江遣し候挨拶状写

以手紙得御意候、追日少々暖氣ニ相成候処、弥其御地御安康被成御座奉賀候、誠ニ此間者其御地鉄屋卯兵衛殿船積之儀ニ付御上津被下、

旧冬方段々不残御せわ之段、千万忝存候、尚又頃日塩屋佐右衛門殿被罷越、何角御掛合之上已後取締之義も得と御引合置被下候段、右佐右衛門殿御帰津之節、具ニ御書面ニ被仰越、委細承知致、無残方行届キ候御取計之趣、中間ニおもても一同悦入申候、依之態々以使御礼可申入義候得共、何角多用ニ取紛無其儀、此度八郎兵衛舟幸便ニ右御答御礼申上候、扱此品甚鹿抹之御事ニ御座候へ共、誠ニ右御礼申達候印迄致進上候、御笑納可被下候、毎々船頭共罷越万事不残御世話ニ相成候段、致承知忝奉存候、中間一同厚御礼申達候様之申事御座候、委細愚筆難申述、尚期貴面之節候、以上、

二月十七日

百艘年寄

大津屋忠兵衛様

但し地興<sup>（銀勝方）</sup>黒手伝老度代廿六匁、是ハ忠兵衛儀右一件のミニ限らず、平生ニ<sup>大</sup>右牀之義ハ此方へ不及沙汰ニ、自分無如在相働、品態<sup>（能方）</sup>取納置被呉、就中此度之儀も全忠兵衛働ニよつて、舟方之外聞実儀も相立、別而以後之取締よく相済候ニ付、如此遣ス、

一、春風式升切手、肴鯛壹枚、塩屋佐右衛門殿方へ遣ス手紙之写、弥御安康被成御座奉賀候、誠ニ八幡表之儀、段々御苦勞ニよつて品能相片付、御互ニ致大悦候義ニ御座候、随而此両種輕少ニ候へ共、右御挨拶之趣意ニ進上仕候間、御笑納可被下候事、書余貴面ニ可申述候、以上、

二月十七日

百艘年寄

塩屋佐右衛門様

右一件ニ付、毎度障費候上ニ、八まん迄被参候ニ付遣ス、右之通品能相済、是迄ニ不相替積送り候筈之事、以手紙得御意候、弥御安康可被成御座奉賀候、然者其許御勝手方御仕法ニ付、此間其御地孫左衛門殿御登御咄承り候ニ付、中間ニおい

て申請可致処、委細難相分儀も御座候間、<sup>追々</sup>而御上津之節御立寄可被成候、何分直々御面談二不申承候而者相談も難出来候間、態々以書中此段申入候、以上、

二月廿二日

百艘

大津屋太右衛門様

二月十八日、治郎左衛門、六兵衛、忠次郎、吉三郎、右四艘共空舟二而唐崎辺迄戻候折柄、大きき風二逢ひさいかせの南江漕よせ掛り罷在、同廿日同所より出舟候所、雨風つよく候而、六兵衛、吉三郎二艘者矢橋浦へ着舟、無別条かこひ候へ共、治郎左衛門、忠次郎式艘之舟膳所新堀魼の南つらへおとされ、錠を入候へ共上面よりの風つよく錠を引、北山田の南元浜崎迄流、難義いたし候二付、小舟入より加子八人、小舟二而差遣、勿論矢橋浦始不動浜、元浜、北山田よりも大勢出合被呉、右式艘共元浜の堀へ引込囲ひ被呉、舟并加子共無別条段、同夜五つ時注進有之故、翌廿二日未明より小舟二竿竹飯米、割木等差入、忠兵衛方抱加子庄三郎差添遣候、右せわ二相成候村々へ、不取敢馳走礼二廻り、同日八つ時舟引取戻り候二付、諸入用如左、

覚

一、酒 三升

矢橋浦

舟役人中へ

是ハ右役人中差図を以大勢之人夫差出、勿論場所へも罷越、差配いたし被呉候趣二付、舟会所へ持参致ス、

一、酒 壺斗五升

同所出合之加子中へ

鰯 五把

右ハ人数凡三十人余之もの共、余寒を厭ハすはたか二成水中へ飛込、

舟へ参り出情相働候趣二付、是又舟会所へ差出、厚申謝置候、

一、酒 五升 不動浜へ

鰯 貳把

一、酒 五升 元浜へ

鰯 二把

右二ヶ村よりも大勢浜迄罷出被呉候へ共、最早舟へ乗手伝致貫候二不及、外人夫二而囲ひ候趣二付、如此当村庄屋宅へ持参ス、

一、酒 三升 北山田浦

鰯 二把 問屋 孫右衛門、庄三郎、市右衛門

右ハ問屋衆早速罷出、舟へ乗相働被呉候趣二付、如此孫右衛門宅へ差出相頼置、尤当家へ参り挨拶いたし置候、

右之分廿二日、治左衛門、忠兵衛挨拶二廻り置候、

一、諸白貳升 切手 舟屋重兵衛へ

右ハ錠式挺、縄共かり受候二付遣ス、

一、酒 四升 切手 東西中間内 出合加子共へ

右ハ早速会所へ相詰、少々宛之用向二つかひ候もの共へ遣ス、

一、酒 三升 切手 加子 喜八、伊兵衛、庄兵衛

右三人ハ別而用立候もの共二付遣ス、

一、銭 壹貫貳百文 上下加子六人 廻り同断貳人

右八人ハ早速小舟二而元浜へ罷越候もの共二付遣ス、

一、銭 百文 加子壹人

右ハ翌朝小舟二而元舟迄遣候おして賃、伊八、源八

一、銭 五百文、壹人二付貳百四拾八文つゝ、

右ハ世話二成候村々へ、廿二日治郎左衛門、忠兵衛礼二廻り候節、

加子賃并供兼帶二而召連れ候二付遣入、

✕酒四斗、代四貫四百文

鯛十一わ、代九百拾六文

◎壹貫八百文

三口合錢七貫百拾六文、代六拾四匁五り也、

上巳御礼之覺

石原庄三郎様へ

青銅百疋、下ヶ札付

御元✕

芝山泰藏様

〃

七里左六郎様

御町役

石丸左五右衛門様

〃

内堀繁太様

御勝手方

山田仲助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右六軒へ青銅五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、組屋敷不殘、中保町新建、北出雲平殿へ名

札二而相勤候事、

孫右衛門、三郎兵衛、供新八

一、三月三日を五十日之間、三井寺觀世音御開帳二付、尾藏寺三福天具足、十一面觀世音茂、右二準シ同月四日を御戸開在之、右八南正坊

持場所二付、尤仲間中格別入魂之者共も有之、賑ひ之ため幟二而も取拵呉度旨、精々被相頼候へ共、当中間之義は諸事花麗成事ハ前々方も不致義、併惣躰寺門之義ハ外々とハ訳も違候事故、既二先年甲子年如意谷大黒天為拜之節も金正院僧正方訳而御願之事故二、右之振合心得を以金貳百疋致奉納、此度も右之振合を以三月七日金貳百疋尾藏寺開帳之場所へ持参いたし候、乍併百艘届前二而納奉札差出被呉候而ハ外見も有之差支候間、船屋治郎左衛門取頭といたし被給候様、右南正坊江申置候事、

右訳と申者、当津舟積場所尾花川浜辺杯も寺門領二付、折々ふれ内工も有之趣乍預承之、尚又當時「口聞<sup>（龍體）</sup>字頭代故慶音院此節兼寿院法印」杯も一通り之御僧柄二而も無之、依之其心得をいたし、聊義理相含候事也、是ハ実々心得のため書載候、至而秘密<sup>（密）</sup>の事二候、

一、三月九日、從勢田浜ウグヒ三拾尾、例年之通持参被致候二付、当役中へ配り候事、

一、三井寺如意寺觀世音於神出神明様境内二三月五日<sup>ハ</sup>を御開帳有之候処、去ル甲子大黒天御開帳為許之節も被相頼候振合を以、此度講中川口弥藏を以内々南之院金正院を御頼二付、前二記有之候通之事故、中間相談之上、尾藏寺同様金貳百疋三月十九日与次兵衛、太郎兵衛、孫右衛門同道二而致持参候、寺町橋屋五郎兵衛取次二而、同日孫右衛門宅□御使者来り、諸白式升宛切手二而三包持参有之候付、則中間へ差出ス、

但尾藏寺同様二て奉納札被差出候義ハ断申置候事、



配符 御役所

堅田浦

右三月廿二日巳ノ刻、小遣イ持参二付、便船二遣し呉候様被申参候故、則添書いたし、同浦通船藤七へ相渡ス、

四月朔日、例年之通日吉御神事御配符御渡被成候御状箱四箱、大津浦共五通也、

一、御配符壹通

但し御文言例年之通故略之、

大津百艘

船持中

覚

一、船数七艘

是ハ日吉御神事之節御馬舟

右之船来廿四日、日吉御神事二候間如例年可差出候、尤服忌差合之もの相改可申候、此配符令受印早々順達、留る可相返者也、

卯四月一日 石庄三郎御判

山田浦

矢橋浦

船持

来廿四日、日吉御神事神輿船割賦之事、

大浦

丸船 貳艘 水主九人宛 船年寄  
外二楫取壹人

但し百八拾石積より貳百石積迄

今津浦

丸船 壹艘 水主拾壹人 甚之丞

外楫取壹人

同 壹艘 右同断 重左衛門

丸船 壹艘 右同断 八郎左衛門

同 壹艘 右同断 舟年寄

海津浦

丸船 壹艘 水主拾壹人 治左衛門  
楯取壹人

同 壹艘 右同断 長治郎

同 壹艘 右同断 甚兵衛

同 壹艘 右同断 舟年寄

塩津浦

丸船 壹艘 水主拾壹人 八郎兵衛  
楯取壹人

同 壹艘 右同断 弥介

同 壹艘 右同断 半兵衛

同 壹艘 右同断 源六

右之船例年之通致吟味、来廿四日以前大津へ差舟可致候、尤服忌差合之もの相改可申候、此配符令受印、早々順達、留所より可相返者也、

卯四月一日 石庄三郎

今津 海津

坂本 大浦

右浦々舟年寄

一、牧野九郎兵衛様より御添触壹通

来る廿四日、日吉御神事二付、例年之通船割賦被差出候、右差舟之内差支有之候ハ、石付揃候丈夫成舟致吟味、代り舟可被差出候、尤御神事四五日以前大津へ差舟、其段可被相届候、此添廻状共昼夜



不限早々順達、留り所より可相返候、以上、

大津御役所

卯四月一日 牧野九郎兵衛

今津浦

海津浦

塩津浦

大浦

右浦々舟年寄中

右今津浦之御配符、添廻状共忝箱二入、今津飛脚宿加、屋五郎兵衛殿方へ渡置、

一、御廻状式通、御文言略之、

東側 矢橋浦始 小舟入へ遣入、使新八

八幡舟木迄 矢橋金勝屋加子、源次郎へ渡、

西側 坂本浦始 飛脚新蔵へ渡、

北小松迄

右浦々庄屋、舟年寄

一、三井寺如意輪觀世音、三月三日に御開帳候處、寛政卯年御開帳之節茂、已前振合を以金三百足為御膳料上ケ有之候へ共、此度ハ講中何之沙汰も無之候故、其俣ニ打過候處、当四月中旬講中橋本町品屋宗兵衛、一文字屋藤兵衛当会所へ被来、前々之通不相替寄附致呉候様被相頼候故、相談之上金三百足為御膳料、四月十六日參詣之序手致持参、一文字屋藤兵衛江相渡し候事、

一、四月廿三日、人馬会所より申来、

御所司代

阿部播磨守様御組 三宅喜幸太様

桂又三郎様

中村武左衛門様

小野三郎兵衛様

獅々飛為下見御越二付、小船入を小船相仕立、勢田橋本迄御乗船有之、則小舟入江御挨拶二八郎兵衛罷越入、

一、四月廿九日、沖之嶋を例年之通鱒三本到来、

但し直様貝半江預ル、式本二而九分二買受候、

一、五月朔日、山田よし巻を鯉老本到来、但し式年もの位、

一、五月七日、堅田網船を中鮒五枚到来候事、

五月三日

一、大坂御目付代

戸田主税助様

片桐長兵衛様

右勢田川筋為御順見、扇屋関を膳所御座船二御召被成、当所供船三艘差出し申候事、

扇屋関御出迎、孫右衛門、六兵衛

端午当所御礼之覚

石原庄三郎様 青銅百足、木札付

御元々

芝山泰蔵様

〃

七里左六郎様

町役

石丸三五右衛門様

〃

内堀繁太様

御勝手方

山田仲助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右六軒へ青銅五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、組屋敷不残、中保町新建、北出雲平殿へ名札計二而相勤申候事、

治郎左衛門、三郎兵衛、供平兵衛

五月六日、八つ時

大津

差紙 御役所

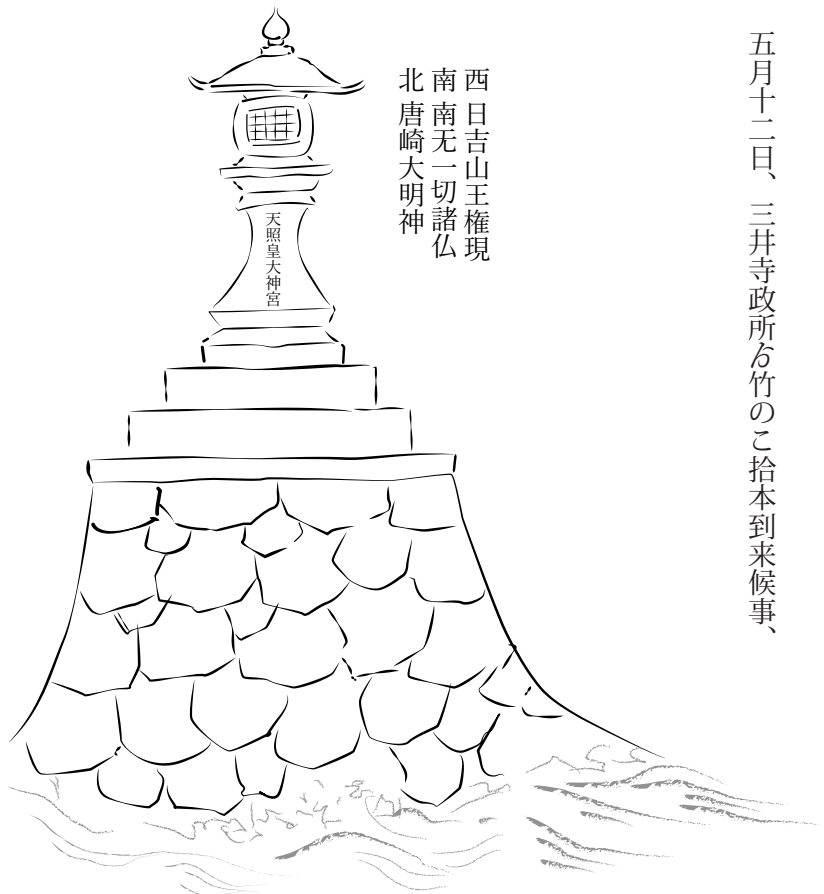
堅田浦

右者明後日御召之趣、小遣衆持参被致、即刻あミ舟六左衛門江相渡し申候、

一、分銅改二付、坂本町新町下ル北側東角三井持屋敷江從京都後藤出張被致、五月六日町内ゝ分銅在之候ハ、差出改受候様申来候得共、当中間之義ハ天秤有之候而も不残兩替入二いたし、不用之事二付、分銅不致所持旨二町内年寄酢屋仁兵衛殿江以八郎兵衛ヲ、右之段七日二申遣候事、

五月十二日、三井寺政所より竹のこ拾本到来候事、

西日吉山王権現  
南南无一切諸仏  
北唐崎大明神



一、此度蒙御免、当所唐崎浜辺二図のことく水際より高サ式丈六尺の石灯笼一基建立仕度候、第一二者諸神、諸菩薩御灯明、第二二者当国湖の渡海船のために仕たく、かねく私願望御座候付、去冬より志し寒廻り相始御合力二預り候へ共、余程大騒成事二御座候故、中々早速にハ出来仕間敷と歎ケ敷奉存候、仍而御多勢の御他力を以願望

成就仕度候間、たとへ物の多少ニよらず、一紙半銭の御助力被下候ハ、御蔭を以不日ニ成就仕度偏奉希候、

文化四丁卯年

江州山門坂本

願主 弓弦半六

二月日

右ハ此度弓弦半六と申、下坂本之角力取心願ニ而、唐崎ハ一町計南の浪打際ニ建之、夜分通船之助ケニも致度存、近郷在々ハ相頼、石木并人夫等寄進被呉候儀ニ付、京、大坂ハ勿論、諸方へも相頼廻り候処、追々寄附有之候へ共、大造成願望故、容易之事ニ而ハ難出来候ニ付、湖上浦々へも相頼申度候間、御当浦ハ御助力御添可被下候と、当三月舟屋三郎兵衛方へ頼参候旨ニ而、絵図持参被致候故、中間評義いたし候処、差而通船之目印ニ可相成場所ニ而も無之候へ共、神妙氣とく成志を察、勿論神仏へ捧候常灯明之事ニ而、通船安穩之冥加ニも候へハ、実ニ出来も可致義ニ候ハ、聊の灯明銭施入可致積ニ候処、当四月廿四日山王御神事ニ罷越見請候処、台石垣壺丈計積上ケ、其上ニ木の仮灯籠を建、毎夜ともし候事故、同五月六日山王参社ニ罷越候節、唐崎かり宅へ参候処、幸半六在宿罷有候故、金三百足遣し申候、

附り、右灯籠台仕候場所之水中ハ宝劔上り候由ニ付拝見いたし候処、長サ凡式尺四五寸、丸き捧劔之形チ、末少シ細丸く、元ニれん花鐙様之形チ有之、鉄石等之類とも不見得、如何様木の石ニ成たるニて候哉と申□ニ候事、

配符 御役所

大津

堅田浦

右五月十七日巳ノ刻小遣イ持参候ニ付、則舟年寄三右衛門殿登り被居候ニ付、相渡し申候、

御手代

内堀繁太様

同

三好仁十郎様

御組同心

佐久間官吉様

外ニ町方右懸り之もの共四五人

右者江戸表道中御奉行所ハ御召ニ付、五月廿一日御出立ニ付、石場迄孫右衛門御見送相勤、与次兵衛、次郎左衛門、太郎兵衛義ハ御宅迄御挨拶ニ罷出候、但し此委細ハ去寅留帳四月、十二月之处ニ留有之故、爰ニ略ス、

一、五月廿一日、如例貴布祢御神酒頂戴致候事、

但し孫九郎、勘三郎、新次郎、庄兵衛メ四人不参、

外ニ今七茂不参之事、

一、五月廿四日午ノ刻、御役所ハ御茶壺之御配符式通御渡し被成、廿五日朝左之村方へ持せ遣ス、但し両村共添状致遣ス事、

野洲郡安治村始壺通、賃銭三百九拾文、先渡、

蒲生郡浅小井村始壺通、同五百文、先渡、

右之通廿五日朝飛脚嘉七持せ遣ス、

一、六月十九日、三井寺ハ暑氣見舞として、例之通素麺式拾把到来致候事、

六月十九日、京暑気見舞

東御奉行

一、森川越前守様

金貳百足

目録台、下ヶ札付

御用人

小柴宗右衛門様

御取次

柴田栄蔵様

〃

村田直右衛門様

〃

伊藤右内様

御勝手御用人

同 忠兵衛様

〃

松野小右衛門様

〃

西村昌助様

〃

鈴木七蔵様

〃

串原三郎兵衛様

右九軒手札計二而相勤、

西御奉行

一、牧野大和守様

金貳百足

目録台、下ヶ札付

御用人

小熊三郎左衛門様

御勝手御用人

香西宗吉様

〃

香西伴助様

〃

小熊藤四郎様

〃

神山善太夫様

御取次

嶋田武助様

御勝手御用人御取次兼帶

十九浦九十九様

〃

岡野大助様

〃

横溝市右衛門様

右九軒へ手札計二而相勤、

東公事方

上田弥右衛門様

東公事下

中川奎左衛門様

山田鋳次郎様

同定右衛門様

石嶋五三郎様

櫛橋平蔵様

本多様御代り

喜多尾八郎右衛門様

塩津惣五郎様

平尾安左衛門様

右四軒へ銀壺両つゝ

中尾勇右衛門様

外二塩津様御役付被成

末吉新五郎様

為恐悦と、御肴料金子

森孫六様

百足持参相勤候事、

吉竹勝左衛門様

右九軒手札計

西公事方

西公事下

深谷平左衛門様

千賀与三右衛門様

不破伊左衛門様

上田八蔵様

入江吉兵衛様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

酒井宗助様

熊倉恵助様

廣瀬佐野右衛門様

右銀壺両つゝ

真野郡右衛門様

上町代

田内与助殿、銀三匁

若狭屋八兵衛殿、刺鯖貳さし

右之通治郎左衛門、三郎兵衛相勤申候、供和助

六月廿二日、当御役所暑中御伺

石原庄三郎様

献上素麵三拾把

二重くり台  
下ヶ札包のし

御元々

芝山泰蔵様

〃

七里左六郎様

町役

石丸左五右衛門様

〃

内堀繁太様

御勝手方

山田仲助様

舟方

牧野九郎兵衛様

〆六軒江素麵廿把宛

御目附小頭兼帯

御目附

高橋角左衛門様

多賀喜曾太様

御目付

小頭

川嶋文左衛門様

佐久間庄蔵様

〆四軒江素めん拾五把宛

右之外御門内不残、御手代衆、組屋敷不残、新建并北出雲平殿江  
名札計二相勤申候事、

孫右衛門、勘三郎、供平兵衛

此節満水二付、御手代衆町御住宅有之方々と相廻り

一、六月廿六日八つ時、從御役所御配賦二箱参ル、則左之通例年之通湖

上船増減相改帳面二記、来月朔日より十五日迄二可致持参候、

一、右帳面之内浦方二より貸船致混乱候間、借り主并貸船屋共入念相改、  
船毎貸借致符合候様可書出候、

右之趣得其意、此配符致請印、無遲滞早々順達、留所可相返候、以上、

大津

卯六月廿六日 御役所

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本片田、本片田船方、  
西之切、釣漁師、今片田、小野、和邇南濱、同北濱、五ヶ浦、  
南比良、北比良、南小松、北小松、打下、大溝、大溝船方、永田、  
下小川、今在家、藤江、横江、船木南濱、船木横江濱、船木北濱、  
南古賀、新庄、太田、藁園、深溝、針江、森村、馬原、木津、  
今津、新保、領家、北仰、貫川、桂村、深清水、大沼、中  
庄、北新保、知内、西濱、海津、大浦、菅浦、月出両組、岩熊、  
塩津、片山、石川、東尾上、延勝寺、海老江、安養寺、早崎、  
下八木、八木濱、大濱、南濱、川道

右浦々 庄屋  
船年寄

東浦之分、御文言同断

松本三ヶ所、鳥居川、石山、平津、千町、南郷、外畑、五ヶ浦、  
関津、太支、黒津、里村、橋本、神領、大江、大萱新田、大萱新濱、  
矢橋、南山田、山田、下笠、駒井庄大萱、穴村、志那、吉田、中村、  
津田江、下寺、下物、山賀、森河原、杉江、赤井、矢嶋、大  
曲、開発、木濱、今濱、水保、戸田、五条、幸津川、小濱、吉  
川、堤村、安治、須原、野田、比留田、野村、小田、江頭、田  
中江、加茂、牧村、大房、長命寺門前、南津田、舟木、八幡舟木、  
八幡町、多賀、北ノ庄、浅小井、香之庄、常樂寺丸船方、同船方、



豊浦、伊庭

右浦々 庄屋  
船年寄

一、六月下旬、但シ新在家村也南志賀村油屋長兵衛方を片田行菜種荷物七拾箇計船積致  
呉候様、尾花川松葉船請負人代同町三四郎江申聞候付、如何可致哉、  
〔貼紙平生松葉船請負之荷品とハ〕訳違候事故、当中ケ間を可然差図致  
呉候様、同町忠兵衛迄申来候付、中ケ間七月二日寄合二おゐて相談  
致候処、外荷物与違菜種之儀者船積方之義ハ、去ル明和、安永兩度  
湖上浦々江御廻状を以被仰渡候訳在候間、当津絞江油屋中ケ間江申  
達シ可然儀二付、翌三日絞江屋惣代八幡町高嶋屋惣助方へ申可談旨  
案内致候所、此節不快二付代人獵師町油屋作兵衛子息被来、則与次  
兵衛、孫右衛門を掛合、此度志賀を片田迄菜種七拾本計船積致呉候  
様申来候、於其御中ケ間二差支之有無御相談被成、弥志賀へ御掛合  
被成候趣二候ハ、今日此方各々方へ御達シ之儀者御沙汰なし二  
被成、猶又右御対談中二坂本船又ハ片田船などへぬけ積二相成候て  
ハ、此方共甚めいわく致候間、是等之儀も得与御手より被成置、其  
上御掛合可被成、急荷之事二候間、何れ共急々御返答承度旨申談候  
所、同人被答候者、先以御深切之段忝存候、幸今日私共中ケ間寄合  
在之、只今出かけ候間、右被仰聞候儀共申咄、急々御返答可致段被  
申聞、翌四日与次兵衛宅へ右同人被来、昨日之承り候一件、直様相  
談二及候所、何れ茂申居候者、志賀郡方同郡へ船積之儀者当時差支  
之儀も無之候間、御勝手二船積被成下候様被申之候、与次兵衛答候  
者、左候ハ、此度二限り同郡之儀故、差支無之候事哉、又者此末と  
ても同郡之分者不苦と被仰聞候儀二候哉と相尋候所、成程御尤二存  
候、昨日相談之趣者、此已後とても同郡之分者不苦、郡違之分ハ是

迄之通り御承知被下度段被申聞候、右之趣二付、尾花川忠兵衛方三  
四郎へ申聞候者、此間申越候種之儀、中ケ間及相談候所、松〔貼紙葉船  
積寄之荷品とハ〕訳違候事故、中ケ間を船積致候得者、相応之直前之助成も  
在之候得共、外ならざる尾花川之事二候へ者、此度之儀者格別之取  
計を以て、刎銭壹貫五百文差出シ、其方二て勝手二船積可被致、猶  
又艀二て片田迄参候も如何二候へ共、浦づたひ之事二候へ者、穩  
便二相心得置可申間、危儀無之様三艘程二船積可被致、前段此度之  
取計ハ以来例二者不相成段、申渡し置候、

七夕御礼

石庄三郎殿 青銅壹貫文、木下ケ札付

石丸三五右衛門様 湊町会所二仮住

柴山泰蔵様 居成

七里左六郎様 中堀町塩七借家

牧埜九郎兵衛様 丸屋町林隠居

内堀繁太様 江戸御留主中故、夕景羽織二而御見舞二参ル、

山田仲助様 居成

右鳥目五百文宛

右之外御門内御手代衆、洪水二付未町々仮住宅二付、夫々手ふた  
二而相勤、

岡田大八様 升屋町会所

曾根源二郎様 鍵屋町〃

三好仁十郎様 此節江戸留主中二付不勤、

浅井紋蔵様 新建二御座候処、右洪水二付菱屋町会所

右之外組や敷不残、北出雲平殿

与次兵衛、六兵衛、供五兵衛

覚

一、金式百疋

糠屋八兵衛殿持参被致候事、

一、白銀壹枚

右者從御本山被下置、慥ニ受取申候、以上、

文化四年

百艘印

卯七月八日

当津

十日講御肝煎中

委は寅年留帳ニ在之、

一、七月十五日八つ時、石場<sup>（イマ）</sup>を乗人七、八人乗せ出船いたし、矢橋着舟前、右之内壺人入水致候、早束引上連<sup>（通）</sup>歸り候段承候付、為見舞酒二升廻り<sup>（通）</sup>与八二為持遣ス、但相果候ものハ伊庭之者二而、松本舟会所へ 壺人旅也、

一、七月十三日、大津町組上ノ番小舟加子伊八、矢橋<sup>（イマ）</sup>を戻り夜分ノ事故矢橋へかし舟二関東者大八人のせ、夜四つ時分小舟入<sup>（イマ）</sup>を揚り候処、翌日右船中ニ金三步二朱取落し<sup>（イマ）</sup>在之、則右加子ノ者拾候ニ付取上ケ、廻り新八二預ケ置、落シ主来り候ハ、中間へ為相知可申段申渡置候処、同日十四日九つ時、右落候者尋ニ来候付、段々承<sup>（イマ）</sup>候候、右之者取落置候二相違無之相聞候付、受取書付為致、証人八丁旅籠屋大坂屋喜兵衛と申者連印二而、右金子相渡遣し候事、右為礼と、酒二升、東番所へ持参、

拾ヒ候加子へ酒三升、

与次兵衛方へ酒一升、此分中間へ差出ス、

右之通持参いたし、厚礼申述歸候事、

一、七月十六日、木地屋忠兵衛死去被致候、為香典酒二升遣申候、

一、七月十九日、矢橋<sup>（イマ）</sup>を乗合之内壺人はまり候由、併早速引上ケ別条も無之由承知致候付、早速見廻状相認メ遣候事、

大津

配賦 御役所

百艘始

渡船之儀ニ付申渡御用有之間、明廿一日九つ時可罷出候、其節此書付可相返候、以上、

大津

七月廿日

御役所

百艘

松本浦

矢橋浦

船年寄共 ※

（※箇所に横書）「右書付即刻松本浦へ遣し、受取書取置事、」

一、翌廿一日、与次兵衛、孫右衛門御役所へ罷出候候、牧の九郎兵衛様被仰渡候ハ、頃日矢橋渡海ニ付頃日松本浜<sup>（イマ）</sup>を出舟候節、乗合之内旅人壺人入水いたし、尚又其後矢橋浦<sup>（イマ）</sup>を同様入水いたし、勿論其者ハ早束引上ケ落命ハ不致候へ共、ケ様二引続在之候而ハ、全加子共不念之様ニも相聞へ、御代官ニも危敷被思召、此後又候ケ様之義共在之候而ハ、其品ニ寄加子、船主共吟味之上、咎メにも可申付筋二候間、銘々如才も無之哉二候へ共、此段申渡置候様被仰渡候間、此末精々心ヲ付怪我等無之様相心得可申候、矢橋、松本も別段二同様可申渡間、

右承知候上ハ、引退候様被仰渡候、

右之趣ニ付、小船入小船持并加子、四廻り舟加子共不残同夜呼寄、書付為致印形取之、

一、矢橋年寄源兵衛、治右衛門兩人被登、御役所へ跡る被来候故、此方共計右之段承歸候処、矢橋ニハ未右怪我人逗留いたし落着不致候故、右申渡し的一件跡る可申渡段被仰聞、依之歸村被致候、右入水人勢州龜山之者ニ而、矢橋ニ而養生為致、龜山へ飛脚遣候処、未不歸否哉相知レ不申間、是る歸村いたし、又々追飛脚差出、様子相知レ次第可申出旨被仰渡候由、矢橋年寄咄し被致候、松本浜ハ未来候、一、右歸村被致候未ノ刻跡へ、又候呼ニ来り、左ノ書状遣ス、

### 口演

只今ハ御苦勞奉存候、然ハ<sup>御歸り之跡江又々御役所</sup>從御役所又々御年寄之内御忝人ニ而も御出被成候様被仰付候、此書状着次第早々御出可被成候、右為可得其意、如此御座候、以上、

七月廿一日

百艘

船年寄

矢橋浦

船年寄衆中

膳所郷宿山田屋ニ治右衛門被居、無程被登来候、

一、七月廿一日、新濱<sup>草刈の者三四人乗舟致</sup>藻取舟、忝人膳所新堀先ニ而入水いたし、死骸相尋居候趣承候付、右入水場所迄四廻り新八、九つ時見舞ニ遣ス、高水ニ而底迄竿竹届兼、未死骸不相知、<sup>尾花川</sup>山田之網入レ之由、

大津

配賦 御役所

大萱新濱

急

別紙ニ

新濱役人膳所木ノ下迄罷出居候趣ニ付、右之場所へ向早々可差遣事、右御配符七月廿二日卯下刻、御使御持参ニ付、即刻左之通添書相認廻り平兵衛ニ小舟入まで為持遣ス、

大津從御役所急御配符忝通、只今御差出し被遊候ニ付為持遣候間、御受取可被下候、尤賃錢木ノ下迄ニ候ハ、百文宛、又御村方迄参候ハ、貳百文、御渡し可被成候、以上、

卯七月廿二日

大津

百艘 ※

辰上刻

大萱新濱村

舟年寄御中

急要書

(※箇所に横書)

「小舟入る平助ニ為持遣候旨、廻り平兵衛罷歸り申之候、」

急

大津

差紙

御役所

松本舟年寄

膳

右廿二日夕酉刻少過持参、急々相届ケ候様申来候、即刻四廻り五兵衛為居合、為持遣ス、奥留書後

一、七月廿二日、朝迄右死骸不揚候故為承候へハ、則廿一日松本浜るも手伝舟遣候趣ニ付、小舟入ちやりこ船ニ加子<sup>六</sup>五人乗せ、廻り新八付

添見舞旁死骸さがし候様申付遣候処、網入候付九つ時過死骸浮候付、用向も在之候ハ、可被申来段申置、加子共ハのこし置、新八ハ引取候事、無程加子共も戻り来候、

一、前差紙遣候付、八つ時御役所へ出かけ二大萱年寄嘉平二、新濱年寄左次兵衛被立寄、引取二者寄不申、

一、日暮時分当会所へ御役所へ使来り、新濱庄や、年寄旅籠相尋、急々罷出候様可申遣、依之当所相尋候処、右新濱二舟宿無之、依之直様膳所木ノ下迄四廻り新八人遣し、若又膳所旅宿二右庄や、年寄不居合候ハ、右宿居村へ早々通達いたし被申候様申遣ス、

右之振合付御役所へ罷出候段可及延引ニ存候付、酉刻過与次兵衛御役所へ罷出、右遅刻ニ相成候段、御断申上置候、

一、無程前二留有之候松本村御差紙来候、

一、戌刻前膳所新八罷歸り、新濱宿ぜ、山田屋ニ寄合居候付、大津御役所村役只今被罷出候様被仰渡候旨申聞候所、庄や答候者、先刻大津御役所ニ而被仰渡候者、書付を以相届候様被仰渡候付、其段ぜ、御代官へ申上候所、相届宜候ハ、此方可申達間、村方別段届候二不及候段被仰置候、併只今御召出候義今一応伺可申と被申、則せ、御代官へ被伺候処、右前段之趣付罷出候二不及段被仰候付、不参之段新八へ申聞候、依之其儘引退候、

右之趣二付、戌之刻過又候御役所へ与次兵衛罷出、其段申上候処、取次北出雲平殿被罷出、先刻せ、書付来候、定而右之振合二而可有之間、其通可申上旨二而奥へ申上くれ候処、無程被罷出、彼是太義二候間、此方二而可取計間引退候様被仰渡候、

#### 京都八朔御礼

東御奉行

一、森川越前守様

金子三百疋 目録台  
下ケ札付

御用人

小柴宗右衛門様

御取次

柴田栄蔵様

〃

村田直右衛門様

〃

伊藤右内様

〃 勝手御用人

同忠兵衛様

〃

松野小右衛門様

〃

西村昌助様

〃

鈴木七蔵様

〃

串原三郎兵衛様

右九軒へ白銀壹両つゝ、

西御奉行

一、牧野大和守様

金子三百疋 目録台  
下ケ札付

御用人

小熊三郎左衛門様

〃 勝手御用人

香西宗吉様

〃

香西伴助様

〃

小熊藤四郎様

〃

中村十右衛門様

御取次

嶋田武助様

〃

神山善太夫様

〃

岡野大助様

〃 勝手御用人御取次兼帯

十九浦九十九様

〃

横溝市右衛門様

右十軒へ白銀壹両つゝ、

東公事方

上田弥右衛門様

東公事下

中川李左衛門様

山田釵次郎様  
石嶋五三郎様  
塩津惣五郎様  
喜多尾八郎右衛門様

右四軒へ金子百疋つゝ

同 定右衛門様  
櫛橋平蔵様  
平尾安左衛門様  
中尾勇右衛門様  
末吉新左衛門様  
森孫六様  
吉竹勝左衛門様

右九軒へ白銀壹両つゝ

西公事方

西公事下

深谷平左衛門様  
不破伊左衛門様  
入江吉兵衛様  
本多新左衛門様  
熊倉恵助様

右四軒<sup>五</sup>へ金子百疋つゝ

千賀与惣右衛門様  
上田八蔵様  
柏原治部右衛門様  
酒井宗助様  
廣瀬佐野右衛門様  
眞壁郡右衛門様  
山田傳左衛門様

右七軒へ白銀壹両つゝ

上町代

田内与助殿 白銀貳両

奥田九右衛門殿 銀壹両

下町代

藤沢傳六殿 貳百文

宿鍵屋左助へ 三百文

〃

藤村佐一殿 貳百文

追分丸屋四郎兵衛 百文

上町代中へ 五百文

山科大津屋孫兵衛 百文

下町代中へ 五百文

東西御門番 三百文つゝ  
東西中番中へ 三百文つゝ  
小番へ 三百文

〆金三兩三歩

錢五百文 貳つ

銀貳両壹つ

〃三百文 六つ

銀壹両三十五<sup>六</sup>

〃貳百文 三つ

〃百文 貳つ

右之通孫右衛門、六兵衛相勤ル、供五兵衛、荷持和助

大津八朔御礼

石原庄三郎様

金子貳百疋

目録台  
下ケ札付

石丸三伍右衛門様

柴山泰蔵様

七里左六郎様

勝手方

山田仲助様

舟方

内堀繁太様

当日二八差扣、追而夜分太兵衛持参、

舟方

牧の九郎兵衛様

右ハ金百疋つゝ

小かしら兼帯目付

高橋角左衛門様

目付

多賀喜曾太様

〃



川嶋文左衛門様

小かしら

佐久間正蔵様

舟方下

北出雲平殿

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

小の宗九郎殿

町代

堀猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

右銀一両つゝ

会所肝煎

山本俵五郎殿

吉本弥四郎殿

右ハ鳥目廿足

御足輕

小遣ひ 鳥目廿足つゝ

御門吟助 鳥目五十足

//老母 廿足

白崎久太夫様

御蔵番三人

平蔵町年寄

御内やしき組屋鋪、新建

右之分手札計

右之通任先例相勤ル、

与次兵衛、太郎兵衛、とも平兵衛

一、七月十九日、勢州龜山之旅人耆人、矢橋より乗船之所、沖中ニ而入水いたし被掛、早速引上直様矢橋江船を戻し、いろく介抱いたされ候へ共、不叶養生相果候故、御地頭膳所江相届、矢橋ニ而檢使相済、取片付被申候所、其後故障出来、八月三日京都御役所江御檢使御出二付、当所江肝煎勘三郎矢橋江見舞ニ参り、其序ニ申込候ハ、京都御檢使御帰京之節、御乗船ニ而大津浦江御着之御積リニ有之候ヘハ、乍御面倒前以御知らせ被下候様頼置戻り候、御檢使ハ翌四日陸地御帰京之事故、当所江出逢不申候、矢橋舟役人中茂直様上京いたされ候故、又々八月七日ニ見舞之書状ニ酒五升相添、廻り与ハ矢橋浦江遣ス、

右見舞状之案文、左二記、

以手紙啓上仕候、朝夕秋冷相催候所、各々様弥御安康被可成御座、珍重奉存候、然ハ御檢使御用一件二付、御役人中御上京ニ而御座候所、未御帰村無之様ニ承り候故、御見舞旁出京可仕候処、最早御引取掛違ニ相成り可申哉ニ奉存、無其義失敬ニ罷成候、依之御安否御尋申上度、使以如此御座候、随而御酒一樽五升、御挨拶之印迄ニ進上仕候、猶期拝面之時候、已上、

八月七日

百艘年寄

矢橋浦

船御仲間中

猶々御年寄中江も御帰村之節、宜敷御挨拶可被下様奉頼候、已上、

一、八月八日、石山丸屋五兵衛やな鰻五本持参、尤居宅普請二付、此方金百足遣ス、右之為挨拶当会所江被参候、

一、八月十七日、大溝舟持太兵衛舟会所へ被参、次郎左衛門逢候処、当十五日大溝蔵方柳箇壱五兵衛舟とも二積入置、右五兵衛舟之ならび二私舟附置候処、<sup>同</sup>内夜五つ時、右五兵衛舟水主善六、宗三義、私舟二而喰事給へ居候内二、何もの歟五兵衛舟へ這入、右之柳箇と并水主共着用のもの四品被盜取候二付、蔵所方舟差留被置候二付、定宿炭屋善助義内々御目付方之内<sup>口</sup>へ参り、其段申上候処、此方共切二聞込置候而も手狭ク様存候へハ、表へ訴置可然哉百艘方江申談候様と、且又紛失物品書相調へ、早々可申差出置候様と被仰候旨、在所へ飛脚を以申越、右柳箇ハ御家中太田十右衛門様、先日坂本へ葬礼二御出被成申上御歸り之節、御蔵所へ御頼置被成候品二付、則御同人様江も御蔵所方御状、右飛脚之もの持参仕候二付、右御状太田氏江相達し、入日記相認貫、舟主五兵衛儀此節病氣二付、不取敢私義罷登り候、いかゞ仕可然哉と被申聞候二付、次郎左衛門答候ハ、何分御訴被置候方可然<sup>存</sup>候間、今一応御蔵所御役人衆へ御伺被成右可被申越候、弥御届被成候儀二候ハ、此方奥印いたし届二出可遣と申聞候故、暫時被引取、無程被参、何卒届呉候様と相頼被申候二付、則届書左之通、

乍恐口上書

一、去ル十五日七つ半時、当所大溝御蔵所方同御家中太田十右衛門殿江被遣候柳箇一字、金蔵堀二而大溝五兵衛舟水主善六、宗三与申もの鱸ノ内江積入置、同夜五つ時善六儀ハ洗湯江参候、宗三儀者舟際炭屋善介方江暫時用事調二上り罷在候而、無程舟江歸り候所、鱸ノ間取荒し有之、右場所二積入置候柳箇り壱并水主共着用に無御座候付、全何もの歟盜取逃去り候儀二て可有之被存、早速水主兩人之もの共、其辺及穿鑿候得共相知不申旨、舟主五兵衛方へ飛脚を以為相知候所、折節五兵衛義病氣二付、私義不取敢右飛脚同道二て罷登り、

右之趣承候儀二て、尤水主共之義ハ、平生実体成もの共二御座候二付、右之もの共申聞候通り相違無之様奉存候、全水主共不立合間合を考、鷹乱もの這入盜取候義与奉存候二付、則紛失品書差上、此段御訴奉申上候、已上、

卯八月十七日

高嶋郡大溝浦

舟持五兵衛

代多兵衛

右之通相違無御座候付、奥書、印形仕、此段奉申上候、以上、

百艘舟年寄

治郎左衛門

卯八月十七日

大津

御役所

紛失物品書

一、柳合利 壹つ

内二 白かたひら

壹つ

玉子同

壹つ

但し紋所爪二かうそ

白半かたひら

壹つ

木めん栗梅の袷

壹つ

但し紋所同断

黒羽織

壹つ

但し右同断

風呂敷

壹つ

木綿白手拭

壹つ

春慶ぬり状箱

壹つ

はせ小紋緒上下

壹具

但し紋所同断

嵐かせ上下 壹尺

封切り手拭 三四廻

江戸紙たはこ入 壹つ

×十式点

右ハ当所大溝御蔵所積入、

外二木綿袷 壹つ

同単もの 壹つ

浅黄ちばん 壹つ

布風呂敷 壹つ

右ハ加子兩人所持もの、

右之通二御座候、以上、

文化四年卯八月

高嶋郡大溝浦

舟持五兵衛

煩二付代太兵衛

大津

御役所

右二通り共丸写二いたし、奥書二右之通町方御役所へ御訴申上候付  
写取、此段奉申上候以上与相認、舟方へ壹通り、御目附方へ一通り  
差上置候事、

一、九月四日、松茸貳拾本、石山村庄屋方

右例年之通致到来事、此松茸勘定之節遣し申候、

湖上船運上銀、来月十日より十五日迄二持参上納可致候、遅滞致間  
敷候、此配符令請印、早々順達、留り所より可相返候、以上、

卯九月廿一日 大津 御役所

大津浦始

川道迄

右浦々

庄屋

舟年寄

右廿二日未刻<sup>朝</sup>新兵衛へ持せ遣入、

一、御文言同断 橋本浦

伊庭終

右廿一日未刻新兵衛持遣入、

口演

一、船御運上銀、来月十日方十五日迄二無遅滞上納可致候、此廻状早々  
順達、留り所より百艘会所へ御返可被成候、以上、

卯九月廿一日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源介、清介、源七、五郎  
八、善兵衛、源六

一、当十七日大風二尾花川町平三郎持<sup>幅三尺九寸、小艦壹艘流失仕、尤</sup>  
西北風強吹流出候義二付、当所方東ハ勢田辺迄、夫方湖東北ハ山  
田、下笠辺迄、日々尋ニ参候へ共相知レ不申、尤修覆不致候而ハ難  
乗古船二付、右風浪ニ而破舟仕候哉、此段御届置度旨申之、廿二日  
八つ時平三郎被申参候二付、年寄次郎左衛門義即刻御役所へ罷出候  
処、御懸りハ御用有之御逢不被成、御取次江申上候ハ、此間大風之  
節尾花川町平三郎持艦壹艘流失仕候二付、日々尋ニ廻り候へ共相知  
レ不申、尤同町方外艀も流し候へ共、其節之風者西北風強吹候義二付、

何れも膳所<sup>ろ</sup>山田辺迄二有之、連歸り全其辺<sup>ろ</sup>外へ流行可申寄者有之間敷奉存候へ共、右平三郎<sup>三郎</sup>之儀ハ至而古舟二付、定而破舟仕候故相知レ不申義と存、持主<sup>も</sup>あきらめ居申候得とも、御印有之義二付、御廻状御差出可被下哉、此上手切二相尋、弥知レ不申候時ハ、潰舟並二御聞濟可被下哉奉伺候段申上候處、其旨御懸りへ被仰上候由二而、重而被仰聞候ハ、此上得と相尋候上、右申出候様と被仰付候故、引取候而猶其旨<sup>平</sup>平三郎へ申聞置候事、但し此落着奥二留有之、

九月節句御礼如左之

石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

元々

柴山泰藏様

//

七里左六郎様

//町役

石丸佐五右衛門様

元々加判同

内堀繁太様 江戸御下り御遠慮二付、治郎左衛門跡<sup>ろ</sup>別段二勤ル、

船方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ青銅五拾疋つゝ、

御門内御手代衆、組屋敷不残、

中保新建不残、北出氏へ、手札計、

右之通治郎左衛門、六兵衛相勤ル、供平兵衛

湖上船運上銀之儀二付、廻状差出置候處、日限之儀者来月朔日<sup>ろ</sup>七

日迄之積二相成候間、其旨相心得、右日限通上納可致候、遲滞致間敷候、此追触早々順達、留り所<sup>ろ</sup>可相返候、以上、

大津

九月廿四日

御役所

松本<sup>ろ</sup>伊庭迄一通

大津<sup>ろ</sup>川道迄壹通

但し廿五日午刻請取、即刻松本村へ為持遣ス、使和助

但し坂本ハ即刻石川半兵衛船へ和助持参相渡ス、

口演

一、船御運上銀、来月十日<sup>ろ</sup>十五日迄と被仰出候得共、来月朔日<sup>ろ</sup>七日迄二無遅滞上納可致候様追触御出し被成候付、此旨御承知可被成候、此廻状早々順達、留り所<sup>ろ</sup>百艘会所へ御返可被成候、以上、

九月廿五日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、五郎

八、善兵衛、源六、

覚

一、人足七人

内

乗駕籠式挺

分持式荷

歩卒持耆人

右者我等儀就御用明廿六日曉七つ時大津出立、浅井郡木尾村へ罷越候条、於宿々書面之人足無滞差出し、御定之賃錢請取之可被繼立候、且川越、渡船、止宿等之儀無差支様可被取計候、此先触早々順達、

留り村を可被相返候、以上、

卯九月廿五日

石原庄三郎手代

長沢貞次郎

江並左中

曾根源四郎

大津、矢橋、草津、守山、

野洲郡

五條むら、  
守山を向人足可被差出候、

安治村、野村新田、富波沢村

廿六日泊

武佐、愛知川、高宮、鳥居本、

米原

廿七日泊り、

長濱、浅井郡木尾村、

長濱を迎人足可被差出候、

右宿村々問屋、庄屋中、年寄

追而乗駕籠を挺用意致置可然候、以上、

右添状いたし、即刻矢橋へ遣候事、

但し九月廿五日申下刻到来、矢橋竹屋新八船へ即刻相渡し候事、

一、九月廿一日、キフネ神酒、例年之通不相替役人出勤祝ひ候事、

一、坂本町組治郎左衛門子息仙次郎、為顔見組内忠兵衛引付被申候而、  
諸白式升、鮒鮓三尾持参在之、即座披露内祝ひ候事、

乍恐口上書

一、小艀舟、幅三尺九寸、壹艘、尾花川町平三郎持、

右艀先月十七日大風之砌流失仕、心当之先々江日々相尋廻り候へ共、  
相知し不申候二付、去ル廿二日其段御訴奉申上候処、此上精々穿鑿仕、  
右可申上様被仰渡、猶又其後も無如在吟味仕罷有候へ共、何分相知  
し不申、尤其節之風行ハ西風強吹流出候事二御座候付、湖東木濱を  
北へ流行候儀ハ決而有之間敷様奉存、勿論其辺迄之浦村方へも呉々  
頼置候義二付、此上二も相知し<sup>候、</sup>次第、早速可申上候得共、右艀者当

用難乗用程之古舟二而御座候付、全其節之風浪二もめ破舟仕候故<sup>而</sup>相  
知し不申儀と奉存候間、乍恐御帳面御除置被成下候様仕度奉願上候、  
以上、

艀主

尾花川町

文化四年

平三郎印

卯十月四日

右之通相違無御座候付、奥書、印形仕奉差上候、以上、

百艘舟年寄

卯十月四日

治郎左衛門印

大津

御役所

同日朝、平三郎召連次郎左衛門義北出氏へ参り、右書付差出置候、

一、十月三日昼時、從御役所松本始之御配符を通参り候故、四廻り新八  
松本江早速遣入、

下堅田町甚吉

嶋ノ関六兵衛

右之もの共船運上銀上納日限申触置候処、今以不相納等閑之至候、  
此書付披見早々上納可致候、此書付可相通者也、

大津

御印判○ 十月十一日

御役所

右甚吉

六兵衛

右御書付入符箱を、十月十一日申上刻御使御持参二付、即刻廻り



新八二嶋ノ関六兵衛方へ為持遣、同人を甚吉方へ相廻し、兩人之内  
右御役所へ返納候様申遣置候事、

当所御手代

一、諸白五升切手 三好仁十郎様へ

同御組同心

一、同三升同断 佐久間官吉様へ

右ハ江戸表道中御奉行所へ御召二付、当五月廿一日大津御出立二而、  
御下り被成候処、右懸り合筋相済候而、同八月廿五日御帰津被成候、  
御悦として如此孫右衛門持参、相勤候事、

八月廿六日到来

一、銘酒三升切手

一、浅草海苔十枚入四包

右ハ佐久間官吉様を為御土産と被下候二付、銘酒ハ中間へ相納置、  
海苔ハ年寄四人へ壹包つゝ、配当いたし候事、

一、内堀繁太様御儀茂、右三好様、佐久間様同様当五月廿一日御出立  
二而、江戸表道中御奉行所へ御召出二候処、右御懸り合筋相済、十  
月十五日御帰宅二付、年寄与次兵衛、次郎左衛門、せた迄御出迎相  
勤候処、とり川宇治屋二において御盃有之、吸物一、八寸一、鉢肴一、  
小付喰被下候事、

御肴代

一、金貳百疋、内堀繁太様へ

右ハ為御帰着為御祝、年寄太郎兵衛、孫右衛門兩人、翌十六日御宅  
へ持参、御悦申上候事、

一翰致啓上候、寒冷二御座候処、各々様御揃弥御堅栄二可被成御勤  
役奉欣喜候、然者当所内堀様御儀江戸表御用向御済切二成、昨十五

日被遊御帰津候付、此段御為知申上度如此御座候、心緒期貴面候、  
以上、

十月十六日

百艘年寄 ※

矢橋浦舟年寄中様

右之通申遣候処、翌十七日矢橋浦弥左衛門、勘三郎兩人被登、内堀  
様へ御悦二被参候事、

(※箇所に横書)

「此書状十六日夕方、廻り平兵衛二小舟入江為持遣ス、」

一、田中江帳屋角兵衛船賃米滞二付、受合人同道二而上津致候様帳わり  
之節引合置候所、于今登り不申故、今日右催促状遣ス、則左二案文留置、  
一筆致啓上候、寒冷相増候所、弥御堅勝被成御座、珍重奉存候、然  
ハ先月十五日於其宅得御意置候御米舟賃之義、罷帰り一同江も具二  
為申聞置候二付、早速御受合人御同道二而御登り被成候わんと相待  
罷在候所、于今何之御沙汰茂無之、追々新穀舟積時節二も差懸り有  
之候へハ、何分御引合不申候而ハ御互二差支出来可申旨、何れも申  
立候間、御受合人御同道二而、急々御上津罷成候様いたし度奉存、  
此段申進候間、早々右御報可被下候書附、期貴面万々可申述候、以上、  
十月十九日 柴田治郎左衛門

吉住与治兵衛

岡村角兵衛様

其浦々当卯年運上銀納日限相触置候処、今以不相納等閑之至二候、  
此書付着早々可相納候、遅参致間敷候、此書付其節可相返候、以上、

大津

一割印 十一月二日

御役所印

岩熊

安養寺

右浦々

庄屋

船年寄

右御配符箱十一月二日戌ノ中刻、月出船長左衛門へ相渡ス、

十一月三日

一、米壹俵四斗貳升入

右者石山寺ノ例年之通到来候事、

代

四廻り五兵衛へ売遣ス、

一、当十月二日、七つ時ニ尾花川町を北江新シキ長持貳ケ、北江持行候者有之故、同丁善六義いづ方江持行候哉と相尋候所、升や町差物屋方さい川吉兵衛方江持参り候由有<sup>中</sup>之候旨、右善六、忠兵衛方江相知らせ候段、忠兵衛義仲間江被申参候二付、同夕差物や藤兵衛相まねき尋候所、右長持八片田八まんや之仕入代呂物<sup>ロ</sup>にて片田着之積りにて、私方江受取置候所、私義ハ漸々近比赤之井より升や町江引越し参り候義二付、当地之様子ハ一向不案内ニ候故、先比蔵はし町近江屋喜兵衛方江参り、長持壹本、分掛り物何程ニ而片田迄参り候哉と尋候所、凡式勿四五分掛り候旨被申候所、折節さい川吉兵衛息子私方江小便取二被参候故、片田迄積参り呉間敷哉と頼候所、出来次第私宅迄差出申候ハ、手すき之節積参り可遣と被申呉、長持壹本二付せに百文ニて相對仕、則今日六本為持遣し候段被答候故、右躰持越し船積之義ハ地方浦<sup>法</sup>方<sup>法</sup>ニも相ふれ候義共委細ニ為申聞候所、唯今

之私故左様之義も一向不弁江に罷在候へハ、向後船積之品御座候節ハ、其時々不洩様御仲間江相斷、荷問屋之内江相頼船積仕候様急度相心得可申間、此度之義ハ為濟呉候様申之、実々其通之事ニ無相違相聞江候得共、さい川吉兵衛義ハ是迄も右様類<sup>ル</sup>を以折々有之旨、兼而風聞も候故、得と相糺可申積り二付、藤兵衛義今晩ハ先引取可被申と申渡し置、翌早朝吉兵衛よび二遣し候所、昨日藤兵衛方片田行長持六本私方江持参り、私義ハ何事も不存候所、倅義先日藤兵衛方ニて契約<sup>ケ</sup>仕候旨二付、左様之義決而<sup>不</sup>相成段倅江茂申聞、今日ハ御斷ニ罷出可申と存罷在、全倅義若はい物ニて心得違ひ仕候義二付、則右長持不殘今ニ私方ニ留置申候義ニ御座候間、何分御用捨被成下、長持之義はいケやう共御差図可被下と吉兵衛義段々相詫候二付、猶又吉兵衛、藤兵衛相招、以後之義きつと申渡、左之通一札取之、此度之義ハ為濟遣し置候事、

一札

一、当二日藤兵衛方さい川吉兵衛方迄長持六本持出候義を被及御見聞、私共兩人江様子御尋御座候、右長持八片田八まんや又三郎仕込之代口物ニて、悉皆藤兵衛方ニて仕立上ケ、片田迄送り届候相對物ニ御座候所、折節右吉兵衛倅藤兵衛方江小便取二参り候故、積参り呉間敷哉と藤兵衛より相尋候所、出来次第二吉兵衛方迄差出置候ハ、勝手ヲ以片田江積参り可申と申聞、則出来候二付、吉兵衛方迄持越し候義ニ御座候、然所右躰持越し船積之義ハ御浦法<sup>浦</sup>ニ相振<sup>振</sup>レ候旨、委細二被仰聞、御尤至極ニ承知仕候、私共義左様之訳共一向心付無御座事故、今更当惑仕、御答可申上様無之、何分穩便二被成下度段御頼申上候所、格別之御勘弁ヲ以、此度之義ハ何方江も不被及御沙汰、増舟賃も御用捨ヲ以右長持六本分、此乗前銀六匁五分壹り差出し、為御濟被下、千万忝奉存候、然ル上ハ向後ハ聊之品ニ而

も其時々御仲間江相断御差図請候様、急度相心得罷在候、万一此後  
兩人之内浦法相背候ハ、如何様御取計被成候共、一言之子細無御  
座候、為後日之御託証文差出し置候所、仍而如件、

文化四年卯

十一月五日

大津升や町

指物屋藤兵衛

山門領さい川

船持吉兵衛

百艘御年寄中

右本紙ハ取片付有之、

一、十一月十一日、石原様若殿捨之進様御元服被成候付、為恐悦翌十二

日朝、金子式百足差上候事、

与次兵衛麻上下二而、孫右衛門御玄関江出ル、

十一月廿九日

獅々飛為下見御案内二付

東西御組

東

大河<sup>川</sup>原十太郎様

笹井織之進様

御供壺人

西

大塚甚蔵様

山田庄之助様

近藤市之進様

御供壺人

たはこ盆 入遣ス、小舟下ノ治右衛門加子三丁  
うすへり

御差紙壺通、高嶋郡領家村

右十二月十一日未ノ刻為御持来り申候、

添状いたし翌十二日未明、飛脚和助為持遣ス、

甚寒之節御座候処、弥御安康可被成奉珍重奉存候、然ハ從大津御役  
所御差紙一通、其御<sup>村</sup>方へ早々相届候様被仰渡、来ル十五日罷出候  
趣承申候、依之態々仕立飛脚を以差遣候間、乍御苦勞早々御上津可  
被成候、則飛脚賃壺貫五百文、此ものへ無相違御渡し可被成候、以上、

大津

十一月十二日未明

高嶋郡領家村

御役人中

当津寒氣御窺

石原庄三郎様

真鴨壺掛、献上もの

元々

柴山泰蔵様

七里左六郎様

内堀繁太様

石丸三五右衛門様

船方

牧埜九郎兵衛様

右南鐐一片宛

目付

高橋角左衛門様

多賀喜曾太様

川嶋文左衛門様

小頭

佐久間正蔵様

右ハ銀壺両宛

右之外御門内御手代、組屋敷、舟方下北出雲平殿、手札計二て

与二兵衛、孫右衛門、供与八

十二月十三日

一、七里左六郎様御役所御貸付之義二付、丸岡、出石御役人中不埒二付、  
彼是故障在之、川口弥蔵も宿之義故、悲田院会所止メ二相成、八月  
十二日の上京今以不罷帰、右之趣二而余り長々「御遠慮二而  
御引籠被為居、余り長々之事故、此節寒氣見舞乍序、御見舞として  
金貳百疋差上候事、

京都寒窺<sup>(氣脱力)</sup>

東  
森河越前守様

例年真鴨壺番献上致候処、先月御母公御死去被成候段、当時  
御登中二付鳥魚留の札御門二在之、依之金貳百<sup>疋</sup>四<sup>目</sup>録台二の  
せ差上候、

右御玄関江罷出、例年鴨壺番寒氣為御窺差上候処、此節御登中二付、  
御目録献上仕候間、此段御断申上候、御取次御出、暫相待候様被仰渡、  
直様奥へ御入、無程御出被成、念之入候段被仰渡引退候事、是迄右  
躰之例無之節、懸り取付之義二付、強而重而之例二不相成候間、依  
時宜二取計可申事、

御用人

小柴惣右衛門様

村田直右衛門様

御勝手御用人

村田忠兵衛様

西村昌助様

御取次

松野小右衛門様

柴田栄蔵様

伊藤右内様

鈴木七蔵様

串原三郎兵衛様

右ハ名札計

御公事方

上田弥右衛門様

山田釵治郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

右ハ南簾壺片宛

//下

中川奎左衛門様

中川定右衛門様

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

〆右八名札計

西

牧野大和守様 真鴨壺番、二重くり台二のせ下ケ札付

御用人

小熊三郎左衛門様

香西伴助様

中村重右衛門様

神山善太夫様

御勝手御用人

十九浦九十九様 取次兼帯

香西宗吉様

嶋田武助様

岡野大助様

横溝市右衛門様

右八名札計

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様 恵助様御事

右八南鐐一片つゝ

//下

千賀与三右衛門様

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井惣助様

山田傳左衛門様

右八名札計

町代田内与助殿 銀三匁

若狭屋八兵衛様 ひとり二羽

与次兵衛、孫右衛門、供廻り五兵衛

右之通十二月十四日登京、十五日二相勤、

田内与助殿此節江戸下り付、尤子息も病氣之由二而出勤無之旨、町

代部屋二而承候付、左之手紙遣し置、尚又鍵屋左助方二而も為知被

呉候様、相頼置候事、

一筆啓上仕候、嚴寒之節二御座候処、弥被成御揃御安泰可被成御座、

珍重之御義奉存候、然ハ東御奉行様、此節御諒中二御座候処、来ル

年頭御礼御受被遊候御儀、日柄相究り候ハ、為御知被下度、尤西御

役所ハ例年之通正月三日御受被遊候義と奉存候、万一相変候義も有

之候ハ、是又為御知被下度奉頼上候、先者右之段御頼申上度、態々

以書中如斯御座候、恐惶謹言、

大津百艘

十二月十七日

年寄

田内与助様

一、南鐐壹片

右例之通西村多右衛門殿被下、伊勢屋清次郎殿へ受取書遣し候事、

十二月十六日



一、白銀壱封

右者例年之通御持せ被下、慥ニ請取申候、以上、

十二月廿六日

百艘年寄

木内小兵衛様

右之通請取書遣し候事、

覚

一、御納豆 五拾把

右者從御前様例年之通被下置、難有頂戴仕候、以上、

文化四年

百艘印

う十二月廿七日

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子百疋

右者從当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶從御前被下置、慥頂戴仕候、以上、

う十二月廿七日

百艘印

松岡市左衛門様

一、当五月中旬より六月江雨降りつゞき、近年之大洪水ニ付、去ル<sup>サ</sup>ふるき

百姓ニ往古より之定木有之、満水度毎記録ニ留メ有之候故、其書付之趣此所江留置候、

第一番之水 往古より洪水之第一と称ス、当卯年より水壺尺六寸高シ、

一、延宝四辰年

第二番之水

一、寛文九酉年

第三番之水

当会所入口しき迄水参ル、熊<sup>(野)</sup>之川より舟忠迄艀ニ而通

一、文化四卯年

ふ、か<sup>(加賀蔵)</sup>倉前も艀ニて通り、

第四番之水

一、元文三年

右年曆之間々に高水茂有之候得共略之、格別之大洪水と称ル計を番付書置候事也、

前二統目錄

一、勢州龜山之旅人矢橋ニ而死去ニ付京都より御檢使之事、

一、石山丸屋五兵衛居宅普請之事、

一、大溝五兵衛船へ積入候大溝蔵荷物盜取候事、

一、尾花川町平三郎持艀流失之事、但し不相知候ニ付潰し舟ニ相成候事、

一、三好様、佐久間様從江戸御歸り之事、并内堀様御歸りニ付御出迎之事、

一、田中江角兵衛船賃米滞候ニ付書状之写、

一、指物屋藤兵衛より長持六本際川へ持越事、

一、七里様御貸附之義ニ付表向御遠慮ニ付御見舞差上候事、

一、京御奉行様御諒中ニ付田内氏へ尋状之写、

一、大洪水之留書、

(裏表紙)

八拾貳番

百艘



# 四、「万留帳」文化五年（二八〇八）

（表紙）

戊 文化五歳

万留帳

〔<sup>（貼紙）</sup>八拾三〕

辰 正月吉日

（表紙見返し）

目録書奥二有之、

（本文）

文化五年戊辰

正月二日当所御礼

石原庄三郎様

金貳百足

目録台  
下ケ札付

元々

石丸佐五右衛門様

柴山泰蔵様

七里左六郎様 旧冬方御引籠被成候へ共、年礼者やはり勤ル、

内堀繁太様

船方

牧野九郎兵衛様 右五軒金百足つゝ、

目附

高橋角左衛門様

川嶋文左衛門様

多賀喜曾太様

小頭

佐久間正蔵様

右銀壹両つゝ、

舟方下

北出雲平殿 銀壹両

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

町代

堀伊三郎殿

〃

小野宗九郎殿

〃

遠藤重五郎殿

右銀壹両つゝ、

宿場肝煎

吉本弥四郎殿

山本兵五郎殿

鳥目廿足つゝ、

御門番吟助殿 五百文

御袋へ貳百文

御足輕半七殿 小遣藤七殿

〃

〃貳百文つゝ、

白崎久太夫様、御蔵番三人

組屋敷不残、御門内御手代衆

平蔵町年寄、右ハ手札計

年寄与次兵衛、〃太郎兵衛、供廻り新八相勤る、

正月三日、京都御礼

西御奉行

牧野大和守様

金二百疋

目録台  
下ケ札付

御用人

小熊三郎左衛門様

香西伴助様

中村重右衛門様

神山善太夫様

御勝手御用人

十九浦九十九様、取次兼帯

香西宗吉様

嶋田武助様

岡野大助様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

右拾軒へ銀壹両つゝ

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

右者金百疋つゝ

同下

千賀与三右衛門様

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗助様

山田傳左衛門様

右六軒銀壹両つゝ

東御奉行、旧冬々御隠中二付、年礼正月九日二相勤申候事、

御公事方

上田弥右衛門様

山田釵治郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

右四軒金百疋つゝ

//下

中川全左衛門様

中川定右衛門様

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾安左衛門様

中川<sup>尾</sup>勇右衛門様

末吉龍<sup>五郎</sup>左衛門様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

右九軒へ銀壹両つゝ

上町代

田内与助殿 銀貳両

下町代

藤沢傳六殿 貳百文

//

奥田九右衛門殿 銀壹両

東西御門番 三百文つゝ

宿鍵屋下女 貳百文

山科大津屋孫兵衛 百文

藤村佐市殿 貳百文 小番へ 三百文

上町代中へ 五百文

下町代中へ 五百文

宿鍵屋佐助へ 三百文

追分丸屋四郎兵衛百文

東西中番中へ 三百文つゝ

年寄孫右衛門、〃三郎兵衛、供五兵衛、荷持和助

正月九日、京都東御礼

東御奉行

森川越前守様 金三百疋

目録台  
下ケ札付

御用人

小柴宗右衛門様

村田直右衛門様

御勝手御用人

村田忠兵衛様

西村昌助様

御取次

松野小右衛門様

柴田栄蔵様

伊藤右内様

鈴木七兵衛様

串原三郎兵衛様

右九軒へ銀壹両つゝ

右之通孫右衛門相勤候、供五兵衛、忠兵衛

〆金五兩貳歩

銀壹兩四拾四

銀貳兩壹つ

五百文三つ

貳百文七つ

三百文五つ

百文貳つ

正月四日、初寄合（願脱カ）見世諸帳面勘定仕立、中飯在之候事、

正月六日

一、炭拾貳俵 大溝船年寄

右者年頭為祝儀到来候事、但し年寄年礼二出ル、

一、正月五日、当津問屋和邇屋藤左衛門殿并塩屋七兵衛殿相招キ、能登川船上ケ之儀申談シ、則問屋中ノ書状被遣候様申談、当会所ノも左之通書状相認メ、武兵衛船ニもたせ遣事、

新春之御慶目出度申納候、弥安康被成御迎年珍重奉存候、然者当津ノ積送り申候諸荷物船上ケ之節、浜ニ而はへ候而御請取可被下所、粗承候得は、近来者船ノ直ニ蔵入被成候方茂有之候段承知致候、荷数有之節杯ハ、猶更右躰之儀ニ而は自然間違等有之候てハ御互ニ不宣候間、乍御世話前文之通浜ニてはへ荷数相改、其上御請取被下候様外御問屋中へも御通達被下、呉々右之段御承知被下候様奉頼入候、右得御意度能々書中を以如此ニ御座候、以上、

正月五日

百艘年寄

能登川帳屋



田中藤兵衛様

尚々大津問屋中より右之段御願旁書状参り候儀ニ御座候、以上、

一、生たい老尾

白うを三盃

右者大津町組与次兵衛子息新次郎儀、去春以来病氣不参ニ候処、追々全快之趣ニよつて今四日より出勤被致、尤今暫保養も仕度間、当分ハ勝手勤ニ為致呉候様断有之、右為挨拶被差出、即日一同相揃披露候事、

正月十七日

一、大鯉老本

右者山田浦網方より到来致候ニ付、翌十八日役人打寄中飯有之、其節遣ひ候事、

正月十五日、芦浦御礼

一、観音寺様

扇子三本人老箱

但し扇子箱、二重くりあし台

右当年も不相替御逢有之、恐悦申上、御酒并御節子共例年之通被下置候事、

御家中西川五郎兵衛様

下物

久松清右衛門様、右三軒へ扇子三本人老箱つゝ、

片岡喜右衛門様

〔<sup>〔後事〕</sup>已前ハ片岡氏ハ不相勤候へ共、近来西川氏引被申候、其後<sup>〔相〕</sup>単当ニ付相勤候へ共、一兩年已前死去被致候間、来年よりハ勤メ候ニ不及候事〕

右之通六兵衛、八郎兵衛相勤ル、供与八

正月廿一日、貴布祢御神酒、役人不残出勤、

一、堅田町組西七兵衛先達而退役被致候処、此度同組より被及沙汰、中間相談之上当神酒之節より直勤被致候、但先年坂本町組無人ニ付、同組へ加入致勤被居、其後退役中も其儘ニ在之候処、此度坂本町組より堅田町組へ被差戻、已前之通堅田町組役人ニ被相成候事、

当日盃者为惣代<sup>〔治郎左衛門六兵衛〕</sup>、兩人ニ而相済候、

諸白式升

鯉一本 右七兵衛持参在之候、

一、坂本町組治郎左衛門子息仙次郎

北之町組太郎兵衛子息定太郎

右兩人為見習当神酒より出勤被致候、銘々不残盃相済候事、

右兩人組合ニ而、<sup>〔諸白三升〕</sup>鯉式本 被差出候、

右打混し飯後ニ打祝ひ候事、

一、右仙治郎養子為顔見金百足被差出候、

正月廿一日、大津町組清次郎子息三多郎、幼少より京都へ仕官ニ罷出被居候処、旧冬より清二郎及老年、取戻し跡相続候積りニ被致、此度中間へ為顔見、大津町組より為引合候事、酒式升、鯛式杞被差出候、

一、中間六兵衛船当正月十八日、道下り積固より翌十九日夜出舟候処、唐崎ノ南さいかせ<sup>〔わかし〕</sup>沖ニ而、ホクソゆるみ帆柱へさきへこけ候故、早速錠を入置、取片付候而儀へこき寄せ候積之処、俄ニ未申の大はやて風ニ相成、廿二日まで其儘ふられ居候を、彦根領三湊之舟と被存、

沢山たやゝ加子十四五人懸付被申候旨承之、小舟入加子共四五人チヤリユニ而押切遣し、舟ハさいかせへ囲ひ置、外ニ別条無之間、大工を差越呉候様と申越候故、舟主六兵衛義大工善兵衛召連参り繕ひ為致、廿三日日和能候而、右場所直ニ出船罷下り候、

一、酒五升切手 沢山たや

するめ式わ 会所へ遣ス、

右ハ中間惣代川七、舟主六兵衛持参、挨拶ニ参置候処、翌日たや、舟持兩人挨拶ニ被参候事、

一、錢三百文 小舟入加子

五人のものへ遣ス、

外二酒二升、舟主六兵衛方も被遣候由、

右之通中間方取計いたし候事、

覚

一、炭 式俵

右者朽木兵庫之助様方例年之通被下置、慥ニ請取申候、以上、

文化五戊辰年正月廿九日 百艘

柳屋市左衛門殿

二月六日夕方、字大濱西山町白崎屋敷下ル西添へ下ル見通し之浪打際ニ、男産子死骸有之、翌七日川口町手切ニ御訴被申上、御検使御出ニ成、相済候事、  
右ハ後日為心得之ニ爰ニ留置候もの也、

一、測量御役人坂部貞兵衛様外ニ御壹人、二月廿日草津宿御泊りニ而、翌廿一日矢橋浦方被成御乗船候趣、矢橋浦より廿日之夜戌之刻、以

手紙知らせ参り候故、翌廿一日未明ニ太郎兵衛、孫九郎小舟入迄御出迎申上、辰之刻御着船被成、則矢橋浦茂平治付添、小舟入ニ而ハ御休足無之、八丁迄御出被成候、

右之外測量御役人当駄御通り之砌、大津方矢橋浦迄御用雇賃船之義御尋之趣、当宿役人方当会所江尋ニ参り候故、左之通書付遣ス、

覚

一、小丸船壹艘 かこ式人乗り

此船賃貳百文

但し増かこ壹人ニ付六拾文宛

右ハ從大津矢橋迄御用御雇渡船賃如此御座候、以上、

大津

戊辰二月廿一日

百艘

右之書付同日巳之刻、当人馬会所はたらき使重蔵江相渡、

上巳之御礼留、左之通

石原庄三郎様

青銅百疋

但し木札付、青さし

御元々

柴山泰蔵様

〃

七里左六郎様

〃 助役

石丸佐五右衛門様

元々加判

内堀繁太様

船方

牧野九郎兵衛様

右五軒江青銅五拾疋宛

此外御門内御手代衆中、御組屋敷、新建不残并北出氏共、手札計二而相勤ル、

孫右衛門、勘三郎、供平兵衛

三月五日、御役所より配符式箱御渡し被成、御文言左之通、

覚

一、小艀船壹艘 勢田橋本村船主利右衛門

右之船去卯十二月中石場堀ニ繫置候処、流失之様子ニ而不相見候二付、段々相尋候得共不見当由ニ而、吟味之儀願出候之間、浦限相糺、右船有之候ハ、船主へ及通達可相渡候、此配符浦名下令請印早々順達、留り所より可相返候、以上、

辰二月五日 大津御役所印

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川

右浦々庄屋

舟年寄

右ハ即日坂本四ツ家市郎兵衛并七兵衛、金蔵へ参り合候二付、慥ニ相渡ス、右使雇新藏持参、

右之通御文書配符式箱、松本始メ同所船年寄武兵衛殿方へ即日持せ遣ス、使雇新藏

一、石丸佐五右衛門御元々役御勤被成御座候処、此度江戸詰被蒙仰候旨、町中御触在之候、依之為御暇乞南鐙一片、孫右衛門持参致候事、三月七日、

一、三月八日、金蔵堀ニ繫置候川口七兵衛船水主紋次義、海津行之荷物

積ニ、右舟乗廻し可申と存錠あけ候処、何者歟盜取候哉、刃物ニ而縄切候様子ニ而、錠無之候処、同堀ニ有之候次郎左衛門舟、忠八舟、式艘共川七舟同様錠切取候二付、即日年寄孫右衛門義御目付高橋氏へ参、内分其段申上置候事、

一、右二付仲間内居合之加子共呼付、一同為申合、無油断穿鑿仕、手懸りも有之候ハ、早速可申来、尤此上如何様之紛失もの出来候義も難計候間、加子中一同締いたし、当分之处毎夜見廻り可申様申渡置候、外ニ此頃無宿もの之類、明キ舟ニ而寝泊り仕候趣ニ候間、是等之儀も寝伏不為致様制度可仕段、是又申渡置候事、

一、右二付出舟見廻り之手当旁、中間当役之ものも折々ハ、夜中艀舟ニ而出張いたし可然旨之評議ニ相成、則即夕肝煎中四五人、外ニ雇水主兩人乗組出張被致候事、

一、宿場肝煎山本兵五郎親祐九郎死去被致、為香典白銀壹兩遣し候、尤是迄遣候例者無之候へ共、渡舟方割増等之義二付、相頼候事茂有之候二付、格別之取計を以右之通致置候へハ、已来其心得ニ而、依時宜差略可致事、

三月九日、

一、当三月八日、杉江浦百姓四人乗組、丸小舟ニ而大津へこやし取ニ参候処、はさきの櫓をおし居候もの、唐崎と山田との真沖中ニ而早緒切候而、壹人入水致候旨、右村年寄甚左衛門同夜次郎左衛門方へ内談被申参、夜中之儀ニも候間、明朝御訴被申可然と差図いたし遣置、翌九日見舞并用向尋旁孫右衛門儀酒五升持参ニ而右場所へ参候処、今朝四つ時死骸あかり、村方へ引取置、村役人ハ大津御役所へ届ニ被登候旨二付、居合候衆へ逢挨拶申述置、孫右衛門義ハ歸津致

候、然ル処庄屋喜左衛門舟会所へ被参、死骸あかり候旨被申聞候付、早々御注進被申上、可然と申聞置候処、同日八時半時從御役所呼二参、次郎左衛門罷出候処、杉江浦迄舟壹艘只今差出候様と被仰渡、上組次兵衛舟二水主三人懸、畳、たばこほん、茶道具類差入、川口堀へ為廻、則為御檢使舟方御手代牧野九郎兵衛様御上下共、同日七つ過方御出舟候処、折節北風強候而舟立兼候故、漸暮過二矢橋浦へ着舟、此方舟ハ御戻し被成、芝田勘三郎方ニ御止宿被成、十日朝矢橋方舟ニ而杉江へ御越被成候旨ニ御座候、尤下役北出雲平殿義ハ、当所より九日七つ過陸地を御出被成候故、定而其夜杉江迄御着ニ而可有之と存候事、

一、当二月中保町酒屋甚兵衛居宅東添北へ下ル道筋持地面之内、土蔵之北続二新堀を堀、所持之艀舟囲場ニ被致度由ニ而、普請ニ取懸り被居候ニ付、相招キ懸ケ合書付為致置候、尤右本紙并委細之訳ハ別紙書留、空地一件之所へ入置候故、爰ニ略ス、

大津

一、配付 御役所

野洲郡杉江村

但し箱入

右御配符急々差遣候様被仰渡候ニ付、飛脚新蔵二三百五拾文飛脚賃書入手紙付、三月十三日午ノ刻持せ遣ス、

三月廿八日、勢田橋本浜作右衛門被来、如例ウグヒ三拾式尾持参ニ付、即刻当役中江配分いたし候事、

一、四月朔日、例年之通日吉御神事御配符三通、増か子御差留メ之御配

符式通、神輿船江御添触壹通、×六通御状箱三つ御渡し、此節御役所箱出切、壹箱ハ当仲間之箱江入遣ス、合四箱二成、

一、御配符壹通

但し御文言例之通略之、大津百艘船持

来ル十八日、日吉御神事神輿船割賦之事、

堅田浦

丸船貳艘 水主九人 宛 船年寄  
外楫取壹人

但百八拾石積方貳百石積迄

二宮方早船

今津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 甚丞  
外楫取壹人

丸船壹艘 右同断 十左衛門

丸船壹艘 右同断 八郎左衛門

丸船壹艘 右同断 船年寄

海津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 治左衛門  
外楫取壹人

丸船壹艘 右同断 長治郎

丸船壹艘 右同断 甚兵衛

丸船壹艘 右同断 船年寄

塩津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 八郎兵衛  
外楫取壹人

丸船壹艘 右同断 清兵衛

丸船壹艘 右同断 半兵衛

丸船壹艘 右同断 角兵衛

右之船例年之通致吟味、来ル十八日以前大津江着船可致候、尤服忌  
差合之者相改可申候、此配符令請印早々順達、留り可相返者也、

〔御印影写〕  
辰四月朔日 石庄三郎御印

堅田浦、今津浦

海津浦、塩津浦

右浦々船年寄

一、牧野九郎兵衛様を御添触壹通、御文言例之通、去卯年留帳ニ有之、  
略之、右四ヶ浦船年寄中宛、

朔日、右片田卜七へ渡ス、

覚

一、船数七艘、是八日吉御神事之節御馬船

右御文言例之通、去卯年留帳ニ写し有之、依而略ス、

山田浦、矢橋浦船持

右山田庄三郎加子左七へ渡、

一、助か子御差留メ之御配符式通、御文言例之通、略之、

東かわ、矢橋浦を八幡町迄、此御配符利介二小船入へ持せ遣し、

新八二渡、

西かわ、坂本浦を北小松迄、此廻状四月二日巳刻四つ屋源蔵へ

渡ス、使与八、

右東かわ之御配符御状箱、御役所ニ此節出切二付、当会所之状箱ニ  
入遣ス、牧野様を被仰聞候事、

右山田、矢橋之御配符入壹箱、四月二日小舟入会所江矢橋を持参い  
たし、四廻り之者心得違ひにて受取置候二付、当会所当日市兵衛  
御役所江相納ル、御役人草川氏江相渡し候事、元来矢橋を御役所江

直々相納可申事、

一、助か子御差留メ之御配符、東かわ之分八幡を当会所江向けいせ甚取  
次を以持参いたし候所、是も廻り留り可相納筈之所、遠方之  
所故彼是申遣し候而も延引いたし候故、四月十日当会所当日勘三  
郎御役所江相納遣ス、御役人小高丹蔵様江相渡ス、

四月十四日

一、ます三本

右伊勢利へ預ケ候事、

例之通沖ノ嶋を到来いたし候事、

四月廿九日

一、南鐙壹片

右八肝煎役新次郎死去二付、先格を以如此香儀遣ス、

一、西湖舟木南濱孫七舟二、当四月廿一日当津御蔵御修覆入用之材木積  
請、尤廿八石積之小舟二候へ共、格別急材木二付、水主三人乗組押  
切候而、大物村之見通し壹里余り沖中二而、右孫七悴与八と申もの  
押居候櫓の早緒切レ、「深サ四十尋与申事、」入水致候故、残ル水主  
共相驚、早速櫓竿盤板等なけ入相働候へ共、得取付不申終ニ沈失候而  
無全方舟ハ大物村地先へ漕寄、在所へ知らせ候二付、在所舟持其外  
不取敢、右場所へ罷越、右急材木積受居候舟之儀故、代り水主兩人  
乗替り、無滞大津へ為差登候而、和邇村網方を頼幾辺も網を入死骸  
相尋候へ共、至而水底深キ場所柄二も有之候而、何分相知し不申候  
二付、同廿七日舟年寄甚四郎、舟持惣代甚右衛門罷登り、大津舟方  
御役所へ御訴申上候處、追々御糺ニ相成有之候事、

五月四日、三井寺政所<sup>ろ</sup>竹ノ子拾本、例年之通り到来候事、

五月六日

一、大坂御目附代

井上仲様

松平玄蕃様

右勢田川筋御順見とし而、扇屋関より膳所御座船二御乗船被成、当所<sup>ろ</sup>供船三艘差出し申候事、

扇屋関御出迎、治郎左衛門、孫右衛門、供新八

端午御礼、左之通

石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

御元<sup>ノ</sup>

柴山泰蔵様

//

七里左六郎様

//町役

内堀繁太様

舟方

牧野九郎兵衛様

右四軒へ青銅五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、組屋敷不残、中保町新建并北出雲平殿、名札計二而相勤申候事、

治郎左衛門、六兵衛、供与八

前二留メ御座候舟木孫七船与八与申もの入水一件、今日迄尋被仰

付、猶又湖中搜し被申候へとも不知、勿論近浦江浪寄せも有間敷や、右浦方衆中手配被致搜し被申候へとも不見当、此段御訴被申上候処、京都御窺二相成候由承り候、舟木衆升弥方二逗留いたし被致候<sup>マツ</sup>二付、為見舞五月十三日酒三升遣ス、川七持参、

五月十五日

一、南鐐 壹片

右者当御役所御手代曾根源次郎様、此度町役被仰を蒙候二付、恐悦とし而孫右衛門持参被致事、

五月十八日、鮎三枚堅田網方<sup>ろ</sup>致到来候二付、伊勢利へ預ケ候事、

同十九日、同所<sup>ろ</sup>鮎五枚到来、いせり江預ケ候事、但しあがりかゝり居申也、預ケ置候、

五月廿七日、大濱御印場石垣際ニ女水死人有之候一件、別帳二留有之故略之、

御茶壺御下り御先触

六月三日巳ノ刻、御役所より御配符式通御渡し被成、但し

野洲郡

須原始壺通

飛脚賃

三百五拾文

蒲生郡

南津田始壺通

飛脚賃



四百文

右ハ四日早天和助飛脚ニ遣ス、同夜四つ時ニ歸津致候、如此晚景ニ  
およひ候儀ハ、南津田余程片<sup>カ</sup>辺リ故之事ニ申居候間、已来此辺ハ其  
心得ニ而賃錢申可遣事、

三月十六日、船方御役所<sup>カ</sup>呼ニ参り候付、年寄太郎兵衛罷出候処、  
御掛り牧野九郎兵衛様被仰聞候ハ、此度川口町<sup>カ</sup>大濱江下ル道筋ニ  
門木戸取拵、尤無用之節者昼夜供メ切置可申趣、右町分<sup>カ</sup>願出候ニ付、  
其仲間方差障リ有無申上候様被仰聞候ニ付、左之通書付を以奉申上候、  
乍恐奉願口上書

一、川口町附西山町<sup>カ</sup>字大濱江下ル道筋ニ、此度門木戸取拵、尤無用之  
節者メ切置申度段、右町分<sup>カ</sup>町方御役所へ被願上候旨ニ付、私共被  
召出差障有無御尋ニ付、舟方差障之趣意奉申上候処、町分ニ者勝手  
ニ茂相成候趣ニ付、格別之差支茂無御座候ハ、今一応相考候様被  
仰渡、此上御願奉申上候儀奉恐入候得共、御城米、御給地米等積登  
り候舟ニ而茂、舟込之節、濁水之節坏者、是悲共右大濱崎へ着船不  
仕候而者、外ニ差置候場所も無御座候故、前々<sup>カ</sup>右場所へ差船仕来り、  
又者平日ニ而茂右場所ニ掛り居候船も有之、別而荷物隠積等仕候船、  
右場所江乗出置候儀、儘御座候ニ付、日々昼夜ニ不限私共中ケ間之  
者共見廻リニ罷越候儀ニ御座候処、右躰メ切之門、木戸出来候而者  
通路差留り、甚以差支ニ相成候儀ニ御座候間、何分ニ茂右等之差支  
無之様被仰付被下度、猶又此段奉願上候、願之通御聞濟被成下候ハ、  
重々難有可奉存候、以上、

文化五年辰三月十八日

百艘年寄

与次兵衛

太郎兵衛

大津

御役所

御茶壺御通り日限御延引之御配符

六月十日巳ノ刻、御役所<sup>カ</sup>御配符式通御渡し被成、

但シ

野洲郡須原始老通 飛脚賃四百五拾文

蒲生郡南津田始老通 同 五百文

右飛却<sup>脚</sup>ニ九軒町新藏遣ス、右飛脚賃去ル三日ニ遣し候分<sup>カ</sup>余計懸り  
候へ共、至而急成御配賦故、如此まし申遣ス事、

六月十四日、已下刻御役所<sup>カ</sup>御配符式通参り候、

野洲郡須原始老通 飛脚賃

蒲生郡南津田始老通 右同断

右飛脚ハ同人遣し候事、

前ニ留記有之候、三月八日朝金藏堀より七兵衛船海津行舟積ニ相廻  
し候節、右舟付紋様つきおろし網揚ケ候処、網計ニ而錠無御座、自  
然ニ切れ候義与ハ見へ不申、刃物ニ而切取候様ニ相見へ怪しミ居候  
処、同し側ならひ之治郎左衛門船、忠兵衛船、是も同様之義ニ御座  
候ニ付、右之趣中間へ被申出候故見改候処、怪敷義ニ付難捨置談し、  
孫右衛門<sup>カ</sup>御目附高橋氏江口上ニ而内届ニおよひ置候、然ル処六月  
五日坂本浦比叡辻喜三郎船ニ刈束ね有之候麦を積入、同所北ノ方ニ  
当りからか崎辺ニ而伊吹風吹募り、浪ニ而葭原へ被打付、船すわり  
難儀之躰、村方衆中見兼被参、水底古杭江上り候事哉与被存、振転  
ニ押しおろされ候処、杭ニあらで錠故、怪しミ早束庄屋両家江届ケ、

持帰り見改られ候処、乍三丁銘有、依之六月七日庄屋方人足兩人仕立被申越、則治郎左衛門方迄人足被来、同人義折節他行二候へとも、家内二も能存罷在候義二付、人足を当会所迄遣ス二不及、彼方二而支度させ候上歸村被致候、則二郎左衛門方忠兵衛、川七方へ被相知依之右兩人より当会所へ被申出候、翌八日忠兵衛、川七同道二而比叡辻庄屋方へ参り、挨拶二および、忠兵衛、川七見改られ候処、銘々錠二無相違候二付、先方を請取つれ参り候、忠兵衛艦二積入被歸候、夫二付村方へ之挨拶、左之通、

一、酒式升 比叡辻村庄屋善治郎殿江

一、同式升 同 庄屋甚五郎殿江

一、同三升 大津へ知らせ被来候新六殿 江

伊兵衛殿

一、同壹斗 喜三郎艦二而錠被見当候惣中江

如此錠主三家より挨拶礼物遣し被歸候事、

前文通之義二付、翌十日孫右衛門御目付高橋氏江先達而内届ケ致候事故、右之段申咄為挨拶御礼銀壹兩持参致候処、御同役中江も御咄し置候趣二承候故、川嶋氏、多賀氏江も同様銀壹兩つゝ、十日二持参いたし挨拶申演置事、右謝義ハ中間入用二成候由、

一、六月十八日午刻、從御役所御配符式箱参ル、則左之通例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日より十五日迄二可致持参候、

一、右帳面之内、浦方二より貸船致混乱候間、借り主并貸船屋共入念相改、船毎貸借致符合候様可書出候、

右之趣得其意、此配符致請印無遲滞早々順達、留所を可相返候、以上、

大津

辰六月十八日 御役所御判

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本片田、本片田艦方、西ノ切、釣獵師、今片田、小野、和邇南濱、同北濱、五ヶ浦、南ひら、北比良、南小松、北小松、打下、大溝、大溝艦方、永田、下小川、今在家、藤江、横江、船木南濱、船木横江濱、同北濱、南古賀、新庄、太田、藁園、深溝、針江、森村、馬原、木津、今津、新保、領家、北仰、貫川、桂村、深清水、大沼、中庄、北新保、知内、西濱、海津、大浦、菅浦、月出兩組、岩熊、塩津、片山、石川、東尾上、延勝寺、海老江、安養寺、早崎、下八木、八木濱、大濱、南濱、川道、

右浦々庄屋

船年寄

即日右坂本四ツ屋伊助艦船へ相渡ス、使平兵衛

東浦之分、御文言同断

松本三ヶ所、鳥居川、石山、平津、千町、南郷、外畑、五ヶ浦、関ノ津、太支、黒津、里むら、橋本、神領、大江、大萱新田、大萱新濱、矢橋、南山田、山田、下笠、駒井庄大萱、穴むら、志那、吉田、中むら、津田江、下寺、下物、山賀、森河原、杉江、赤井、矢嶋、大曲、開発、木濱、今濱、水保、戸田、五条、幸津川、小濱、吉川、堤村、安治、須原、野田、比留田、野むら、小田、江頭、田中江、加茂、牧むら、大房、長命寺門前、南津田、舟木、八幡船木、八幡町、多賀、北ノ庄、浅小井、香之庄、常楽寺丸船方、同艦方、豊浦、伊庭、

右浦々庄屋

船年寄

右即刻松本へ新八持参致ス、

右二付貸船屋中へ茂即日廻状相廻シ候事、

但し船屋源助へ相渡す、使平兵衛、

一、六月廿日、若狭蔵裏掛出し橋杭東ノ方江、男死骸浮止り候二付、去ル寛政十式申年之通御頼二付、当仲間へ引請取計致遣候、但し右一件別帳ニ委敷留置、爰ニ略ス、

六月廿七日

一、鮒貳枚 山た網方より到来いたし候、但し一同相揃料理申付候事、

閏六月三日、当所暑氣御伺

石原庄三郎様  
素麵三拾把  
白台二重くり、下ケ札付

御元々

芝山泰蔵様

//

七里左六郎様

//加判町役

内堀繁太様

町役

曾根源次郎様

船方

牧野九郎兵衛様

〆五軒江素麵貳拾把宛

御組頭

佐久間正蔵様

御目附組頭兼帯

高橋角左衛門様

御目附

多賀喜曾太様

//

川嶋文左衛門様

〆四軒へ素麵十五把宛

右之外御門内不残、御手代衆、御組屋敷新建不残并北出氏江手札計二而相勤ル、

太郎兵衛、六兵衛、供五兵衛

六月四日、京都暑氣窺

西御奉行

牧野大和守様  
金子貳百疋

目録台  
下ケ札付

御用人

小熊三郎右衛門様

香西伴助様

中村重右衛門様

神山善太夫様

右四軒へ名札計

御勝手御用人

十九浦九十九様

香西宗吉様

小熊藤四郎様

御取次

嶋田武助様

岡野大助様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

右七軒へ手札計

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

右五軒へ銀壺両つゝ

御公事方下

千賀与三右衛門様

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗助様

山田傳左衛門様

平川伴蔵様

此七軒へ名札計

東御奉行

森川越前守様

金貳百疋

目録台  
下ヶ札付

御用人

小柴宗右衛門様

村田直右衛門様

御勝手御用人

同忠兵衛様

西村昌助様

御取次

松野小右衛門様

柴田栄蔵様

伊藤右内様

鈴木七蔵様

串原三郎兵衛様

右九軒へ名札計

御公事方

上田弥右衛門様

上田釵治郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

又四軒へ銀壺両つゝ

御公事方下

中川李左衛門様

同定右衛門様

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾安右衛門様

中尾勇右衛門様

末吉龍五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

右九軒へ手札計

上町代

田内与助殿 若狭屋八兵衛殿

右銀三匁 右刺鯖式さし

右之通孫右衛門、庄兵衛、相勤申候、ともやとひ新兵衛

覚

一、金貳百疋 糠屋八兵衛

一、白銀壹枚 持参被致候事、

右者從御本山被下置、慥ニ請取申候、以上、

文化五年 百艘印

辰閏六月九日

大津十日講御肝煎中

委細者去寅年留帳ニ在之候事、

閏六月九日

一、素麵三拾把

例之通三井寺政所<sub>る</sub>暑中為御見舞到来候事、

一、閏六月十日過、堅田舟年寄庄兵衛、次郎左衛門方へ被参被申聞候ハ、<sup>御座</sup>「今度」和邇村と堅田浦と舟積之儀ニ付大津御役所へ双方罷出候処、内濟相調候義ニ候ハ、和談可致様と被仰渡候旨、<sup>本二付</sup>勿論右躰隠積仕候義及見聞候へハ、対談を以元舟賃二十割増并誤証文取候仕来<sup>り</sup>三ヶ浦大津、堅田、八幡三ヶ浦とも仕来りニ付、則堅田浦ニも是迄十割増し取置候証文等所持仕罷有候段申立置候、万一各々方へ御尋も御座候ハ、宜敷取合せ申上呉候様と、右庄兵衛、次郎左衛門へ被申聞候ニ付、次郎左衛門答置候ニハ、右十割増之儀者前々<sub>る</sub>隠積出入之度毎御糺有之候処、当浦限之仕来りニ申立置候事故、今更

三ヶ浦之由緒仕来りニ候とも難申上候、乍併若御尋有之候ハ、何浦ニ而も右躰之ぬけ積仕候<sup>者</sup>節有之節、証文計取之等閑之対談仕置候而ハ、一向不相止候ニ付、為取締夫々増銀取候儀候<sup>一</sup>御座候、則堅田浦之儀も前々<sub>る</sub>増銀被取来候由ニ承伝へ罷有候と、御答可申上と申談置候事、

一、閏六月廿三日、御役所<sub>る</sub>呼ニ参、次郎左衛門罷出候処、舟方御手代牧野九郎兵衛様被仰候ハ、去ル寛保之頃諸浦舟株取調之節、其中間方江浦々<sub>る</sub>取置候書付之内ニ、和邇南濱<sub>る</sub>差出置候書付可有之間、持参候様と被仰候ニ付、引取致吟味候処、和邇村之書付者見得不申候故、其時之留帳相糺候処、坂本<sub>る</sub>五ヶ浦迄之間へハ廻状差出無之、<sup>八和邇三不限</sup>全和邇ニ不限舟株有之候浦方計へ廻状を以申遣、舟株無之村々へハ<sup>八和邇三不限</sup>不及尋ニ候振合と相見得候ニ付、猶又罷出、其旨申上置候事、

但其序ニ延享二丑九月十二日、和邇南濱之船、舟木<sub>る</sub>材木積登り候を見付、堅田ニ而其舟差留メ置、百艘惣代仁兵衛義舟方御手代服部丈右衛門様へ御訴申上候処、右材木ハ当津御組同心片岡喜八様御入用木ニ而、同人<sub>る</sub>御頼ニ付堅田舟ニ積替、早速積登り候趣も御座候而、和邇村之舟ハ漁儀之品ニ限運送仕候舟ニ而、諸荷物運送仕候舟ニ而者無御座、依之寛保年中舟株取調へ帳面ニ相認、差上置候帳面之奥ニも、其訳書上有之候段申上置候事、

一、前書ニ留有之候当四月高嶋郡舟木浦孫七舟、則同人忤与ハ、大物村之沖中ニ而入水いたし相果候ニ付、同廿七日舟年寄甚四郎、舟持惣代甚右衛門罷登り、大津御役所へ御訴申上候処、御糺ニ相成、京都御役所江御伺之上、日数十日之内ニ死骸相尋有無申出候様と被仰渡、猶又相尋候へ共、何分知レ不申故、五月十一日舟年寄甚四郎、舟持

惣代七之丞、其段書付を以被申上候処、親孫七并親類と乗組之水主  
式人と村役人、大物村之役人迄も被召出、御糺之上銘々口書被仰付、  
京都へ御伺二相成候処、無程右一同被召出、無故相濟候事、

七夕御礼、左之通、

石原庄三郎様

木札付  
青銅百疋

御元々

柴山泰蔵様

同

七里左六郎様

御町役

内堀繁太様

同

曾根源治郎様

御舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ青銅五十疋宛

右之外御門内御手代衆、組屋敷不残、中保町新建并北出雲平殿、名  
札計二而相勤候事、

治郎左衛門、川七、供五兵衛

当辰七月廿貳日

一、銀壹両

右ハ御門番川田吟助殿実母死去二付、香奠として年寄孫右衛門持参  
二而、悔二参候、尤是迄例格も無之義二候へ共、時節の振合二任せ、  
如此相談之上及取計二置候、仍而向後之義も、其時之振合二応し取

計可然事、

八月朔日、京都御礼

西御奉行牧野大和守様

金三百疋、目錄台、下ケ札

御用人

小熊三郎左衛門様

香西伴助様

神山善太夫様

中村十右衛門様

御勝手御用人

御取次兼帶

十九浦九十九様

御納戸

香西宗助様

小熊藤四郎様

御取次

十九浦九十九様

島田武助様

岡野大助様

横溝市右衛門様

大野萬右衛門様

右拾壹軒江白銀壹両つゝ、

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様



熊倉政吉様

右五軒へ金百疋つゝ

同下組頭兼帯

千賀与惣右衛門様

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗助様

山田傳左衛門様

平川伴蔵様

右七軒へ白銀一両つゝ

東御奉行森川越前守様

御用人

小柴宗右衛門様

西むら昌助様

村田直右衛門様

御勝手方

村田忠兵衛様

兼帯

御取次

松野小右衛門様

柴田栄蔵様

伊東右内様

串原三郎兵衛様

鈴木七兵衛様

右九軒江白銀壹両つゝ

御公事方

上田弥右衛門様

山田釵次郎様

石島五三郎様

塩津惣五郎様

右四軒へ金百疋つゝ

同下

中川奎左衛門様

中川定右衛門様

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉川勝左衛門様

右九軒へ白銀壹両つゝ

上町代

田内与助殿 白銀貳両

下町代

藤澤傳六殿 貳百文

同

藤村佐市殿 同断

上町代中江 五百文

下町代中へ 五百文

東西御門番へ 三百文つゝ

奥田九右衛門殿 白銀壹両

京都鍵屋佐助江 三百文

同断下女へ 貳百文

追分丸屋四郎兵衛江 百文

山科大津屋孫兵衛江 百文

小番へ 三百文

同中番中へ 三百文つゝ

右之通孫右衛門、市兵衛相勤る、供五兵衛、荷物 and 助

✂金三両三步

銀壹両包 三十八包

銀貳両 壹つ

鳥目五百文つゝ 貳つ

同三百文つゝ 六つ

同貳百文つゝ 三つ

同百文つゝ 貳つ

八月朔日、大津御礼

石原庄三郎様 金貳百疋、目録台、下ケ札

柴山泰蔵様

七里佐六郎様

内堀繁太様

曾根源次郎様

船方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ金百疋つゝ

御目附

高橋角左衛門様

川嶋文左衛門様

多<sup>賀</sup>喜曾太様

小頭

佐久間正蔵様

右四軒へ銀壹両つゝ

船方

北出雲平殿銀壹両

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

小野惣九郎殿

町代  
堀猪三郎殿  
同  
遠藤十五郎殿

右四軒へ銀壹両つゝ

宿場肝煎

吉本弥四郎殿

山本兵五郎殿

鳥目廿疋つゝ

御足輕半七殿 御小遣藤七殿

外二同壹人

右両人江貳百文つゝ

御門番吟助殿五百文

御袋へ貳百文

右吟助殿義御袋死去二付、慎中故鳥目并札茂不勤候事、

当日二八不相勤、追而遣候積二候事、

此外

白崎久太夫殿、御蔵番三人

組屋敷不残、御門内御手代衆

平蔵町年寄、右者手札計、

年寄治郎左衛門、太郎兵衛、供平兵衛相勤る、

✂金壹両三步

銀壹両つゝ 九つ

鳥目貳百文つゝ 五つ

同五百文 壹つ

一、前聞六月之所二留有之、和邇南濱村と堅田浦との出入之義二付、今八月三日当中間年寄与次兵衛、次郎左衛門御役所へ被召、舟方御懸り牧野九郎兵衛様被仰候ハ、右出入中二和邇中濱、北濱両村役人取嘜仕内済相調、和邇南濱方堅田方へ差入候書付一段二相成候処、嘜之村役印難仕旨断申二付、又候破談二可相成様子二付、於御役所二双方へ再応利解申聞候得共、何分双方共納得も不致弥吟味詰、裁許を請候ハ、後悔致共難叶笑止二思召、其方共勘弁を以和談取計可遣旨被仰渡候二付、即刻双方を会所へ招寄再応申談、村役之代り二舟方役印形二て、双方共得心被致候処、今一条一札文言之内二、旅人者勿論と認有之候を除呉候様と、南濱之者共申出、埒明不申候へ共、段々利解申聞、其儘二て漸得心為致候儀二付、以来舟積之儀和邇方二者聊之儀二而も堅田へ相断、差構二不成分ハ貫積候義と相心得、堅田方二も差構二不相成、聊之儀ハ乍此上為積遣候旨二取計可然候、万一其上二も故障ケ間敷義出来候節ハ、一応ハ此方共へ被申聞候上二て、取計可被申旨、双方列席二おゐて申聞置、同五日済状奉差上、於御前二一同被召出被為聞済、以来右躰申分仕間敷旨之御請証文被仰付、其跡二て殿様御直々百艘舟年寄与次兵衛、次郎左衛門、其方共右出入取嘜内済候段、太儀との御意被下置候事、右御役所へ差上候済状之写書老通二一同調印為致、別紙二取置、御箱へ納置有之候故、爰二ハ留置不申候事、

八月三日

一、小舟入いせ屋甚兵衛、柳屋次兵衛、舟屋嘉兵衛、京都若丸講中と合躰いたし、伊勢両大神宮江奉献常夜灯一基仕立可申間、土台之筑地并御願一件等ハ中間寄進二被成下、小舟入渡舟場二相建候様取計呉

候様と申出候二付、中間相談之上夫々へ懸ケ合地所相定、御役所へ御願申上候事、

但し此一件之始末別帳二相記有之、爰二ハ略ス、

一、九月朔日、石山村方松茸甘本到来候事、

上田弥右衛門様、高五千石、江戸常住御旗本二而、江州野洲郡服部村二御陣屋有之、同郡小濱、吉川辺御知行二候、

上田主水様、高三万石、尤當時藝州御家老分二候処、御一代二壹度者御参府有之、公儀御用も御勤被成候家柄之由二候へ共、右弥右衛門様と御先祖ハ御親子之御間柄二候故、今度之御縁組有之由、

右主水様御妹子を政右衛門様方へ御迎ひ取被成候二付、屋形附之大船壹艘かり請申度旨、御藏元伊勢屋清次郎被頼参、尤例年山王神事御召之屋形かり受度様二被申候へ共、宮門跡、堂上方之外是迄相對貸之船二用ひ候例も無之事故、御役所へ内伺二も不及相用ひ候義もいかゝ二存候故、御奉行船屋形を遣し候筈二申談置候処、八月廿八日京都方右清次郎方へ御着被成、翌早朝御乗舟之積二被申参候処、右御奉行舟之屋形二ハ両便所無之候故、前々日朝方やかた取組置候処、清次郎方方大工手伝参り、廿八日中二取繕ひ被申候、

一、右之舟中間差当方之儀ハ、其節居合候舟之内至而古舟之分ハ相除、圖取二而相極可然との評儀二候処、俄二相成、左様之手間取候取計二及難居折柄、長三郎舟可遣と被申、幸ひ新造二も候故、格外之取計を以、早速長三郎舟差急仕立させ候事、

一、右舟賃屋形附大舟壹艘代金五百疋、外二加子賃壹人前三百四十八文宛、障子屋形水主三人懸り之小舟壹艘ハ、舟賃、水主賃とも二而貳貫五百文、同苦ふきハ貳貫貳百文二相極置候処、御供舟之分ハ御

領分小濱、吉川を参、勿論大舟之水主も右村々を参候筈二候間、大

舟壹艘水主なし二かり受度旨被申候故、此方水主三人可遣間、残り  
ハ村方を乗り被申可然候、且又御迎ひ二参候舟二御積入被成候分ハ、  
荷物、人共乘前相懸り候段も申聞置候、

一、廿八日夕方、吉川船持伊左衛門被申参候二ハ、差懸り水主不足之儀  
出来候処、只今より在所へ申遣候而も間二合不申当惑仕候間、何卒  
水主七人申付呉候様、無扨被相頼候付、小舟入申遣拵遣申候、

但し此賃銭老人前壹貫文宛、内六百文ハ水主へ遣、四百文ハ雜用  
代として舟主長三郎へ相渡候、

一、廿九日早朝、熊の川へ舟相廻し、夫迄陸地御出被成、五つ時前御乗  
舟有之、別而日和よく八つ時過、吉川浜へ御着舟候処、右場所二御  
休所建網漁有之、此方舟ハ同夜九つ時無滞帰津候事、  
一、小濱、吉川舟へ積入之品改二遣候処、左之通、

荷物三駄、乗物四挺、打上壹丁

長持壹棹

いろく十三荷、人数廿九人

メ

覚

一、金五百足

屋形附大舟壹艘

一、銭壹貫四十八文

右舟水主三人、壹人二三百四十八文つゝ、

一、同七貫文

まし水主七人、壹人二壹貫文つゝ、

是ハ廿九日夕差懸り吉川伊左衛門を被頼候付、俄二小舟入之水主雇  
立遣候分、

一、同壹貫五百文

おし切小舟壹艘、水主貳人乗

是ハ御出舟之後御弁当被遣候由二而、俄二仕立立遣候分

一、銀三十四匁三分四り

吉川、小濱舟へ積入のりまへ

銭三百貳文

此訳

六匁九分

御荷物三駄 壹太貳匁三分つゝ、

十貳匁貳分

御乗物四挺 壹挺三匁五厘つゝ、

貳匁三分

打上かこ壹丁

貳匁三分

御長持壹棹

拾匁六分四り

いろく十三荷<sup>(四之)</sup> 壹ヶ七分六りつゝ、

銭三百貳文

御人数貳十九人 御老人前拾文つゝ、

小メ三十四匁三分四りと

銭三百貳文

惣メ金壹兩壹歩

銀三十四匁三分四り

銭九貫八百五拾文

右之通御座候、以上、

辰九月二日

百艘印

上田弥右衛門様御用達

伊勢屋清次郎殿

覚

一、金壹兩壹歩

一、銀三十四匁三分四り

一、銭九貫八百五拾文

メ

右之通慥ニ受取申候、以上、

辰九月四日

百艘印

上田弥右衛門様御用達

伊勢屋清次郎殿

右之内払

一、金貳歩 舟代

一、壹貫四十八文<sup>(△△)</sup> 水主三人代、壹人三百四十八文つゝ、

一、五百文 右水主まし錢

一、貳貫八百文 惣水主十人分飯代

△金貳歩と

四貫三百四十八文 舟主長三郎へ渡す、

一、壹貫貳百文 おし切小舟水主貳人代

一、四貫貳百文 大船水主七人代

△五貫四百文 小舟入水主九人へ渡す、

一、五百文 右用向懸り

廻りと八、平兵衛へ心付

払△金貳歩、錢拾貫貳百四十八文

外二桐油三枚<sup>②</sup>かり賃有之事、

差引△凡八拾目計 中間助成也

外二酒五升 右之為挨拶いせ屋清二郎<sup>①</sup>到来、

同三升 同断吉川伊左衛門<sup>①</sup>到来、

一、從御役所御先ふれ貳通御渡し被成候内、壹通ハ栗太郡駒井沢村より

急御書付、矢橋<sup>①</sup>早々相届候様被仰付候故、其趣認メ書状付遣ス、

九月十一日巳下刻、矢橋浦次右衛門舟三各江渡、

一、殿様浅井郡辺御検見二付、明十二日曉七つ時御出立御乗船之旨、船  
貳艘被仰付候、

九月節句御礼

石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

柴山泰藏様

七里左六郎様

内堀繁太様

曾根源二郎様

牧野九郎兵衛様

此五軒へ青銅五十疋つゝ、

右之外御門之内御手代衆、組屋敷不残、中保丁新建并北出雲平殿、  
名札計にて相勤候事、

孫右衛門、庄兵衛、供五兵衛

外二鳥目五拾疋 御門番吟助殿

同 貳拾疋 御同人御内儀へ、八朔預り之分

右八朔二八忌中二付差扣へ置、今節句御礼之序二相勤候事、

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方二而掛改候間、得其意  
納人印形持参可致候、以上、

湖上船運上銀来月朔日<sup>①</sup>五日迄二持参上納可致候、遲滞致間敷候、  
此配賦令請印早々順達、留り所<sup>①</sup>可相返候、以上、

<sup>(割書印影写)</sup>

九月十五日

御役所印

大津

大津浦始り

川道まで

右浦々

庄屋

船年寄

右八十五日未ノ刻下坂本甚蔵へ渡す、使新八

一、御文言、右同断

松本浦始り

伊庭まで

右ハ十五日、松本村へ廻り新八為持遣入、

口演

一、船御運上銀来月朔日ハ五日まで二無遅滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所ハ百艘会所へ御返可被成候、以上、

辰九月十五日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、五郎八、善兵衛、源六

九月廿日

一、白銀壹両

右ハ問屋肝煎吉本孫三郎実父弥四郎殿死去二付、香奠遣入、尤是迄例無之候得共、渡舟方割増等二付相頼候義有之、既二当三月右同役山本祐九郎殿死去之節も銀壹両遣有之故、此度も如此取計置候、併後々之儀ハ其節之依仕宜取計可申事、

覚

一、百貳拾銅 壹つ

一、四拾八銅 壹つ

一、三拾六銅 貳つ

一、貳拾四銅 壹つ

一、拾貳銅 拾九

ノ

右之通奉納仕候、以上、

辰九月廿一日

大津

百艘

貴布祢御社中

一、九月廿一日、貴船神酒例之通不相替役人出勤、祝ひ申事、

但し与次兵衛、三郎兵衛、勘三郎、庄兵衛、今七、

右差支在之趣二而断、不参候事、

十月朔日辰中刻、御所司代阿部播磨守様御案内方、御組同心衆川下供御之瀬辺為御下見御越被成候二付、小船壹艘加子三丁仕立遣候事、則御役人御名前、左之通、

向坂熊太郎様、中村武左衛門様、喜多川安之進様、中川新八様、黒岡幸三郎様、外二御供五人、

一、当九月尾花川町徳兵衛持艀作事方為滞候二付、船大工仲間へ及懸合候一件、別紙帳面二記有之候故、略爰二、

一、当所郡山御蔵裏石垣、当仲間へ何之無達新規二積出し被致候二付、右御蔵所仲日野屋五兵衛へ及懸合一札取置候而、空地一件之内へ入置候事、

一、十月十一日申中刻、從御役所御運上不納二付、御催促之御配符壹通参ル、

今堅田釣漁師

舟木北濱

南古賀

太田

森むら

馬原

今津

北仰

貫川

桂村

岩熊

延勝寺

八木濱

大濱

南濱



川道

右浦々庄屋、船年寄

十二月十六日片田卜七江遣入、

一、十月十五日、日光宮様関東御下向二付、御道中御警護与して京都当  
東御奉行森川越前守様御供二御付御下り二付、追分迄御出迎、孫右  
衛門、川七兵衛、供和助、石場迄御見送り、右同人相勤メ候事、  
右宮様ハ三親王之内有栖川親王家御兄也、先達而南都御宮家一条院  
江御入被遊、当院御住職之处、関東御台命を以御移伝被為仰出、日  
光御門室二御極へ被遊、此度関東へ御下向被遊候事、尤四年已前享  
和四年子年秋関東江御入興被有らせ候樂姫様之御兄公也、

十月廿四日午刻、当御役所々山田始メ幸津川迄之御配賦壹箱参候二  
付、早速山田市右衛門船之巳之助へ相渡、

十一月十七日

一、米壹俵

右ハ石山寺々例年之通到来いたし候事、

十一月廿五日、当所寒氣見舞

石原庄三郎様

真鴨壹懸

二重操白木台二のせ  
下ケ札付ル、

御元々

柴山泰蔵様

七里左六郎様

内堀繁太様

曾根源次郎様

船方

牧野九郎兵衛様

右ハ南鐙一片宛

小頭

佐久間正蔵様

目付

高橋角左衛門様

川嶋文左衛門様

多賀喜曾太様

右白銀一両つ、

メ

右之通相勤ル、与二兵衛、孫右衛門、供五兵衛

京都寒氣窺

東

一、森河越前守様

真鴨壹掛

御用人

小柴惣右衛門様

※ 村田直右衛門様

御手勝方

西村畠助様

村田忠兵衛様

御取次

松野小右衛門様

柴田栄蔵様

伊藤右内様

串原三郎兵衛様

御門内組屋敷、新建

手札計二而

北出雲平殿

手札計

鈴木七藏様

右八名札計

御公事方

上田弥右衛門様

山田釵治郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

右八南鐐沓片宛

同御下役

中川奎左衛門様

中川定右衛門様

櫛橋平藏様

喜多尾八郎右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝右衛門様

右八名札計

(※箇所に横書)

「日光様ニ御付添御参府ニ付、此節御留主中ニ候へ共、定例之通ニ相勤申候、」

西

牧野大和守様

真鴨沓掛

御用人

小熊三郎左衛門様

香西伴助様

神山善太夫様

中村重右衛門様

御勝手御用人

十九浦九十九様

香西宗吉様

小熊藤四郎様

御取次

嶋田直右衛門様

岡野大助様

横溝市右衛門様

大野萬左衛門様

右八名札計

御公事御用人

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

右八南鐐沓片つゝ

//下役

上田八藏様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井惣助様

山田傳左衛門様

平川伴藏様

浅賀和作様

右ハ名札計

町代

田内与助様 銀三匁

若狭屋八兵衛殿 ひとり壹羽

右之通十一月廿七日<sup>六</sup>登り、京廿七日期二相勤、

孫右衛門、千二郎、供、五兵衛

覚

一、御納豆 五拾把

右者從御前様例年之通被下置、難有頂戴仕候、以上、

文化五辰十二月三日

百艘印

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子 百疋

右者從当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶、從御前被下置慥頂戴仕候、以上、

辰十二月三日

百艘印

松岡市左衛門様

十二月朔日

一、堅田釣獵師惣代竹端宗兵衛殿ヨリ、寺之石塔壺組断ニテ船積致度段、手紙被差越、当夏二茂氏神やね板少々計乗前用捨致在之、其節右為

礼わたり廿計到来二付、乗前々者余程直打之品之よし、依之此度之所茂用捨致遣候、尤片田藤七江申渡候者、此度之儀者御頼之通積遣候得共、度々御断在之、勿論身分之荷品ニ而茂無之候へ者、重而者其心得<sup>容易ニ</sup>ニテ用捨難致候間、其段御心得可被成と申置候、

右二付十二月十九日、ます壺本、礼状ヲ添、右宗兵衛殿を来り候、右貝屋半六へ預置候、

但し釣獵師之儀者平生湖中ニ在之候衆中二付、少し其心得ヲ致置候、

一、十二月朔日、矢橋浦喜左衛門殿被參被申候ハ、山田浦木内小兵衛殿方へ石を積取度候間、此段其御仲間江達し置候様被申越候間、左様二心得呉候様被申候二付、当番々如何様之頼ニ而御座候哉与相尋候処、彼人も委敷事ハ不存由ニ而、只木内より之伝言而已との事ニ而難相分り候故、猶追便承り度申入置候処、同三日山田問や孫右衛門殿木内小兵衛殿より之書状持参ニ而被申候ハ、此間喜左衛門を以相達し御座候石之儀、弥明日京都石工方を当津着ニ而、則山田浦船を相廻し積移し候間、左様二相心得呉候様被申候二付、いしハ如何程之ものニ而御座候哉与相尋候処、石塔壺組也、凡才数八十才余之由ニ被答候二付、左程之大形成品ハ定法乗前被相立候上積取可被成与申聞候処、孫右衛門被申候ハ、是まで木内方ニハ乗前等出し候例無之既ニ先年つり鐘積取候節も只御達し而已ニ而早速積歸り申候、則留記も有之候、何分初前々之趣ニ而通し呉候様達而被申、此方々申聞候ハ、成程木内氏之儀ハ前辺先役入魂合御頼任せ、当浦を乗船被成候砌ハ、身付之分或ハ着物用之類ハ用捨を付来候、依之例年御会釈御座候、其外之義ハ睨而定法乗前被相立候筈之趣を申聞ケ候処、孫右衛門殿被申候ハ、此度之義ハ御酒料与して差出し候間、其趣ニ而承知いたし呉候様被相頼候へとも、何分定法乗前可被相立旨申入候

処、則石塔絵図持参被致、石塔者伊勢甚着ケ、嶋関<sup>（マツ）</sup>舟積二付、右絵図与引合せ見改メ候上、才数<sup>（マツ）</sup>拾壹才貳部、石ハ壹尺四方、壹才壹組二付卅五文宛、此乗前舟賃四百八十文、十二月四日請取候事、全舳先方顕露ニハ不被申候へとも、乗前与して出し候而ハ家之規模ニ拘り候様との億心ニ含ミ相見へ、已前入魂合を以計置候儀ニ相泥ミ、今以ハ諸色一円乗前ハ不出格与相心得被居、下地入魂合之意味亡失被致、心得違増長いたし候而ハ不宜、得与山田孫右衛門殿江申入置、如此乗前受取申事、

覚

一、炭貳俵

右者朽木兵庫之助様<sup>（マツ）</sup>例年之通被下置、慥ニ受取申候、以上、

文化六年

百艘

己巳二月二日

升屋市左衛門殿

目録

- 一、能登川船揚之義ニ付遣し候書状之写、
- 一、西七兵衛殿再勤之事、
- 一、六兵衛船道下りホクソゆるみ候難風之事、
- 一、大濱ニ而男産子死骸有之、川口町<sup>（マツ）</sup>手切ニ御訴被申上候事、
- 一、測量御役人御登り之事、
- 一、勢田利右衛門<sup>（マツ）</sup>艀流失御廻状、
- 一、川七兵衛舟、治郎左衛門舟、忠八舟、右三艘之錠縄切取候事、
- 一、山本祐九郎死去香典之事、
- 一、杉江浦こやし取入水之事、

- 一、酒屋甚兵衛持地面ニ艀囲出来之事、
- 一、舟木孫七舟材木積登り候節孫七悴入水之事、
- 一、曾根源次郎様町役被仰蒙候事、
- 一、大濱御印場ニ女水死人一件、
- 一、大濱へ下ル道筋ニ門木戸、川口町<sup>（マツ）</sup>願出候一件、
- 一、若狭藏裏ニ男死骸浮上り候事、
- 一、和尔村と片田浦と舟積出入之事、
- 一、御門番吟助殿老母死去之事、
- 一、小舟入浜ニ常夜灯一件、
- 一、上田主水様と同弥右衛門様へ御縁組有之候ニ付いせや清治郎<sup>（マツ）</sup>被頼館大舟差出候事、
- 一、吉本弥四郎殿死去ニ付香典遣し候事、
- 一、尾花川町徳兵衛持艀作事方為滞候ニ付舟大工仲間へ掛合一件、
- 一、郡山御藏裏石垣積出しニ付掛合一件、
- 一、日光宮様御下向ニ付東御奉行様御警固被成候ニ付御出迎、
- 一、堅田釣獵師惣代<sup>（マツ）</sup>石塔舟積之断、
- 一、山田木内小兵衛殿<sup>（マツ）</sup>石塔壹組舟積ニ付乗前受取候事、

（裏表紙）

八拾三番

百艘

「大津百艘船万留帳」全体目録

| 番号 | 年号           | 番附   | 原本 | 抜書帳 | 収録 |
|----|--------------|------|----|-----|----|
| 1  | (延宝九年～天和三年)  | 番附外  | ○  | —   | 1  |
| 2  | (元禄二年～享保十六年) | 八番   | ○  | ×   |    |
| 3  | 安永三年(断簡)     | 不明   | △  | ×   |    |
| 4  | 天明四年(断簡)     | 五十九番 | △  | ×   |    |
| 5  | 寛政八年         | 七十一番 | ○  | ×   |    |
| 6  | 寛政九年         | 七十二番 | ○  | ×   | 2  |
| 7  | 寛政十年         | 七十三番 | ○  | ×   |    |
| 8  | 寛政十一年        | 七十四番 | ○  | ×   |    |
| 9  | 寛政十二年        | 七十五番 | ○  | ×   |    |
| 10 | 寛政十三年        | 七十六番 | ○  | ×   | 3  |
| 11 | 享和二年         | 七十七番 | ○  | ×   |    |
| 12 | 享和三年         | 七十八番 | ○  | ×   |    |
| 13 | 享和四年         | 七十九番 | ○  | ×   |    |
| 14 | 文化二年         | 八十番  | ○  | ×   | 4  |
| 15 | 文化三年         | 八十一番 | ○  | ×   |    |
| 16 | 文化四年         | 八十二番 | ○  | ×   |    |
| 17 | 文化五年         | 八十三番 | ○  | ×   |    |
| 18 | 文化六年         | 八十四番 | ○  | ×   |    |
| 19 | 文化七年         | 八十五番 | ○  | ×   |    |
| 20 | 文化八年         | 八十六番 | ○  | ×   |    |
| 21 | 文化九年         | 八十七番 | ○  | ×   |    |
| 22 | 文化十年         | 八十八番 | ○  | ○   |    |
| 23 | 文化十一年        | 八十九番 | ○  | ○   |    |
| 24 | 文化十二年        | 九十番  | ○  | ○   |    |
| 25 | 文化十三年        | 九十一番 | ○  | ○   |    |
| 26 | 文化十四年        | 九十二番 | ○  | ○   |    |
| 27 | 文化十五年        | 九十三番 | ○  | ○   |    |
| 28 | 文政二年         | 九十四番 | ○  | ○   |    |
| 29 | 文政三年         | 九十五番 | ○  | ○   |    |
| 30 | 文政四年         | 九十六番 | ○  | ○   |    |
| 31 | 文政五年         | 九十七番 | ○  | ○   |    |
| 32 | 文政六年         | 九十八番 | ○  | ○   |    |
| 33 | 文政七年         | 九十九番 | ○  | ○   |    |
| 34 | 文政八年         | 百番   | ○  | ○   |    |
| 35 | 文政九年         | 百一番  | ○  | ○   |    |

| 番号 | 年号           | 番附    | 原本 | 抜書帳 | 収録 |
|----|--------------|-------|----|-----|----|
| 36 | 文政十年         | 百二番   | ○  | ○   |    |
| 37 | 文政十一年        | 百三番   | ○  | ○   |    |
| 38 | 文政十二年        | 百四番   | ○  | ○   |    |
| 39 | 文政十三年        | 百五番   | ○  | ○   |    |
| 40 | 天保二年         | 百六番   | ○  | ○   |    |
| 41 | 天保三年         | 百七番   | ○  | ○   |    |
| 42 | 天保四年         | 百八番   | ○  | ○   |    |
| 43 | 天保五年         | 百九番   | ○  | ○   |    |
| 44 | 天保六年         | 百十番   | ○  | ○   |    |
| 45 | 天保七年         | 百十一番  | ○  | ○   |    |
| 46 | 天保八年         | 百十二番  | ○  | ○   |    |
| 47 | 天保九年         | 百十三番  | ○  | ○   |    |
| 48 | 天保十年         | 百十四番  | ○  | ○   |    |
| 49 | 天保十一年        | 百十五番  | ○  | ○   |    |
| 50 | 天保十二年        | 百十六番  | ○  | ○   |    |
| 51 | 天保十三年        | 百十七番  | ○  | ○   |    |
| 52 | 天保十四年        | 百十八番  | ○  | ○   |    |
| 53 | 天保十五年        | 百十九番  | ○  | ○   |    |
| 54 | 弘化二年         | 百二十番  | ○  | ○   |    |
| 55 | 弘化三年         | 百二十一番 | ○  | ○   |    |
| 56 | 弘化四年         | 百二十二番 | ○  | ○   |    |
| 57 | 弘化五年         | 百二十三番 | ○  | ○   |    |
| 58 | 嘉永二年         | 百二十四番 | ○  | ○   |    |
| 59 | 嘉永三年         | 百二十五番 | ○  | ○   |    |
| 60 | 嘉永四年         | 百二十六番 | ○  | ○   |    |
| 61 | 嘉永五年         | 百二十七番 | ○  | ○   |    |
| 62 | 嘉永六年         | 百二十八番 | ○  | ○   |    |
| 63 | 嘉永七年         | 百二十九番 | ×  | ○   |    |
| 64 | 安政二年         | 百三十番  | ×  | ○   |    |
| 65 | 安政三年         | 百三十一番 | ×  | ○   |    |
| 66 | 安政四年         | 百三十二番 | ×  | ○   |    |
| 67 | 安政五年         | 百三十三番 | ×  | ○   |    |
| 68 | 安政六年         | 百三十四番 | ×  | ○   |    |
| 69 | 安政七年<br>万延元年 | 百三十五番 | ×  | ○   |    |

※「原本」の○は原本が残っているもの

「抜書帳」の○は「留帳目録抜書帳」に記載のあるもの

〔天津古文書輪読会会員〕（順不同）

秋山恭伸 麻田有代 片岡良昭

鍬田清美 高正昭 谷玲子

橋本豊 林俊介 樋口晶美

福野修三 藤村正人 河野敏子

大村知永子 小浜麻里子 才田是

井上知枝

大津市歴史博物館調査報告書6

大津百艘船万留帳 4

編集・発行

大津市歴史博物館

〒五二〇—〇〇三七

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七—五二一—二二〇〇

発行日

令和六年（二〇二四）三月三十一日

印刷

有限会社竹田謄写堂